

すまに立返る御心ばへもあれど、女は憂きに懲り給ひて、昔の様にあひしらへ聞え給はず。なか／＼所狭う、さう／＼しう世の中を思さる。

- 院 朱雀は讓位後
- 斯く 今迄とは違つて我が子が東宮となる云々幸福。
- この大臣 源氏。
- 入道後の宮 藤壺
- 御封 倭祿。
- 御行ひ 佛道修行
- 出入りも 宮中に
- 見奉り 冷泉を。
- 太后 弘徽殿。
- 大臣 源が弘徽殿の恥ぢるまで世話をやく。
- 兵部卿親王 紫の父。
- 御心ばへ 源の流
- 請中源に對して冷淡

院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましけにておはします。女御更衣皆例のごと侍ひ給へど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めき給ふ事もなく、かんの君の御覺えにおし消たれ給へりしを、斯くひき違へめでたき御さいはひにて、離れ出でて宮に添ひ奉り給へる。この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心よせに、何事をも聞え通ひて、宮をも後見奉り給ふ。入道後の宮、御位を改め給ふべきならねば、太上天皇になすらへて、御封賜はらせ給ひ、院司どもなりて、様ごとにつくしう、御行ひ功德のことを、常の御營みにておはします。年頃世に憚りて出入りも難く、見奉り給はぬを、いぶせく思しけるに、思す様にて参り退で給ふも、いとめでたければ、太后は、憂きものは世なりけりと思し歎く。大臣は事に觸れて、いと恥かしけに仕うまつり、心寄せ聞え給ふも、なか／＼いとほしけなるを、世の人も安からず聞えけり。兵部卿親王、年頃の御心ばへのつらく思はずにて、唯世の聞えをのみ思し憚り給ひし事を、大臣は憂きものに思しおきて、昔の様に睦び聞え給はず。なへ

- この 兵部卿には
- 太政大臣 葵の父
- 權中納言の 頭中將娘、母右大臣四女
- 参らせ 女御に。
- 中の君 紫の異腹の妹。
- さやうに 入内させよう。
- 大臣は 源は中君の出世を望まない。
- 如何し 兵部卿はさぞお困りたらう。
- 仕うまつる 明石の上例年住吉へ参詣
- かしこまり お詫び。
- の、しり 大騒ぎ
- 月日も 悪い日に來合はせたものだ。
- 身の程 卑しい身分。
- さすがに 今日出會ふのも深い縁がある。
- 色ふし 光榮。

ての世には、普くめでたき御心なれど、この御あたりは、なか／＼情なきふしも打交せ給ふを、入道の宮は、いとほしう本意なき事に見奉りたまふ。世の中の事、たゞ半ばを別けて、太政大臣この大臣の御儘なり。權中納言の御女、その年の八月に参らせ給ふ。祖父大臣居起ちて、儀式などいとあらまほし。兵部卿の宮の中の君も、さやうに志して傅き給ふ名高きを、大臣は、人より勝り給へとしも思さずなむありける。如何し給はむとすらむ。その秋住吉に詣で給ふ。願どもはたし給ふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中のすりて、上達部殿上人、我も／＼と仕うまつり給ふ。折しもかの明石の人、年毎の例の事にて仕うまつるを、去年今年さはる事ありて怠りけるかしこまり、取重ねて思ひ立ちけり。船にて詣でたり。岸にさし著くる程見れば、の、しりて詣で給ふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神寶を持て續けたり。樂人十列など、装束を整へ容貌を擇びたり。誰が詣でたまへるぞ。」と問ふれば、「内大臣殿の御願はたしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり。」とて、はかなき程の下司だに心地よけに打笑ふ。けに淺ましう、月日もこそあれ、なかなかこの御有様を遙かに見奉るに、身の程口惜しうおほゆ。さすがにかけ離れ奉らぬ宿世ながら、斯く口惜しき際のものだに、物思ひなけにて、仕うまつるを色ふしに思ひたる

○心にかけて 源の事を。

○青色 袍の色。

○右近の丞 伊豫介の子「思へばつらし賀茂の瑞籬」ミ詠んた事須磨の巻に見ゆ

○教負 衛門尉。

○佐 衛門の次官。

○赤衣姿 五位の袍

○見し人 明石の上

○何事思ふらむ 心配もなさうに。

○御車 源の。

○河原の大臣 源融

○みづら 童の髪髻

○作り合はせて 皆揃へに著飾らせて。

○様 夕霧だけは。

○雲井 夕霧の姿が

○御まうけ 雲霧。

○立ちまじり 此の貴き人々の中に。  
○中空 本意なく。  
○夢にも 明石の上の來た事を。  
○いろ／＼ 神事。  
○神の御徳 源の歸京の願ひが叶つた事  
○聞え 惟光が源に  
○住吉の 流謫中の事を思へばまづ悲しくなります。  
○荒かりし 須磨の暴風の災の際にも。  
○聞ゆれば 源の耳にも入つたから。  
○神の御しるべ 是れも神の御引合也。  
○なか／＼に 明石の上が源を遠目に見乍ら手紙も貰へないのを却て思しく思ふ  
○七瀬 祓をする所が難波に七箇所ある  
○よそほし 厳しく  
○今は同じ 拾遺「能ひぬれば今はた同じ難波なる身を盡しても逢はむぞ思ふ。」

に、何の罪深き身にて、心にかけて覺束なう思ひ聞えつ、斯かりける御響きをも知らで立出でつらむなど、思ひ續くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なる中に、花紅葉をこき散らしたると見ゆる、袍のきぬの濃き薄き數知らず。六位の中にも藏人は青色著く見えて、かの賀茂の瑞籬怨みし右近の丞も、教負になりて、ことごとくしける隨身具したる藏人なり。良清も同じ佐にて、人より殊に物思ひなき氣色にて、おどろおどろしき赤衣姿いと清けなり。すべて見し人々ひきかへ花やかに、何事思ふらむと見えうち散りたるに、若やかなる上達部殿上人の、我も／＼と思ひ挑み、馬鞍などまで飾を整へ磨き給へるは、いみじき見物に田舎人も思へり。御車を遙かに見やれば、なか／＼心やましくして、戀しき御影をもえ見奉らず。河原の大臣の御例をまねびて、童隨身を賜はり給ひける、いとをかしけに装束き、みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、長姿整ひ美しけにて、十人様異に今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬添童のほど、皆作り合はせて、様變へて装束き分けたり。雲井遙かにめでたく見ゆるにつけても、若君の數ならぬさまにて物し給ふをいみじと思ふ。いよく御社の方を拜み聞ゆ。國の守参りて、御まうけ、例の大臣などの参り給ふよりは、殊に世になく仕うまつれ

りけむかし。いとはしたなければ、明石立ちまじり、數ならぬ身の聊かの事せむに、神も見入れ數まへ給ふべきにもあらず、歸らむにも中空なり。今日は難波に船さし止めて、祓をだにせむ。」と漕ぎ渡りぬ。君は夢にも知りたまはず、夜一夜いろ／＼の事をせさせたまふ。まことに神の喜び給ふべき事を爲盡して、來しかたの御願にも打添へ、あり難きまで遊びの、しり明したまふ。惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立出で給へるところに侍ひて、聞え出でたり。

住吉のまづこそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば  
けにと申し出でて、

荒かりし浪のまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする  
驗ありなど宣ふもいとめでたし。かの明石の船、この響きにおされて、過ぎぬる事も聞ゆれば、知らざりけるよと哀れにおほす。神の御しるべ思し出づるも疎かならねば、聊かなる御消息をだにして心慰めばや、なか／＼に思ふらむかしと思す。御社立ちたまひて、所に逍遙を盡したまふ。難波の御祓など、殊に七瀬によそほしう仕うまつる。堀江のわたりを御覽じて、「今はた同じ難波なる。」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のも

○さる召し 人に手紙を書く御用。  
 ○みをつくし 身を盡しに落標、縁に江にかけた。  
 ○かしの心 事情  
 ○駒並べて 源氏一行の歸り行くのを明石の上が眺めて。  
 ○つゆ許り 短い手紙。  
 ○敷ならで つまらぬ私は何事にも甲斐のない身なのに何故源を思ひ初めたのか  
 ○御祓の物 木綿に此の歌をつけて源に  
 ○露けさの 田蓑の名はあるが我が涙の露を防がず流滴中と同様に濡れてゐる。  
 ○御心に 明石の上が。  
 ○淡き方 輕薄な。  
 ○おのが心を 遊女達が得意さうに。

と近き惟光、承りやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐に設けたる、柄短き筆など、御車とゞむる所にて奉れり。をかしと思して、疊紙に、  
 源  
 みをつくし戀ふるしるしにこ、までも廻り逢ひける縁は深しな  
 とて賜へれば、かしの心知れる下人してやりけり。駒並べてうち過ぎ給ふにも心のみ動くに、つゆ許りなれど、いとあはれにかたじけなく覺えて、打泣きぬ。

明石  
 數ならで難波のこともかひ無きなどみをつくし思ひそめけむ  
 田蓑島に御禊仕うまつる、御祓の物につけて奉る。日暮方になり行く。夕潮満ち來て、入江の鶴も聲惜しまぬ程のあはれなる折柄なればにや、人目もつ、ます逢ひ見まほしくさへ思さる。

露けさの昔に似たる旅衣田蓑の島の名には隠れず  
 道のまゝに、かひある逍遙遊びの、しり給へど、御心には猶かゝりて思しやる。遊女どもの集ひ參れるも、上達部と聞ゆれど、若やかに事好ましけなるは、皆目とゞめ給ふべかめり。されど、いでやをかしき事も物の哀れも、人柄こそあべけれ、なのめなることをだに、少し淡き方に寄りぬるは、心とゞむる便りもなきものをおほすに、おのが心をやり

○かの人 明石の上  
 ○なか／＼ 源に逢つて却つて。  
 ○此の頃の 明石を近々都に呼び寄せる  
 ○島漕ぎ離れ 故郷を離れて。  
 ○思ひ立ち 出京を齋宮も替る。  
 ○齋宮 天子一代毎に齋宮も替る。  
 ○なか／＼ならむ なまなか源と再び關係等をは結ぶまいと  
 ○渡り 源を訪れる  
 ○知り難く 何う氣が變るか知れぬ。  
 ○如何にねび 何の様にも美しく成長したからかと思ふ  
 ○古り 昔と變らず

て、由めき合へるも疎ましく思しけり。

かの人は過し聞えて、またの日ぞよろしかりければ、御幣奉る、程につけたる願どもなど、かつ／＼果しける。又なか／＼物思ひ添はりて、且暮口惜しき身を思ひ歎く。今や京におはし著くらむと思ふ日數も經ず御使あり。此の頃の程に迎へむ事をぞ宣へる。いと頼もしげに、かすまへ宣ふめれど、いさや又、島漕ぎ離れ、中空に心細き事やあらむと思ひ煩ふ。入道も、さて出し放たむはいと後めたう、さりとて、斯く埋もれて過さむを思はむも、なか／＼來し方の年頃よりも、心盡しなり。萬に慎ましう、思ひ立ち難き事を聞ゆ。まことや、彼の齋宮もかはり給ひにしかば、御息所上りたまひて後、かはらぬさまに、何事もとぶらひ聞え給ふことは、あり難きまで情を盡したまへど、昔だにつれなかりし御心ばへの、なか／＼ならむなごりは見じと、思ひ放ち給へれば、渡り給ひなどする事は殊に無し。あながちに聞え動かし給ひても、我が心ながら知り難く、とかくかゝづらはむ御歩行なども、所狭う思しなりにたれば、強ひたる様にもおはせず。齋宮をぞ如何にねびなり給ひぬらむと、ゆかしう思ひ聞え給ふ。なほ彼の六條の舊宮を、いと能く修理し繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひけり。由づき給へる事古り難くて、よき女房など多く

○煩ひ 御息所が。  
 ○罪深き所 佛の嫌ふ神宮で。  
 ○大臣 源。  
 ○かけくしき 色戀の筋でなく何かの相談相手と思つてゐたのに出家したとは  
 ○脇息に 御息所が  
 ○絶えぬ志 源の心我が變らぬ志を女に認めさせないで終ふかも知れぬ。  
 ○心細くて 娘が。  
 ○見讓る 貴方以外にお頼みする人なく  
 ○思ひのどむる 私の老先は未だ長い  
 ○思し知る 娘に分別が出来るまでは。  
 ○かかる御事 お頼み。  
 ○まことに 眞實力となる父親に娘の後後の世話を頼んでも

好いたる人の集ひ所にて、物寂しきやうなれど、心やれる様にて經給ふ程に、俄に重く煩ひ給ひて、物のいと心細く思されければ、罪深き所に年頃經つるも、いみじう思して、尼になり給ひぬ。大臣聞き給ひて、かけくしき筋にはあらねど、猶さるかたの物をも聞え合はせ人に思ひ聞えつるを、斯く思しなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚きながら渡り給へり。飽かずあはれなる御とぶらひ聞え給ふ。近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかりて、御返りなど聞え給ふ。いたう弱り給へるけはひなれば、絶えぬ志の程は、見え奉らでやと、口惜しうていみじう泣い給ふ。かくまでも思しとめたりけるを、女も萬にあはれに思して、齋宮の御事をぞ聞え給ふ。御息所「心細くてとまり給はむを、必ず事に觸れて數まへ聞え給へ。また見讓る人もなく、類なき御有様になむ。かひなき身ながらも、今暫し世の中を思ひのどむる程は、とざまかうざまに物を思し知るまで、見奉らむとこそ思ひ給へつれ。」とて、消え入りつゝ泣き給ふ。漸かかかる御事なくてだに、思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、何事も後見聞えむとなむ思ひ給ふる。更に後めたくな思ひ聞え給ひそ。」など聞え給へば、御息所「いと難き事。まことにうち頼むべき親などにて見讓る人だに、女親に離れぬるは、いと哀れなる事にこそ侍るめ

○思ほし人 源の情人の様に取扱はれる  
 ○人に心も 他の女から怨みも受けよう  
 ○うたて 嫌な想像  
 ○かけて 決して左様な色戀の筋には。  
 ○憂き身を 私のつらい經驗につけても  
 ○然る方 男女關係  
 ○あいなく 無遠慮  
 ○年頃 近頃は私も萬事に分別が出来た  
 ○自ら 其の中自然御分りにならう。  
 ○若しや 齋宮の姿が見えるか。  
 ○心もなき 腫な  
 ○御髪 御息所の様  
 ○そきて 尼の髪。  
 ○官 前齋宮。  
 ○ひぢちか 小柄で  
 ○さばかり 御息所があれ程制したのに  
 ○かたじけなき 失禮しては恐れ多いから早くお歸り下さい  
 ○よろしう 氣分が

れ、まして思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうち交り、人に心も置かれ給はむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。憂き身をつみ侍るにも、女は思ひの外にて物思ひを添ふるものになむ侍りければ、いかで然る方をもて離れて見奉らむと、思ひ給ふる。」など聞え給へば、あいなくも宣ふかなと思せど、漸年頃よろづ思ひ給へ知りたるものを、昔の好心のなごりあり顔に宣ひなすも本意なくなむ。よし自ら。」とて、外は暗うなり、内は大殿油の、ほのかに物より透りて見ゆるを、若しやと覺えて、やをら御几帳のほころびより見給へば、心もとなき程の火影に、御髪いとをかしけに花やかにそきて、寄り居給へる、繪に畫きたらむ様にして、いみじうあはれなり。帳の東面に添ひ臥し給へるぞ、宮ならむかし。御几帳のしどけなく引き遣られたるより、御目とめて見通し給へれば、頬杖つきて、いと物悲しと思いたる様なり。はつかなれど、いと美しけならむと見ゆ。御髪のかりたる程、頭つきけはひ、あてに氣高きものから、ひぢちかに愛敬つき給へるけはひ著く見え給へば、心もとなくゆかしきにも、さばかり宣ふものをと思しかへす。御息所「いと苦しき増り侍る。かたじけなきを、はや渡らせ給ひぬ。」とて、人にかき臥せられ給ふ。漸近く参りたるしるしに、よろしう思されば嬉

○恐ろしげに、恐ろしい程驚れて居ります。  
 ○限り、臨終の際に○さりとも、娘の事は、お見捨てあるまいと。  
 ○つら、私を遺言を承る人の一人と。  
 ○故院、桐壺。  
 ○上の、桐壺が齋宮を皇子達と同列に思召したから私も齋宮を妹と思ひませう。  
 ○少し、私も相當の年配になつたが愛撫する子供のないのが○あへなう、源氏は餘りあつげなく思ひ○さか、葬式の○御みづから、源○宮に、齋宮に源が○聞えさせ、娘を世話して呉れとの御息所の遺言が。

しかるべきを、心苦しきわざかな。いかにおほざるゝぞ。」とて、覗きたまふ氣色なれば、御息所「いと恐ろしげに侍りや、亂り心地のいとかく限りなる折しも渡らせ給へるは、まことに淺からずなむ。思ひ侍る事を少しも聞えさせつれば、さりともと頼もしくなむ。」など聞えさせ給ふ。源「かかる御遺言のつらに思しけるも、いと哀れになむ。故院の御子達、數多ものし給へど、親しく睦び思すもをさく無きを、上の同じ御子達のうちに、數まへ聞え給ひしかば、さこそは頼み聞え侍らめ。少しおとなしき程になりぬる齡ながら、あつかふ人もなければ、さうくしきを。」など聞えて、歸り給ひぬ。御とぶらひ今少し立ちまさりて、しばく聞え給ふ。

七八日ありて亡せ給ひにけり。あへなう思さるゝに、世もいとはかなくて、物心細う思されて、内裏へも参り給はず、とかくの御事など掟てさせ給ふ。又頼もしき人もことにおはせざりけり。古き齋宮の官司など、仕うまつり馴れたるぞ、僅かに事共定めける。御みづからも渡り給へり。宮に御消息聞え給ふ。齋何事も覺え侍らでなむ。」と、女別當して聞え給へり。源「聞えさせ宣ひ置きし事も侍りしを、今は隔てなき様に思されば、嬉しくなむ。」と聞え給ひて、人々召し出でて、あるべき事ども仰せ給ふ。いと頼もしげに、年頃の

○御心はへ、薄情な○殿の、源の家來達○あはれに、源も。  
 ○やうく、齋宮が○かたじけなし、源に自ら返事をしないのは畏れ多い事と。

御心ばへ、とりかへしつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人々數もなう仕うまつらせ給へり。あはれに打眺めつ、御精進にて、御簾おろし込めて行はせ給ふ。宮には、常にとぶらひ聞え給ふ。やうく御心しづまり給ひては、自らも御返りなど聞え給ふ。つ、まじう思したれど、御乳母など「かたじけなし。」と、そのかし聞ゆるなりけり。雪霰かき亂れ荒るゝ日、いかに宮の御有様、かすかに眺め給ふらむと、思ひやり聞え給ひて、御使奉れ給へり。

源「今この空を、いかに御覽すらむ。」

降り亂れひまなき空に亡きひとの天翔るらむ宿ぞ悲しき

空色の紙の曇らはしきに書い給へり。若き人の御目にとまるばかりと、心してつくり給へる、いと目もあやなり。宮はいと聞えにくくし給へど、これかれ一人傳にては、便なきこと。「と責めきこゆれば、鈍色の紙の、いとかうばしう艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらし我が身それとも思ほえぬ世に

つ、ましけなる書き様にて、いとおほどかに、御手勝れてはあらねど、らうたけにあては

○消えがて、悲しみに閉ぢられて身も世もあらぬに死にもせぬ我が身がつらい

○下り給ひし 伊勢  
下向の時から只では  
置くまいと。  
○いとほしう 口説  
くのは氣の毒だ。  
○さやうに 世人も  
齋宮は源の物と思ふ  
○上の 冷泉が。  
○内裏住み 齋宮を  
女御として差上げて  
○さうくし 子が  
少なく寂しいので齋  
宮を世話し樂しまう  
○昔の 母の代りに  
○御聲など 聲を源  
に聞かせるのは。  
○人々も 侍女達も  
○女別當内侍 源の  
心、齋宮の侍女の名。  
○離れ奉らぬ 親族  
○まじらひ 人内さ  
せて女御として。  
○打解くべき 信用  
出来る心ではない。  
○我が御心も 何う  
變るか知れないから  
○御わざ 御息所の  
御法事。

かなる筋に見ゆ。下り給ひし程より、なほ飽かず思したりしを、今は心にかけて免も角も  
聞え寄りぬべきぞかしと思すには、例のひきかへし、いとほしうこそ、故御息所の、いと  
後めたけに心おき給ひしを、理なれど、世の中の人もさやうに思ひ寄りぬべきことなる  
を、ひき違へ心清くてあつかひ聞えむ、上の今少し物思し知る齡にならせ給ひなば、内裏  
住みせさせ奉りて、さうくしきに、かしづきぐさにこそと、思しなる。いとまめやかに  
懇に聞え給ひて、さるべき折々は渡りなどし給ふ。源かたじけなくとも、昔の御なごり  
に思しなすらへて、氣遠からずもてなさせ給はばなむ、本意なる心地すべき。など聞え給  
へど、わりなく物恥をし給ふ、奥まりたる人さまにて、ほのかにも御聲など聞かせ奉らむ  
は、いと世になく珍らかなる事と思したれば、人々も聞えわづらひて、かかる御心様を憂  
へ聞え合へり。女別當内侍などいふ人々、あるは離れ奉らぬ王家裔などにて、心ばせある  
人々多かるべし。この人知れず思ふ方のまじらひをせさせ奉らむに、人に劣りたまふまじ  
かめり、いかでさやかに御容貌を見てしがなと思すも、打解くべき御親心にはあらずやあ  
りけむ、我が御心も定め難ければ、斯く思ふといふことも、人にも漏らし給はず。御わざ  
などの御事も、とりわきてせさせ給へば、ありがたき御心を、宮人も喜び合へり。

○侍ふ人 御息所に  
○下つ方 六條邸は  
○音泣きがち 齋宮  
が。  
○限りある道 死出  
の道には娘をは連れ  
て行かなかつた。  
○干る 涙の乾く。  
○侍ふ人々に 侍女  
を介して齋宮に云ひ  
寄る人。  
○心に任せ 勝手に  
取持なごをするな。  
○はかなき 情知り  
類に取持なごもせず  
○院 朱雀院。  
○かの 伊勢下向の  
暇乞の儀式。  
○参り 人内させて  
○齋院 齋院とは  
別人朱雀の兄弟。  
○御兄弟の 朱雀の  
○上は 帯は御病身  
で齋宮の直に寡婦に  
なる心配もあり。  
○今は 母なき後は  
○院には 齋宮を自  
分の所へ奉れど。  
○御氣色 御所望の

はかなく過ぐる月日に添へて、いとさびしく、心細き事のみ勝るに、侍ふ人々も、や  
うやう散れ行きなどして、下つ方の京極わたりなれば、人け遠く、山寺の入相の聲々にそ  
へても、音泣きがちにてぞ過し給ふ。同じき御親と聞えし中にも、片時の間も立離れ奉り  
給はでならはし奉り給ひて、齋宮にも親添ひて下り給ふことは、例なき事なるを、あなが  
ちに誘ひ聞え給ひし御心に、限りある道にてはたぐひ聞え給はずなりにしを、干る世なう  
思し歎きたり。侍ふ人々につけて、心かけ聞え給ふ人、貴きも賤しきも數多あり。されど  
大臣の、御乳母たちに、「心に任せたること、引き出し仕うまつるな。」など、親がり申し給  
へば、いと恥かしき御有様に、便なき事聞召しつけられじと言ひ思ひつ、はかなき事の  
情も更につくらす。院にも、かの下り給ひし日、大極殿のいつくしかりし儀式に、ゆ、し  
きまで見え給ひし御容貌を、忘れ難う思し置きければ、未参り給ひて、齋院など、御兄弟  
の宮々おはします類にて、侍ひ給へ。」と、御息所にも聞え給ひにき。されど、やんごとな  
き人々侍ひ給ふに、かすくなる御後見も無くてやと思しつ、みて、上はいとあつしうお  
はしますも怖ろしう、又物思ひや加へむと、憚りて過し給ひしを、今はまして誰かは仕う  
まつらむと人々思ひたるを、懇に院には思し宣はせけり。大臣聞き給ひて、院より御氣

○人の 齊宮の。  
 ○すき心 私の浮氣  
 ○物せ 私に頼んだ  
 ○さも 御息所が私  
 を頼み申ある者を  
 思つて居られたこと。  
 ○大方の 無關係の  
 者に對しても。  
 ○なきか伊 御息所  
 が死後に於ても。  
 ○物の心 分別ある  
 女をお側に置いても  
 ○御定め 齊宮を帝  
 に奉る事はお考へ次  
 第。  
 ○かの 御息所の。  
 ○さやうの 女の事  
 ○御氣色 藤壺から  
 帝へ齊宮内の話を  
 して御承諾があるな  
 ら私は只今口を添へ  
 るだけの事にしませ  
 う。  
 ○さまかうさま  
 齊宮の事が色々心配  
 なのでこれ程までに  
 心中をお話するの  
 だが。

色あらむを、ひき違へ横取り給はむを、かたじけなき事と思すに、人の御有様のいとらう  
 たけに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞え給ひける。源斯うの事をなむ  
 思ひ給へ煩ふに、母御息所いと重くしく心深き様に物し侍りしを、あぢきなきすき心に任  
 せて、然るまじき名をも流し、憂きものに思ひ置かれ侍りにしをなむ、世にいとほしう思  
 ひ給ふる。この世にて、その怨みの心解けず過ぎ侍りにしを、今はとなりての際に、この  
 齊宮の御事をなむ物せられしかば、さも聞き置き、心にも残すまじうこそは、流石に見置  
 き給ひけめと思ひ給ふるにも、忍び難う、大方の世につけてだに、心苦しき事は見聞き過  
 されぬわざに侍るを、いかでなきかけにても彼の恨み忘る許りと思ひ給ふるを、内にも、  
 さこそ大人びさせ給ひたれど、幼き御齡におはしますを、少し物の心知れる人は侍はれ  
 てもよくやと、思ひ給ふるを、御定めになむ。」と聞え給へば、藤壺いと善う思し寄りける  
 を、院にも思さむ事は、けに辱う、いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて、知  
 らず顔に参らせ奉り給へかし。今はた、さやうの事わざも思しとゞめず、御行ひがちにな  
 り給ひて、かう聞え給ふるを、深うしも思し咎めじと思ひ給ふる。」源さらば御氣色ありて、  
 數まへさせ給はば、催しばかりの言を添ふるになし侍らむ。とさまかうさまに思ひ給へ残

○此所に 二條邸へ  
 ○女君 紫の上。  
 ○御渡り 紫が齊宮  
 を引取る用意を。  
 ○姫君 紫の異腹妹  
 ○大臣の 源三兵部  
 卿とは仲が悪いから  
 ○御子 頭中將の娘  
 を祖父の養子にして  
 ○宮の 兵部卿宮の  
 ○おとなしき 年長  
 の附添人。齊宮の事  
 ○あつしく 藤壺は  
 ○参り 宮中に。  
 ○御後見 女御。

す事なきに、斯くまでさばかりの心構へもまねび侍るに、世の人やいかにとこそ憚りはべ  
 れ。」など聞えたまひて、後には、けに知らぬやうにて此所に渡し奉りてむと思す。女君に  
 も、源しかなむ思ふ。語らひ聞えて過い給はむに、いとよき程なるあはひならむ。」と、聞  
 え知らせ給へば、嬉しき事に思して、御渡りの事をいそぎ給ふ。入道の宮、兵部卿宮の  
 姫君を、いつしかとかしづき騒ぎ給ふめるを、大臣のひまあるおん中にて、いかゞもてな  
 し給はむと、心苦しく思す。權中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞ゆ。おほい殿の御子に  
 て、いと装ほしうもてかしづき給ふ、上もよき御遊びがたきに思いたり。藤壺宮の中の君  
 も同じ程におはすれば、うたて難遊の心地すべきを、おとなしき御後見は、いと嬉しか  
 るべき事。」と思し宣ひて、さる御氣色聞えたまひつゝ、大臣のよろづに思し至らぬことな  
 く、公方の御後見は更にもいはず、明暮につけて、細かなる御心ばへの、いとあはれに  
 見えたまふを、頼もしきものに思ひ聞え給ひて、いとあつしくのみおはしませば、参りな  
 どし給ひても、心安く侍ひ給ふことも難きを、少しおとなびて、添ひ侍はむ御後見は、必  
 ずあるべき事なりけり。

蓬生

○源氏二十八歳から二十九歳の四月までの事。  
 ○藻鹽たれ 須磨流請中、古今「わくらほに問ふ人あらは須磨の浦に藻鹽たれつづ侘び答へよ。」  
 ○より所ある 源の力に頼らずも他に  
 ○一方の 源を慕ふ  
 ○二條の上 紫。  
 ○旅の 源の流請地の位を 源が免官後の假の衣裳をも。  
 ○竹の子の 枕詞。  
 ○その數 源の情人の數にも入らない。  
 ○常陸宮 末摘花。  
 ○思ひかけぬ 源との關係が生じて。  
 ○御勢ひ 源に取つては僅かの情と賜はる物を。  
 ○待ち受け 受取る末摘の貧しい身には  
 ○かかる 流請の事  
 ○深からぬ 源が深く思つてゐない女は

藻鹽たれつ、侘び給ひし頃ほひ、都にも、さまざま思し歎く人多かりしを、さても我が御身のより所あるは、一方の思ひこそ苦しけなりしか。二條の上などものどやかにて、旅の御住處をも、覺束なからず聞え通ひ給ひつ、位を去り給へるかりの御よそひをも、竹の子のよの憂き節を、時々につけて扱ひ聞え給ふに、慰め給ふ事もありけむ。なか／＼その數とも人にも知られず、立ち別れ給ひし程の御有様をも、餘所の事に思ひやり給ふ人々の、下の心碎き給ふ類多かり。常陸宮の君は、父親王の亡せ給ひにしながら、また思ひ扱ふ人もなき御身にて、いみじう心細けなりしを、思ひかけぬ御事の出で来て、訪らひ聞え給ふ事絶えざりしを、厳しき御勢ひにこそ、事にもあらず、はかなき程の御情ばかりと思したりしかど、待ち受け給ふ御袂の狭きには、大空の星の光を盥の水にうつしたる心地して、過し給ひし程に、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世憂く思し亂れしまぎれに、わざと深からぬ方の志は、うち忘れたる様にて、遠くおはしましに後、ふりはへてしもえ

○そのなごり 源のお世話の名残で。  
 ○御心はへ 源の廣大な親切を見て。  
 ○よすが 幸運。  
 ○世の事 源の左邊を悲しむは世間一般の事。  
 ○また頼む 末摘は源以外に頼む人なく  
 ○さる方 貧困な生活に慣れた昔には。  
 ○世づき 人並に。  
 ○然てありぬ 役に立つ侍女も居つたが  
 ○命堪へぬ 死ぬる  
 ○木精など 人の少なくなつたこの頃は  
 ○わりなし 何うもひびい有様です。  
 ○受領 國守。  
 ○放ち給はせ 讓つて下さいと手藝を求めて申し込む。  
 ○立ちさまり 暇を取らずに居る私達も

尋ね聞え給はず。そのなごりに、暫しは泣く／＼も過し給ひしを、年月経るまゝに、あはれに寂しき御有様なり。古き女ばらなどは、「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。覺えず神佛の顯はれ給へらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりと、あり難う見奉りしを、大方の世の事とはいひながら、また頼む方なき御有様こそ悲しけれ。」と、嘆き歎く。さる方にありつきたりしあなたの年頃は、いふかひなき寂しさに目馴れて過したまひしを、なか／＼少し世づきてならひにける年月に、いと堪へ難く思ひ歎くべし。少しも然てありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、皆つぎつぎに隨ひて行き散りぬ。女ばらの命堪へぬもありて、月日に隨ひて、上下の人数少なくなりゆく。もとより荒れたりし宮の中、いと狐の住處になりて、疎ましく氣遠き木立に、梟の聲を朝夕に耳ならしつ、人氣にこそ、さやうの物もせかれて影隠しけれ、木精など、けしからぬ物ども所を得て、やう／＼形を顯はし、物わびしき事のみ數知らぬに、まれまれ残りて侍ふ人は、「なほいとわりなし。この頃受領どもの面白き家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ち給はせてむやと、ほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせ給ひて、いと斯う物怖ろしからぬ御住ひに、思し移ろはなむ。立ちとまり侍ふ人



- 人の 世間の手前
- 生ける世に 私の
- 生きてゐる間はそんな親の形身を失ふ様な事は出来ぬ。
- 思ほし 譲る事は
- 古代に 持ち古して。
- 物の故 骨董好きの人が欲しがつて。
- その人かの人 何と云ふ名人に作らせたのか。
- 其こそは 貧故道具を賣り拂ふのも。
- 見よ 私自身で。
- 世になき 世の類のない舊式の人。
- 茂き草 末摘邸の
- 頼もし 却つて用心がよくて頼もしい

も、いと堪へ難し。」など聞ゆれど、末摘「あないみじや。人の聞き思はむ事もあり。生ける世に、しかなごりなき業は如何せむ。かく怖ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する舊き住處と思ふに、慰みてこそあれ。」と、打泣きつゝ、思ほしもかけず。御調度どもも、いと古代に馴れたるが、昔やうにて麗はしきを、なま物の故知らむとおもへる人、さる物要じて、わざとその人かの人にせさせ給へると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひ侮りて言ひくるを、例の女ばら「如何はせむ、其こそは世の常の事。」とて、取り紛らはしつゝ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを、いみじう諫め給ひて、末摘「見よと思ひ給ひてこそ、爲置かせ給ひけめ。などてか輕しき人の家の飾とはなさむ。亡き人の御本意違はむが、あはれなる事。」と宣ひて、然る業はせさせ給はず。はかなき事にて、訪らひ聞ゆる人はなき御身なり。たゞ御兄の禪師の君ばかりぞ、稀にも京に出で給ふ時はさし覗き給へど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなく、この世を離れたる聖にもし給ひて、茂き草、蓬をだに、かき拂はむものとも思ひ寄りたまはず。かかるまゝに、淺茅は庭の面も見えず繁り、蓬は軒を争ひて生ひのほり、葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れ

- 路にて 路として
- 總角 牛飼童。
- 煙絶え 三度の食も乏しくて。
- 思ひやりの 推量するに貧乏らしい故
- ありし 昔の裝飾
- 紛る、塵にも汚れず立派な家。
- すさび 遊戯。
- 心遅く 趣味なく
- 急々事なき 他に用事のない時には氣の合つた人と手紙のやりとりなどをして
- 御心掟 親の躰方の通りに。
- 言通ひ 文通をもすべき人さ。
- 唐守 以下皆物語の名、かぐや姫は竹取物語。
- をかしき 勝れた作を選び集めた集。
- うるはしき きまりきつた。

がちなるめぐりの垣を、馬牛などの踏みならしたる路にて、春夏になれば、放ち飼ふ總角の心さへぞ目ざましき。八月野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりなどは、骨のみ僅かに残りて、立ちとまる下司だになし。煙絶えて、あはれにいみじき事多かり。盗人などいふひたぶる心ある者も、思ひやりの寂しければにや、この宮をば不用の物に踏み過ぎて寄り来ざりければ、斯くいみじき野ら藪なれども、さすがに寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひ變らず。つややかに掻い掃きなどする人もなし。塵は積れども、紛る、事なき麗はしき御住ひにて、明し暮し給ふ。はかなき古歌、物語などやうのすさび事にてこそ、徒然をも紛らはし、かかる住ひをも思ひ慰むる業なめれ、さやうの事にも心遅く物し給ふ。わざと好ましからねど、おのづから又急ぐ事なき程は、同じ心なる文通はしなども打ちしてこそ、若き人は本草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかしづき給ひし御心掟のまゝに、世の中をつまじきものに思ひて、稀にも言通ひ給ふべき御あたりをも、更に馴れ給はず、舊めきたる御厨子開けて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の繪に畫きたるをぞ、時々まさぐり物にし給ふ。古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも讀人をも、顯はし心得たるこそ、見所もありけれ、うるはし

○紙屋紙 京都の紙屋川で漚く紙。  
 ○ふくためる 古びてふくれた冊子に。  
 ○せめて ひびく屈託した際には。  
 ○あくがれ 暇を取らぬ侍女で。  
 ○齋院 侍従は末摘齋院の二人に仕へた  
 ○この姫君 末摘花  
 ○若人共 河内本に「若人共も求むるに」さあり。  
 ○いき通ふ 侍従が  
 ○この姫君 末摘花  
 ○睦まじく 叔母が  
 ○言ひ聞かせ 侍従に。  
 ○もごより 生まれつき賤しい人は。  
 ○なほしき 少し下品な所のある。  
 ○思はれ 末摘に。  
 ○この君 末摘を。

き紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじけなるを、せめてながめ給ふ折々は、引きひろけ給ふ。今の世の人の爲める、經うち讀み、行ひなどいふことはいと恥かしくし給ひて、見奉る人もなけれど、數珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞ物し給ひける。

侍従などいひし御乳母子ばかりこそ、年頃あくがれ出でぬ者にて侍ひつれど、通ひ参りし齋院亡せ給ひなどして、いと堪へ難く心細きに、この姫君の母北の方の同胞、世におちぶれて、受領の北の方になり給へるありけり。女どもかしづきて、よろしき若人共も、むけに知らぬ所よりは、親共も参うで通ひしをと思ひて、時々いき通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、睦まじくも言ひ通ひ給はず。叔母「おのれをば貶しめ給ひて、面伏に思したりしかば、姫君の御有様の心苦しけなるも、え訪らひ聞えず。」など、なま憎けなる詞ども言ひ聞かせつ、時々聞えけり。もとよりありつきたるさやうの竝々の人は、なかなかよき人の真似に心をつくし、思ひあがりも多かるを、やんごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心少しなほしき御叔母にぞありける。我が斯く劣りの様にて、侮らはしく思はれたりしを、いかでかかかる世の末に、この君を、我が女ども

○後やすき 末摘は女にさつて安心な附添人である。  
 ○人 自分の娘。  
 ○挑む 反抗する。  
 ○家あるじ 夫。  
 ○あるべき様 娘ごもを相當の縁につけて  
 ○近き 近所の間は安心してゐたが遠方へ行くさなるに殘して置くのも心配だ。  
 ○言よがる 體裁のよい事を云ふ。  
 ○うけひき 末摘が同行を承知しない故  
 ○大將殿 源。  
 ○うけひ のろふ。  
 ○許され 源が。  
 ○深き 源に對して  
 ○思ひ出で 末摘を  
 ○限り もう駄目だ  
 ○あらぬ様 源の不幸を。  
 ○たびしかはら 極めて下賤の者まで。

の使人になしてしかな、心ばせなどの古びたる方こそあれ、いと後やすき後見ならむと思ひて、北の方時々こゝに渡らせ給ひて。御琴の音も承らまほしがる人なむ侍る。」と聞えければ、さも睦まじく給はぬを、妬しとなむ思ひける。かかる程に、かの家あるじ大貳になりぬ。女共あるべき様に見置きて、下りなむとす。この君をなほも誘はむの心深くて、北の方遙かにかく罷りなむとするに、心細き御有様の、常にしも訪らひ聞えねど、近き頼みはべりつる程こそあれ、いとあはれに後めたくなむ。」など言よがるを、更にうけひき給はねば、北の方「あなにく。事々しや。心一つに思しあがるとも、さる藪原に年經給ふ人を、大將殿もやんごとなくしも思ひ聞え給はじ。」など、怒じうけひけり。さる程に、けに世の中に許され給ひて、都に歸り給ふと、天の下の悦びにて立騒ぐ。我もいかで、人より先に、深き志を御覽せられむとのみ思ひ競ふ男女につけて、貴きをも下れるをも、人の心ばへを見給ふに、あはれと思し知る事様々なり。斯様に、慌しき程に、更に思ひ出で給ふ氣色見えで月日經ぬ。今は限りなりけり、年頃あらぬ様なる御様を、悲しういみじき事を思ひながら、萌え出づる春に逢ひ給はなむと念じ渡りつれど、たびしかはらなどまで悦び思ふな

○御位 源の位昇進  
 ○悲しかりし折 源  
 が退去した際の。  
 ○我が身一つの古  
 今「世の中は昔より  
 やは愛かりけむ我が  
 身一つの爲になれる  
 か。」  
 ○宮、上 末摘の父  
 母。  
 ○思し立ち 筑紫に  
 同行する事を。  
 ○世の憂き時 古今  
 「三吉野の山のあな  
 たに宿もがな世の憂  
 き時の隠家にせむ。」  
 ○むけに 甚だ困つ  
 てる末摘の侍女達  
 ○立てたる 我を通  
 す氣だらう。  
 ○もさき 侍難し。  
 ○心より外 侍従も  
 不本意乍ら出發する  
 ○唆し 末摘に同行  
 を勧める。  
 ○久しうなり 源に  
 ○我が身の 我が罪  
 で。

る、御位改まりなどするを、餘所にのみ聞くべきなりけり。悲しかりし折の憂はしさは、  
 たゞ我が身一つの爲になれると覚えしかひなき世かなと、心碎けて、つらく悲しければ、  
 人知れず音をのみ泣き給ふ。大貳の北の方、さればよ、まさに斯くたづきなく、人わろき  
 御有様を、數まへ給ふ人はありなむや、佛聖も、罪輕きをこそ導きよくし給ふなれ、か  
 かる御有様にて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のま、にならひ給へる、御心  
 おごりのいとほしき事と、いとゞをこがましけに思いて、叔母「なほも思し立ちね。世の憂  
 き時は見えぬ山路をこそ尋ねなれ。田舎などはむづかしきものと思しやるらめど、ひたぶ  
 るに人わろけには、よももてなし聞えじ。」など、いとことよく言へば、むけに屈しにたる  
 女ばら、「さも靡き給はなむ。たけき事もあるまじき御身を、いかに思して、かく立てたる  
 御心ならむ。」と、もどき咥く。侍従も、かの大貳の甥だつ人語らひつきて、留むべくもあ  
 らざりければ、心より外に出で立ちて、侍従「見奉り置かむがいと心苦しきを。」とて、唆  
 し聞ゆれど、なほ斯くかけ離れて久しうなり給ひぬる人に憑みをかけ給ふ。御心の中に、  
 さりとも、有り經ても思し出づる序あらじやは、あはれに心深き契りをし給ひしに、我が  
 身の憂くて、かく忘れられたるにこそあれ、風の傳にても、我がかくいみじき有様を聞きつ

○ありしより 前よ  
 り一層ひびい。  
 ○赤き木實 末摘の  
 鼻の先の赤い事。  
 ○おぼろけの 大抵  
 の人は我慢が出来ぬ  
 ○かきつかむ 頼り  
 ○かの殿 源氏。  
 ○禪師 末摘の兄。  
 ○立寄り 末摘方へ  
 ○變化の身 源は。  
 ○五つの 五濁惡世  
 に。  
 ○御あはひ 兄弟仲  
 ○聞え合はせ 末摘  
 とは徹々話し合はぬ  
 ○かばかり これ程  
 困つてゐる自分を顧  
 みないとはひびい人  
 だ。

け給はば、必ず訪らひ出で給ひてむと、年頃思しければ、大方の御家居も、ありしより勝  
 にあさましけれど、我が心もて、はかなき御調度どもも取り失はせたまはず、心強く  
 同じさまにて念じ過し給ふなりけり。音泣き勝に、いとゞ思し沈みたるは、たゞ山人の赤  
 き木實ひとつを顔に放たぬと見え給ふ。御側目などは、おほろけの人の見奉り許すべきに  
 もあらずかし。委しくは聞えじ。いとほしう物いひさがなきやうなり。  
 冬になり行くまゝに、いとゞかきつかむ方なく、悲しけにながめ過したまふ。かの殿に  
 は、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてし給ふ。殊に僧などは、なべてのは召さず、才  
 勝れ行ひに染み、尊きかぎりを選らせ給ひければ、この禪師の君も参り給へりけり。歸り  
 ざまに立寄り給ひて、禪師「しかく、權大納言殿の御八講に参りて侍りつるなり。いとか  
 しこう、生ける淨土の飾りに劣らず、嚴しうおもしろき事共の限りをなむし給へる、佛菩  
 薩の變化の身にこそ物し給ふめれ。五つの濁り深き世に、などて生まれ給ひけむ。」といひ  
 て、やがて出でたまひぬ。言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、かひなき世の物語をだ  
 に、聞え合はせ給はず。さてもかばかり拙き身の有様を、哀れに覺束なくて過し給ふは、  
 心愛の佛菩薩やと、つらう覺ゆるを、けに限りなめりとやうく思ひなり給ふに、大貳の

○奉るべき 末摘に著せる著物。  
 ○ゆくりも 突然。  
 ○人わろく 末摘の家の様見苦しく。  
 ○男子 叔母の従者  
 ○三つの徑 門へ行く道、井へ行く道、副へ行く道。  
 ○たゞる 探す。  
 ○寄せ 車を。  
 ○つひえ 鑑れる。  
 ○さりかへ 末摘と侍従を取換へたい位  
 ○心憂く 末摘は私に隔てを置いて。  
 ○この人 侍従。  
 ○なご斯う 何うしてこんな哀れな生活をなさるのですか。  
 ○故宮 末摘の父。  
 ○面伏 體面を汚す  
 ○何かは 貴女の事を疎略には思はぬが  
 ○やんごとなき 貴女は氣位が高くて。

北の方俄に來れり。例はさしも睦びぬを、さそひ立てむの心にて、奉るべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面持氣色ほこりに、物思ひ無けなる様にして、ゆくりもなく走り來て、門開けさするより、人わろく寂しき事限りもなし。左右の戸もよろほひ倒れにければ、男子ども助けて、とかく開け騒ぐ。いづれか、この寂しき宿にも、必ずわけたる跡あるなる三つの徑と、たどる。僅かに南面の格子上げたる間に、寄せたれば、いとゞはしたなしと思したれど、淺ましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で來たり。容貌など衰へにけり。年頃いたうつひえたれど、なほ物清けにもある様にして、辱くとも、とりかへつべく見ゆ。北の方出で立ちなむ事を思ひながら、心苦しき御有様の見捨て奉り難きを、侍従の迎へになむ参り來たる。心憂く思し隔て給ひて、御みづからこそあからさまにも渡らせ給はね、この人をだに許させ給へとてなむ。など斯う哀れける様には。」とて、うちも泣くべきぞかし。されど行く道に心をやりて、いと心地よけなり。北の方「故宮おはせし時、おのれをば面伏なりと、思し捨てたりしかば、疎々しき様になり初めにしかど、年頃も何かは。やんごとなきさまに思しあがり、大將殿などおはしまし通ふ御宿世の程を、辱く思ひ給へられしかばなむ、睦び聞えさせむも、憚る事多くて過し侍りつるを、世の中のかく定め

○數ならぬ身 私の様につまらぬ者は。  
 ○及びなく 私なごの及びもつかない程勢ひのよかつた貴女が今は。  
 ○近き程は 私が近所に居る間は無沙汰をしてゐても安心であつたが。  
 ○世に似ぬ 人並でもない様子で何うして人中へ出ませう。  
 ○引きかへ 此の破屋に引きかへて今に  
 ○兵部卿の宮の 紫  
 ○所々 女達。  
 ○心清く 眞實に源一人を力にしてゐる  
 ○侍従をだに 連れて行かう。  
 ○おくり 叔母君の見送りについて行かう。  
 ○かの聞え 叔母君の言分も尤もです。  
 ○思し煩ふ 末摘の  
 ○中に 私は板挿みになつてつらい。

もなかりければ、數ならぬ身は、なか／＼心安く侍るものなりけり。及びなく見奉りし御有様の、いと悲しく心苦しきを、近き程はおのづから怠る折も、長閑にたのもしくなむ侍りけるを、かく遙かに罷りなむとすれば、後めたくあはれに覺え給ふ。」など語らへど、心解けても答へ給はず。末摘「いと嬉しき事なれど、世に似ぬさまにて、何かは。斯うながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひ侍る。」とのみ宣へば、北の方けに然なむ思さるべけれど、生ける身を捨てて、かくむくつけき住ひする類は侍らずやあらむ。大將殿の造り磨き給はむにこそは、引きかへ玉の臺にもなり返らめとは、頼もしうは侍れど、只今は兵部卿の宮の御女より外に、心わけ給ふ方もなかりけり。昔より、すき／＼しき御心にて、等閑に通ひ給ひける所々、皆思し離れにたなり。まして、斯う物はかなき様に藪原に過し給へる人をば、心清く我を頼み給へる有様と、尋ね聞え給ふ事、いと難くなむあるべき。」など言ひ知らするを、けにと思すもいと悲しくて、つく／＼と泣きたまふ。されど動くべうもあらねば、よろづに言ひ煩ひ暮して、「さらば侍従をだに。」と、日の暮る、まゝに急げば、心あわたしくして、泣く／＼、侍従「さらばまづ今日は、かう責めたまふ送りばかりに参らで侍らむ。かの聞え給ふも理なり。又思し煩ふもさる事に侍れば、中に見給ふるも、心苦しく

○この人 侍従さへ  
 ○音をのみ 泣くのが難一杯。  
 ○形見 侍従への。  
 ○しほなれ 汚れて  
 ○年経ぬる 永く勤めてくれた謝意を。  
 ○だゆまじき 侍従だけは何時までも居て呉れると思つたのに意外にも私を棄てて去る。  
 ○故ま、故乳母、侍従の母。  
 ○見はててむ 行末まで世話をしよう。  
 ○見譲りて 私の世話を誰にさせる積りか。  
 ○過し侍り 諸共に  
 ○覚えぬ道 思ひもよらぬ旅路に。  
 ○玉かづら 道中を守る神に誓つて貴女を決して棄てはせぬ  
 ○命こそ 生きて再び會はれるかが心配  
 ○いづら 侍従は何所に居るか。  
 ○引き出づ 車を。

なむ。」と忍びて聞ゆ。この人さへうち捨ててむとするを、恨めしうもあはれにも思せど、言ひ留むべき方もなくて、いと音をのみたけきことにて物し給ふ。形見に添へ給ふべき身なれ衣も、しほなれたれば、年経ぬるしるし見せ給ふべき物なくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にし給へるが、九尺餘ばかりにて、いと清らなるを、をかしけなる箱に入れて、昔の薰衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

「たゆまじきすぢを頼みし玉かづらおもひの外にかけはなれぬる

故ま、の、宣ひ置きしこともありしかば、かひなき身なりとも、見はててむとこそ思ひつれ。打捨てらるゝも、理なれど、誰に見譲りてかと恨めしうなむ。」とて、いみじう泣き給ふ。この人も物も聞えやらず。侍従ま、の遺言は更にも聞えさせず。年頃の忍び難き世の憂さを、過し侍りつるに、かく覚えぬ道に誘はれて、遙かに罷りあくがるゝ事。」とて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道のたむけの神もかけてちかはむ

命こそ知り侍らね。」など言ふに、叔母「いづら、暗うなりぬ。」と呟かれて、心も空にて引き出づれば、顧みのみせられけり。年頃侘びつゝ、も行き離れざりつる人の、斯く別れぬることとを、いと心細う思すに、世に用るるまじき老人さへ、「いでや理ぞ。いかでか立ち留

○人さへなく 侍従

○かの殿 源氏。  
 ○めづらし人 久振りに逢つた紫。  
 ○やんごとなく 源が大して思つてゐない女の所には行かず  
 ○その人 末摘花。  
 ○對の上 紫の上。  
 ○御歩行 女通ひ。  
 ○橘には 橘は昔を忍ぶ種なるもので花散里を意味する。  
 ○さし出で 源が車から顔をさし出す。

り給はむ。我等もえこそ念じはつまじけれ。」と、おのが身々につけたる便りども思ひ出でて、留るまじう思へるを、人わろく聞きおはす。霜月許りになりぬれば、雪霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬葎の陰に、深うつもりて、越の白山思ひやらるゝ雪のうちに、出で入りし下人だになくて、徒然とながめ給ふ。はかなき事を聞え慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはら寂しく、物悲しく思さる。

かの殿には、めづらし人に、いと物騒がしき御有様にて、いとやんごとなく思されぬ所々には、わざともえ音づれ給はず。まして、その人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、尋ね給ふべき御志も急がであり経るに、年かはりぬ。四月ばかりに、花散里を思ひ出で聞え給ひて、忍びて對の上に御暇聞えて出で給ふ。日頃降りつるなごりの雨少しそゝぎて、をかしき程に月さし出でたり。昔の御歩行思し出でられて、艶なる程の夕月夜に、道の程萬の事思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎ給ふ。大きな松に藤の咲きかゝりて、月影になよびたる、風につきてさと勻ふがなつかしく、そこはかとなき薫なり。橘にはかはりてをかしければ、さし出

○築地 堀も一向構  
はないから崩れて。  
○早う それもその  
筈末摘の邸であつた  
○おし留め 車を。  
○ありし人 末摘花  
○わざと わざと  
やつて来るのも面倒  
○たづねよりて よ  
く確かめてから話を  
せよ。  
○此所には 末摘は  
○ながめ 物思ひの  
○漏りぬれ 雨の。  
○世づき 末摘がい  
つになく様子を作る  
○往來の道 今まで  
通り往來の道に覗い  
て見たけれど。

○聲作る 案内を請  
ふ。

で給へるに、柳もいたう垂りて、築地もさはらねば亂れ伏したり。見し心地する木立かな  
と思すは、早うこの宮なりけり。いと哀れにおし留めさせ給ふ。例の惟光は、かかる御忍  
びありきに後れねば侍ひけり。召し寄せて、源「こゝは故常陸の宮ぞかしな。」惟光「しかはべ  
る。」と聞ゆ。源「こゝにありし人は、まだや眺むらむ、訪らふべきを、わざと物せむも所せ  
し。かかる序に入りて消息せよ。能くたづねよりてを、うち出でよ。人違へして嗚呼なら  
む。」と宣ふ。此所には、いとゞながめ勝るころにて、つくぐとおはしけるに、晝寢の夢  
に、故宮の見え給ひければ、覺めていとなごり悲しく思ひて、漏りぬれたる廂の端つかた  
おし拭はせて、こゝかしこの御座引繕はせなどしつゝ、例ならず世づき給ひて、  
亡き人を戀ふる袂のほどなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ  
も心苦しきほどになむめりける。惟光入りて、廻るく人の音する方やと見るに、いさ、  
か人氣もせず。さればこそ、往來の道に見入るれど人住みけも無きものと思ひて、かへ  
り參る程に、月明くさし出でたるに見れば、格子二間許りあけて、簾動く氣色なり。僅か  
に見つけたる心地、怖ろしくさへ覺ゆれど、寄りて聲作れば、いと物古りたる聲にて、ま  
づ咳をさきにたてて、家人「彼は誰ぞ。何人ぞ。」と問ふ。名のりして、惟光侍従の君と聞

○外に 他へ行つた  
○思しわく 其れと  
同様に物の分つた女  
が。  
○聞きし老人 聞いた  
事のある聲是れは  
侍従の伯母少將と云  
ふ人。  
○なごやか やさし  
さうな様子。  
○變らぬ 末摘の心  
が變らない様ならば  
○尋ね 源が世話を  
しよう云ふ志。  
○行き過ぎがて 末  
摘の邸の前を素通り  
する事が出来ずに。  
○いかゞ 源へ何ぞ  
返事をしようか隠さ  
ずにお話なさい。  
○年経たる 私の様  
な年寄達の心にも。  
○類あらし 此んな  
にみじめな暮しは。  
○くづし ぼつりぼ  
つり話し出す。  
○むつかし 小面倒

えし人に、對面賜はらむ。」といふ。家人「それは外になむ物し給ふ。されど思しわくまじき  
女なむ侍る。」といふ聲、いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。内には、思  
ひ寄らず、狩衣姿なる男の、忍びやかにもてなして、なごやかなれば、見習はずなりにけ  
る目にて、もし狐などの變化にやと覺ゆれど、近う寄りて、惟光「たしかになむ承らまほし  
き。變らぬ御有様ならば、尋ね聞えさせ給ふべき御志も、絶えずなむおはしますめるか  
し。今宵も行き過ぎがてに留らせ給へるを、いかゞ聞えさせむ、後やすくを。」といへば、  
女どもうち笑ひて、「變らせ給ふ御有様ならば、かかる淺茅が原をうつろひ給はでは侍りな  
むや。たゞ推し量りて聞えさせ給へかし。年経たる人の心にも、類あらしとのみ、珍らか  
なる世をこそは見奉り過し侍れ。」と、や、くづし出でて、問はず語りもしつべきが、むつ  
かしければ、惟光「よし。まづ斯くなむと聞えさせむ。」とて參りぬ。源などかいと久し  
かりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな。」と宣へば、惟光「云々なむたどり寄り  
て侍りつる。侍従が伯母の少將といひ侍りし老人なむ、變らぬ聲にて侍りつる。」と有様聞  
ゆ。いみじうあはれに、かかる繁き中に、何心地してすぐし給ふらむ、今まで訪はざりけ  
るよと、我が御心の情なさも思し知らる。源「如何すべき。かかる忍びありきも難かるべき

○ゆにさこそ 如何にもさう有りさうな末摘の人からだ。  
 ○故ある 面白い歌見給ひし 末摘の口重さが以前の通りなら急に返歌も出来ずしてお使の者が待ちくたげれるのも可哀想。  
 ○え分けさせ 入れさうにもない。  
 ○尋ねても 人が問はずとも末摘の變らぬ眞實を察して私が尋ねて行かう。  
 ○なほ下り 惟光は素通りなされはよいにと思つても源は矢張り車から下りる。  
 ○雨そぎ 雨の傘を源にさしかける。  
 ○木の下露は 古今「みさぶらひ御笠」申せ宮城野の木の下露は雨にまされり。  
 ○むとく むさくろしい。  
 ○心ゆかず 叔母を不愉快に思つてゐたので賜物の著物迄もこの人々 侍女達

を。かかる序ならではえ立寄り、變らぬ有様ならば、けにさこそあらめと推し量らる、人さまになむ。」とは宣ひながら、ふと入り給はむこと、猶慎ましう思はる。故ある御消息もいと聞えまほしけれど、見給ひし程の口おそさもまだ變らずば、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとゞめつ。惟光も、「更に分けさせ給ふまじき、蓬の露けさになむ侍る。露少し拂はせてなむ。入らせ給ふべき。」と聞ゆれば、  
 尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもぎのものと心を  
 とひとりごちて、なほ下り給へば、御さきの露を、馬の鞭して佛ひつゝ、入れ奉る。雨そぎも、なほ秋の時雨めきてうちそゞげば、御傘さぶらふ。惟光けに木の下露は、雨にまさりて。」ときこゆ。御指貫の裾は、いたうそほぢぬめり。昔だに有るか無きかなりし中門など、まして形もなくなりて、入り給ふにつけても、いとむとくなるを、立交り見る人なきぞ心安かりける。  
 姫君は、さりととも待ち過し給へる心もしるく、嬉しけれど、いと恥かしき御有様にて對面せむも、いとつゝ、ましく思したり。大貳の北の方の奉り置きし御衣どもをも、心ゆかず思はれしゆかりに、見入れ給はざりけるを、この人々の香の御唐櫃に入れたりけるが、

○いかゞはせむ 他に仕方もないので。  
 ○驚かい お手紙も下らないのが。  
 ○杉ならぬ 古今、「我が庵は三輪の山本戀しくほさぶらひ來ませ杉立てる門。」  
 ○帷子 几帳の垂布  
 ○思ひおこして 氣を引き立てて。  
 ○人の御心の そなたの御心は變つたか何うか知らないが。  
 ○なべての 誰にも無沙汰したのだから  
 ○つきくしうら まく言ひ繕つて。  
 ○ひき植ゑし 後撰「ひき植ゑし人はうべこそ老いにけれ松の木高く成りにける哉。」  
 ○松こそ 松に待をかけた。そなたの待ち甲斐があつた。  
 ○積り 達はぬ日が

いと懐かしき香したるを奉りければ、いかゞはせむに、著かへ給ひて、かの煤けたる御几帳ひき寄せておはす。入り給ひて、年頃の隔てにも、心ばかりはかはらすなむ、思ひやり聞えつるを、さしも驚かい給はぬ恨めしさに、今まで試み聞えつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむまけ聞えにける。」とて、帷子を少しかきやり給へれば、例のいとつゝ、ましけに、頓にも答へ聞え給はず。斯くばかりわけ入り給へるが浅からぬに、思ひおこしてぞ、ほのかに聞え出で給ひける。遙かかる草がくれに過し給ひける。年月のあはれもおろかならず、又變らぬ心ならひに、人の御心の中もたどり知らずながら、分け入り侍りつる露けさなどを、いかゞおほす。年頃のおこたりはた、なべての世に思し許すらむ。今より後の御心に叶はざらむなむ、言ひしに違ふ罪も負ふべき。」など、さしも思されぬ事も、情々しう聞えなし給ふ事どももあり。立ち留まり給はむも、所の様より始め、まばゆき御有様なれば、つきくしう宣ひすべして出で給ひなむとす。ひき植ゑしならねど、松の木高くなりける年月の程もあはれに、夢の様なる御身の有様も思しつゞけらる。  
 「藤なみの打過ぎ難く見えつるは松こそ宿のしるしなりけれ  
 數ふればこよなう積りぬらむかし。都に變りにける事の多かりけるも、様々哀れになむ。

○鄙の別れに 古今  
「思ひきや鄙の別れ  
に衰へて海士の繩た  
ぎ漁りせむとは。」  
○誰に 自分以外に  
話す人もあるまいと  
○うらもなく 親し  
く。

○年を経て 藤の花  
を見るついでにお寄  
り下すつたのですか  
○さばる 月影の。  
○残り 破れて。  
○見るめ 外観より  
○たう毀ち 不幸の  
子が、親の建てた塔  
(又は堂)を壊した話  
○さる方 源の心、  
源の被護者として。  
○御目のうつし 末  
摘の所から花散方へ  
行つても大して勝れ  
た所もないので末摘  
の缺點も目立たない  
○祭御禊 賀茂や齋  
院御禊の儀式。

今のどかにぞ、鄙の別れに衰へし世の物語も聞え盡すべき。また年経給ひつらむ、春秋の暮しがたさなども、誰にかは愁へ給はむと、うらもなく覺ゆるもかつは怪しうなむ。」など聞え給へば、

末摘 年を経てまつしるしなきわが宿を花のたよりに過ぎぬばかりか

と忍びやかにうちみじろき給へるけはひも、袖の香も、昔よりはねびまさり給へるにやと思さる。月入りがたになりて、西の妻戸のあきたるより、さばるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いと花やかにさし入りたれば、あたりくに見ゆるに、昔に變らぬ御しつらひの様など、しのぶ草に寝れたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に、だう毀ちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年古りにけるもあはれなり。ひたぶるに物づゝみしたるけはひの、流石にあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しう思ひしを、年頃さまの物思ひにほれくしく隔てつる程、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎ給はぬ所にて、御目のうつしこよなからぬに、答おほう隠れにけり。

祭御禊などの程、御いそぎどもにことづけて人の奉りたるもの、いろく多かるを、

○さるべき限り 源の目をかけてゐる女達に與へる。  
○この宮 末摘花。  
○尋ね出で 源があんな女を探し出したと噂せられるのも。  
○いと近き 二條院の直ぐ近所に家を。  
○そこに お前をそこに引取る積り。  
○人々 侍女達の。  
○置き所 喜びの。  
○なげの 一寸した戯れにでも勝れた女をお求めになる。  
○何事も 何事も人より劣つてゐる末摘の如き女を。  
○さばり 争つて暇を取つた侍女達。  
○心ほへ 末摘の。  
○埋れ痛き 引込み過ぎる程人がよい。  
○うちつけの 現金な心を現はして。

さるべき限り御心加へ給ふ。中にもこの宮には、こまやかに思しよりて、睦まじき人々に仰言賜ひ、下部どもなど遣はして、蓬拂はせ、めぐりの見苦しきに、板垣といふものうち堅め繕はせ給ふ。かう尋ね出で給へりと、聞き傳へむにつけても、わが御ため面目なければ、渡り給ふことはなし。御文いと細やかにかきたまひて、「二條院いと近き所を造らせ給ふを、そこになむ渡し奉るべき。よろしき童べなど求めて侍はせたまへ。」など人々の上まで思しやりつ、訪らひ聞え給へば、かく怪しき蓬のもとには置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜び聞えける。なげの御すさびにても、おしなべたる尋常の人をば、目とゞめ耳たて給はず、世に少しこれと思ほえ、心にとまる節あるあたりを尋ねより給ふものをと、人の知りたるに、かくひき違へ、何事もなごめにだにあらぬ御有様を、ものめかし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契りなめりかし。今はかぎりと侮りはてて、様々にきほひ散りあがれし上下の人々、我もく参らむと争ひ出づる人もあり。心ばへなどはた、埋れ痛きまで、よくおはする御有様に、心安くならひて、異なる事なき、なま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに参り歸る。君は、古にも勝りたる御勢ひの程にて、物



- こまやかに末摘の事を親切に取計らふ。
- 前栽 植込の下も
- かく御心 源が末摘を寵愛する事と推量して御機嫌を取る
- 對面 末摘が源に
- 近きしめ 一郭の内
- のぼりて 都へ上り末摘の様子を見て
- 今少し 記者の詞

の思ひやりも勝して添ひ給ひにければ、こまやかに思ひ掟てたるに、勻ひ出でて、宮の内やうく人目見え、木草の葉も、たゞ凄くあはれに見えなされしを、遣水かき拂ひ、前栽のもとだちも涼しうしななどして、異なるおほえなき下家司の、殊に仕へまほしきは、かく御心とめて思さる、事なめりと見とりて、御氣色賜はりつゝ、追従し仕うまつる。二年許りこの舊宮に眺め給ひて、東の院といふ所になむ、後にはわたし奉り給ひける。對面し給ふことなどは、いと難けれども、近きしめのほどにて、大方にも渡り給ふにさしのぞきなどし給ひつゝ、いと侮らはしけにもてなし聞え給はず、かの大貳の北の方のほりて、驚き思へる様、侍従が、嬉しきものの、今暫し待ち聞えざりける心淺さを恥かしう思へる程などを、今少し問はず語りもせまほしけれど、いと頭痛う、うるさく懶ければ、今又もついであらむ折に、思ひ出でて聞ゆべきとぞ。

關屋

- 源氏二十九歳の秋
- 伊豫介 空蟬の夫
- 故院 桐壺の帝
- 常陸 常陸介に
- 帯木 空蟬の事
- 須磨の 源氏禰居
- 傳へきこの 人傳
- 筑波根の 古今集
- 甲斐が根を浪越し
- 山越し吹く風を人に
- もがもや言傳てやら
- む。常陸から「筑波根」にかへたのだ。
- 限れる 一つ迄
- 上り 京へ。
- 關 逢坂關。
- この殿 源氏。
- 迎へに 伊豫介の
- まだ 曉より伊豫
- 關山に皆下り居て
- 伊豫介の方。
- 過し 源氏の行列

伊豫介といひしは、故院かくれさせ給ひてまたの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木も誘はれにけり。須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、傳へきこのゆべきよすがだになくて、筑波根の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、いさゝかの傳へだになくて年月重なりにけり。限れる事もなかりし御旅居なれど、京に歸り住み給ひて、又の年の秋ぞ常陸に上りける。關入る日しも、この殿、石山に御願はたしに詣で給ひけり。京より、かの紀の守などいひし子ども、迎へに來たる人々、この殿かく詣で給ふべしと告げければ、道の程騒がしかりなむものぞとて、まだ曉より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎくるに、日たけぬ。打出の濱來る程に、殿は粟田山越え給ひぬとて、御前の人々、道もさりあへず來込みぬれば、關山に皆下り居て、此所彼所の杉の下に、車共かきおろし、木隠れに居かしまりて過し奉る。車などかたへは後らかし、先にたてなどしたれど、なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口物の色あひなども漏り出

○齋宮 伊勢神宮奉仕の内親王。  
 ○殿も 源氏が。  
 ○敷もなき 大勢の目こめめたり伊豫介の方の女車に。  
 ○關屋より 關所をさつこ出はづれた源氏の一行の姿。  
 ○襖 狩襖、表は布で裏に絹をつける。  
 ○括染 絞染。  
 ○小君 伊豫介の子  
 ○今日の 空蟬への傳言。今日私が空蟬を此處まで迎へに来た事を。  
 ○おほぞう 一通りで詳しくない事。  
 ○さり返し 思ひ出し。  
 ○せきこめ 塚きを關にかけていふ。  
 ○紀伊守 伊豫介子

でて見えたる。田舎びず由ありて、齋宮の御下り、なにぞ様の折の物見車思し出でらる。殿もかく世に榮え出で給ふ珍らしさに、敷もなき御前ども皆目とめたり。九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜がれの草、むらくをかしう見え渡るに、關屋よりさとはづれ出でたる旅姿どもの、いろくの襖のつきくしき縫物、括染めの様も、さる方にかしう見ゆ。御車は簾下し給ひて、かの昔の小君、今は右衛門佐なるを召し寄せて、源今日御關迎へは、え思ひすて給はじ。」など宣ふ。御心の中、いとあはれに思し出づる事多かれど、おほぞうにてかひなし。女も、人知れず昔の事忘れねば、とり返して物哀れなり。行くと來とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

え知り給はじかしと思ふに、いとかひなし。石山より出で給ふ御迎へに、右衛門佐参れり。一日まかり過ぎしかしこまりなど申す。童にて、いと睦まじうらうたきものにし給ひしかば、かうぶりなど得しまで、この御徳に隠れたりしを、覚えぬ世の騒ぎありし頃、物の聞えに憚りて、常陸に下りしをぞ、少し御心おきて年頃はおほしけれど、色にも出し給はず。昔の様にこそあらねど、なほ親しき家人の内には數へ給ひけり。紀伊守といひしも、今は河内守にぞなりにける。その弟の、右

○解けて 免職され  
 ○御供 源氏の。  
 ○なし出で 取立つ  
 ○思ひ知りて 源氏の御情を。  
 ○世に 源を不遇の境に置いた時世に。  
 ○佐 右衛門佐。  
 ○御消息 空蟬へ。  
 ○一日は 先日偶然逢つたのも盡きぬ縁  
 ○わくらばに 偶然  
 ○あふみち 逢ふ路  
 ○近江路さかける。  
 ○かひ 效、貝さかける。  
 ○關守 空蟬の夫。  
 ○年頃の 永く御無沙汰したので初めてお便りを差上げる様  
 ○たゞ今 貴女と初めて逢つた夜の事が

近の尉解けて御供に下りしをぞ、とりわきてなし出で給ひければ、それにぞ誰も思ひ知りて、なぞて少しも世に従ふ心をつかひけむなど思ひ出でける。佐召し寄せて御消息あり。今は思し忘れぬべきことを、心長くおはするかなと、思ひ居たり。一日は契り知られしを、然は思し知りけむや。わくらばに行きあふみちを頼みしもなほかひなしやしほならぬ海關守の、さも羨ましく、目ざましかりしかな。とあり。源年頃のとだえも初々しくなりにけれど、心にはいつとなく、たゞ今の心地するならひになむ。すきくしう、いと憎まれむや。」とて賜へれば、かたじけなくて持て行きて、右衛門なほ聞えたまへ。昔には少し思しのか事あらむと思ひ給ふるに、同じやうなる御心の懐かしさなむ、いと有り難き。すさびごとぞ用なきと思へど、えこそすくよかに聞えかへさね。女にては負け聞え給へらむに、罪許されぬべし。」などいふ。今はましていと恥かしう、よろづの事初々しき心地すれど、珍らしきにや、え忍ばれざりけむ。「あふさかの關やいかなるせきなれば繁きなけきの中をわくらむ夢の様になむ。」と聞えたり。あはれもつらさも忘れぬふしと思し置かれたる人なれば、折

○常陸守 空蟬の夫  
 ○この君 空蟬。  
 ○心憂き つらい。  
 ○この人 常陸守。  
 ○はふれ 放浪する  
 ○見るに 常陸守が  
 ○いかでかこの人  
 空蟬のために。  
 ○我が子ども 子供  
 の心もあてにならぬ  
 故。  
 ○心に云々 命は心  
 の思ふまゝにならぬ  
 もので。  
 ○さ宣ひし 父が空  
 蟬を大切にせよと。  
 ○情づくれど 常陸  
 の子達。  
 ○すき心 空蟬に。  
 ○あはれに宣ひ 父  
 の遺言故。  
 ○あさましき 怪し  
 からぬ料簡。  
 ○珍らしき 飛んで  
 もない事までも聞く  
 ○思ひ知り 宿世を  
 ○守も 河内守。  
 ○おのれを 自分を  
 嫌つての出家たらう

折はなほ宣ひ動かしけり。

かかる程に、この常陸守、老のつもりにや、惱ましうのみして、もの心細かりければ、子どもに、唯この君の御事をのみ言ひ置きて、常陸守「よろづの事、唯この御心にのみ任せ、我が在りつる世にかはらで仕う奉れ。」とのみ、且暮言ひけり。女君、心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、如何なる様にはふれ惑ふべきにかあらむと、思ひ歎き給ふを見るに、命の限りあるものなれば、惜しみ留むべき方なし、いかでかこの人の御爲に、残り置く魂もがな、我が子どもの心も知らぬをと、後めたう悲しき事に言ひ思へど、心にえとどめぬ者にて亡せぬ。暫しこそ、「さ宣ひしものを。」など、情づくれど、上べこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世の理なれば、身一つの憂き事にて歎き明し暮す。たゞこの河内守のみぞ、昔よりすき心ありて少し情がりける。河内守「あはれに宣ひおきしを、數ならずとも、思し疎まで宣はせよ。」など、追従しよりて、いとあさましき心の見えければ、憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてくは珍らしき事どもを、聞き添ふるかなと、人知れず思ひ知りて、人に然なむとも知らせで尼になりにけり。在る人々、いふかひなしと思ひ歎く。守もいとつらう、河内守「おのれを厭ひ給ふ程に。残りの御齡は

○あいな の つまら  
 ぬ。

多くものし給ふらむ、いかでか過し給ふべき、あいな の さかしらや。」などぞ侍るめる。

○源氏三十一歳の春  
 ○前齋宮 六條御息所の姫君、秋好と言ふ。  
 ○中宮 藤壺。  
 ○大殿 源氏。  
 ○院 朱雀院。  
 ○口惜しく 心懸けた秋好を取られて。  
 ○その日 入内の日。  
 ○百歩の外 遠く迄。  
 ○ミ、のへ 前齋宮へお贈りになる。  
 ○大臣 内大臣の源氏の事。  
 ○わざと わざ／＼作つたらしく立派だ。  
 ○殿も 源氏も。  
 ○心葉 箱などの装飾として花の作り枝をつけたのをいふ。  
 ○わかれぢに 齋宮の伊勢下りに別れの柳を挿す時再び歸京するなご救がある。

繪合

前齋宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほし聞え給ふ。こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞召さむことを憚りたまひて、二條院に渡し奉らむ事をも、この度は思しとまりて、たゞ知らず顔にもてなし給へれど、大方の事どもはとりもちて、親めき聞え給ふ。院はいと口惜しく思しめせど、人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うち亂りの箱、香壺の箱ども尋常ならず。種々の御薰物ども、薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ勻ふまで、心ことにと、のへさせ給へり。大臣見給ひもせむにと、かねてよりや思し設けけむ、いとわざとがましかめり。殿も渡り給へる程にて、斯くなむと女別當御覽せさす。たゞ御櫛の箱の片つ方を見給ふに、盡きせずこまやかになまめきて、珍らしき様なり。さしぐしの箱の心葉に、  
 わかれぢに添へしをぐしをかごとにてはるけき中と神やいさめし

○我が御心 故障のある女に戀の増す自分の性質から考へて  
 ○かの 齋宮伊勢へ  
 ○われになりて 自分にとつても。  
 ○惱ます 朱雀を。  
 ○つらしさも 源が流涕された事に依り  
 ○御返り 齋宮から朱雀への御返事は。  
 ○又御消息 他に朱雀のお手紙はないか  
 ○あるまじき 返事を差上休ぬとは。  
 ○いにしへ 伊勢下りの別れの儀式の際を。  
 ○御様 朱雀の。  
 ○わかるごと あの別れの際のお詞はつらく感じられたが今は却て物思ひの種です「かへりて」は歸りてと却りてとかけてある。

繪

合

大臣これを御覽じつけて、思しめぐらすに、いと辱くいとほしくて、我が御心ならひのあやくなる身をつみて、かの下り給ひし程、御心に思ほしける事、かう年経て歸り給ひて、その御志をも遂げ給ふべき程に、かかる違目のあるをいかに思すらむ、御位を去り、物しづかにて、世をうらめしとや思すらむ、われになりて心動くべき節かなと、思しつゞけ給ふに、いとほしく、何にかく強ちなる事を思ひ始めて心苦しく思し惱ますらむ、つらしとも思ひ聞えしかど、又懐かしく哀れなる御心ばへを、など思ひ亂れ給ひて、と許りうち眺め給へり。源「この御返りは、如何様にか聞えさせ給ふらむ。又御消息もいかゞ。」など聞えたまへど、いとかたはらいたければ、御文はえ引き出でず。宮は惱ましげに思して、御返りいと物憂くし給へど、「聞え給はさらむも、いと情なく辱なかるべし。」と、人こそ、のかし煩ひ聞ゆるけはひを聞き給ひて、源「いとあるまじき御事なり。しるしばかり聞えさせ給へ。」と聞え給ふも、いと恥かしけれど、いにしへ思し出づるに、いとなまめき清らにて、いみじう泣き給ひし御様を、そこはかとなく哀れと見奉り給ひし御稚心も、たゞ今の事と覺ゆるに、故御息所の御事なども、かき連ね哀れに思されて、たゞ斯く。  
 わかるとて遙かにいひしひとこともかへりてものは今ぞかなしき

- 大臣は 源は齋宮の御返事を見たく思つたが。
- この御けはひ 秋好の御様子。
- 似けなからず 院とよく似合ふ。
- ものし ひごい。
- 事ども 入内準備
- うけはり 何もかもひきうけて居る。
- 御まぶらひ 一通りの御見舞の参内。
- 宮 齋宮の邸。
- 里がち 里にのみ下つてゐた侍女も。
- おはせ 御息所が
- 大方の 男女關係を離れての。
- さこそえあらぬ 他の方はごてもさうはあり得ない。
- 中宮も 藤壺。
- 珍らしき人 齋宮

とばかりやありけむ。御使の祿しなく、に賜はず。大臣は御返りをいとゆかしう思せど、え聞え給はず。院の御有様は、女にて見奉らまほしきを、この御けはひも似けなからず、いとよき御あはひなめるを、内裏まだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へ聞ゆるを、人知れずものしと思すらむなど、にくき事をさへ思しやりて、胸つぶれたまへど、今日になりて思しとむべき事にしあらねば、事ども有るべき様に宣ひおきて、睦まじうおほす修理の宰相を、くはしう仕うまつるべく宣うて、内裏に参り給ひぬ。うけぱりたる親さまには聞召されじと、院をつゝみ聞え給ひて、御とぶらひばかりと見せ給へり。よき女房などはもとより多かる宮なれば、里がちなりしも参り集ひて、いとなく、けはひあらまほし。あはれおはせましかば、如何にかひありて思いたづかましと、昔の御心ざま思し出づるに、大方の世につけても、惜しうあたらしかりし人の御有様ぞや、さこそえあらぬものなりけれ。由ありし方はなほ勝れて、物の折ごとと思ひ出で聞え給ふ。中宮も内裏にぞおはしましたしける。上は、珍らしき人参り給ふと聞召しければ、いとうつくしう御心づかひしておはします。程よりはいみじうざれおとなび給へり。宮も、かく恥かしき人参り給ふを、御心づかひして、見え奉らせ給へ。」と聞えたまひけり。人知れず、

- 大人 年上の女は
- つゝましけ 齋宮の様子。
- 弘徽殿 頭中將娘
- これは 齋宮は。
- 大臣の 源氏の。
- あなた 弘徽殿の方。
- 權中納言 頭中將
- 思ふ心ありて 娘を中宮にせんごの心
- かく参り 齋宮が
- きしろふ 競争する。
- さきくも 以前にも仰言つた事故。
- 然思ふ 懸想した
- めでたし 朱雀が齋宮の事を。
- ゆかしう 源も齋宮の顔を見度く。
- ねたう 残念に。
- おもりか 齋宮は

大人は恥かしうやあらむと思しけるを、いたく夜更けて参り上り給へり。いとつゝましけにおほどかにて、小やかにあえかなるけはひのし給へれば、いとをかしと思しけり。弘徽殿には御覽じつきたれば、睦まじうあはれに、心安く思ほし、これは人さまもいたうしめり恥かしけに、大臣の御もてなしもやんごとなく装ほしければ、侮りにくく思されて、御宿直などはひとしくし給へど、うちとけたる御童遊びに、晝など渡らせ給ふことは、あなたがちにおはします。權中納言は、思ふ心ありて聞え給ひけるに、かく参り給ひて、御女にきしろふさまにて侍ひ給ふを、かたぐに安からず思すべし。院には、かの櫛の箱の御かへり御覽せしにつけても、御心離れ難かりけり。その頃大臣の参り給へるに、御物語こまやかなり。事のついでに、齋宮の下り給ひし事、さきくも宣ひ出づれば、聞え出で給ひて、然思ふ心なむありしなどはえ顯はし給はず。大臣も、かかる御氣色聞き顔にはあらで、たゞ如何に思したるとゆかしさに、とかう彼の御事をきこえ出で給へるに、哀れなる御氣色のあさはかならず見ゆれば、いとほしく思す。めでたしと思ほししみにける御容貌、如何様なるをかしきかと、ゆかしう思ひ聞え給へど、更に見奉り給はぬを、ねたう思はず。いとおもりかにて、夢にもいはけたる御舉動あら

○見奉り 直接顔を合はせず物越に逢ふのが當時の習慣。  
 ○二所 弘徽殿と齋宮と女御が二人。  
 ○えおもほし 紫の異腹の妹を入内させようと思し立たれな  
 い。  
 ○御おほえ 御寵愛  
 ○上 帝。  
 ○立てて 取りわけ  
 ○をかしけなる人 齋宮の女御をいふ。  
 ○まほならず 慰め  
 半分に。  
 ○添ひ臥し 物に凭  
 る。  
 ○御思ひ 御寵愛が  
 ○勝れたる上手 畫  
 工の。  
 ○になき 甚だ美し  
 い紙。  
 ○物語繪 昔物語の  
 趣を描いた畫。  
 ○月次の繪 十二箇  
 月の季節を描いた畫

ばこそ、おのづからほの見え給ふ序もあらめ、心にき御けはひのみ深さまされば、見奉り給ふまゝに、いとあらまほしと思ひ聞え給へり。かく透聞なくて二所侍ひ給へば、兵部卿の宮、すがくともえおもほしたたず、帝おとなび給ひなば、さりともえおもほし捨てじとぞ、待ち過し給ふ。二所の御おほえども、とりづくに挑み給へり。  
 上はよろづの事に勝れて、繪を興あるものに思したり。立てて好ませ給へばにや、になく畫かせ給ふ。齋宮の女御、いとをかしう畫かせ給ひければ、これに御心うつりて、渡らせ給ひつ、畫き通はさせ給ふ。殿上の若き人々も、この事まねぶをば、御心留めてをかしきものに思ほしたれば、ましてをかしけなる人の、心ばへある様に、まほならず畫きすさび、なまめかしう添ひ臥して、とかく筆うち休らひ給へる様、らうたけさに御心しみて、いと繁う渡らせ給ひて、ありしより勝に御思ひのまされるを、權中納言聞き給ひて、飽くまでかどくしく今めき給へる御心にて、われ人に劣りなむやと思し勵みて、勝れたる上手どもを召し取りて、いみじういまして、また無き様なる繪どもを、になき紙どもに畫き集めさせ給ふ。頭中將「物語繪こそ、心ばへ見えて見所あるものなれ。」とて、面白く心ばへある限りを擇りつ、畫かせ給ふ。例の月次の繪も、見馴れぬ様に、言の葉を書き續けて、

○わざと 特に面白く描いてある畫故。  
 ○此方にも 弘徽殿の御部屋で帝が御覽にならうとして  
 も。  
 ○此の御方 齋宮へ  
 ○殿に 源邸にある  
 ○女君 紫の上。  
 ○忌ある か様だ不吉な話の畫は。  
 ○かの旅の 須磨請居の時の。  
 ○心しらす 其の時の事情も知らずして  
 ○その夜の夢 別れた時の悲しさを。  
 ○一人居て 別れて  
 獨りで物思ひに耽つて  
 いたが繪でも描いて  
 慰んだ方がよかつた。  
 ○うきめ見し 此の畫を見れば昔が思ひ  
 出されて悲しい。

御覽せさせ給ふ。わざとをかしうしたれば、又此方にもこれを御覽するに、心やすくもとり出で給はず。いといたく秘めて、此の御方に持て渡らせ給ふを、惜しみ領じ給へば、大臣聞き給ひて、源「なほ權中納言の御心の若々しさこそ、改まりがたかめれ。」など笑ひ給ふ。源「あながちに隠して、心安くも御覽せさせず、惱まし聞ゆる、いとめざましや。古代の御繪共の侍る、参らせむ。」と奏し給ひて、殿に舊き新しき繪共入りたる御厨子ども開かせ給ひて、女君と諸共に、今めかしきは、それくんと擇り鑿へさせ給ふ。長恨歌、王昭君などやうなる繪は、面白くあはれなれど、事の忌あるは此度は奉らじと、擇りとめたまふ。かの旅の御日記の筥をも取り出でさせ給ひて、この序にぞ、女君にも見せ奉り給ひける。心しらすで今見む人だに、少し物思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたく、その夜の夢を思ひます折なき御心どもには、取りかへし悲しう思し出でる。今まで見せ給はざりける恨みをぞ聞え給ひける。  
 紫「一人居て眺めしよりはあまのすむかたを畫きてぞ見るべかりける  
 おほつかなさは、慰みなましものを。」と宣ふ。いとあはれと思して、  
 源 うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにし方にかへる涙か

- 中宮 藤壺。
- かたはなるまじき 不出来でない。
- さやかに 明白に
- かのあるじの家居 ぞ 明石の上の住居の事が。
- かう繪ども 源氏の方で。
- 御覽し所も 帝の興が増す爲に源が考へ附いて。
- 集め 種々の繪を
- 此方彼方 齊宮の方弘徽殿の方まで
- 梅壺の御方 齊宮勝れり 弘徽殿の方の繪が。
- 上の 帝附の女官
- 中宮も 藤壺も宮中に來合はせてる
- 梅壺の 齊宮方。
- 右 弘徽殿方。

中宮許りには、見せ奉るべきものなり。かたはなるまじき一帖づゝ、さすがに浦々の有様さやかに見えたるを、擇り給ふついでにも、かのあるじの家居ぞ、まづ如何にと思しやらぬ時の間もなき。かう繪ども集めらると聞き給ひて、權中納言いと心をつくして、軸、表紙、紐のかざり、いよく鑿へたまふ。三月の十日の程なれば、空も麗かにて、人の心も延び、物おもしろき折なるに、内裏邊も、然るべき節會どもの間なれば、唯かやうの事どもにて、御かたぐ暮したまふを、おなじくは、御覽し所もまさりぬべくて奉らむの御心つきて、いとわざと集め参らせ給へり。此方彼方とさまざま多かり。物語繪はこまやかに、懐かしさ勝るめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、弘徽殿は、その頃世に珍らしく、をかしき限りを選りて畫かせ給へれば、うち見る目の今めかしき花やかさは、いとこよなく勝れり。上の女房なども、由あるかぎり、これはかれはなど定めあへるを、この頃の事にすめり。

中宮も参らせ給へる頃にて、かたぐ御覽じ捨て難く思ほすことなれば、御行ひも怠りつゝ、御覽す。この人々のとりぐに論ずるを聞召して、左右と方分かせ給ふ。梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少將の命婦、右には大貳の典侍、中將の命婦、兵衛の命

- 遙かに思ひ 氣位が高く遂に宿縁によつて昇天した。
- 下れる人 かぐや姫は卑しい身分の人
- 家の内は かぐや姫の身に光があつて一家の内を照らした
- 百敷の 妃として入内して宮中に威光を輝かす事は出来なかつた。
- 火鼠の 苦心して得た火鼠裘が忽ち焼け失せるのも曲がない。
- 蓬萊の 蓬萊は人の行き得ぬ所と知りながら儂りの玉の枝を作つたのも缺點である。
- 綺 唐來の綾絹。
- ほいて 陪して縁邊をつける事。
- 知らぬ國 波斯國
- 他のみかど 異國
- 才 琴曲の妙。

婦を、唯今は心にいき有職どもにて、心々にあらそふ口つきどもを、をかしと聞召して、まづ物語の出で來初めの親なる竹取の翁に、空穗の俊蔭を合はせて争ふ。左方なよ竹の世に古りにける事、をかしき節もなけれど、かぐや姫の、この世の濁りにも穢れず、遙かに思ひのほれる契りたかく、神世の事なめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし。といふ。右は、「かぐや姫の上りけむ雲井は、けに及ばぬ事なれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそ見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光にはなはずなりにけり。安部の多が千々の金を棄てて、火鼠のおもひ、片時に消えたるいとあへなし。くら持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に、疵をつけたるをあやまちとなす。」繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之かけり。紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。右方俊蔭は、はけしき波風におほほれ、知らぬ國に放たれしかど、なほさして行きける方の志もかなひて、遂に他のみかどにも、我が國にも、ありがたき才の程をひろめ、名を残しける深き心をいふに、繪のさまも、唐土と日の本とを取りならべて、おもしろき事どもなほ並びなし。」といふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。繪は常則、手は道

- そのことわり 倭藤に對する批評。
- 正三位 物語の名
- 平内侍 右方の人
- 伊勢の海の 伊勢物語の深意を解せず古風だ云つて非難する事は出来ない
- 右のすけ 大貳典侍。
- 千ひろの底 深い伊勢海の底。
- 兵衛の大君 正三位物語中の人物の名
- 見るめこそ 見た所は。
- えも言ひ 議論の收まりがつかない。
- ゆかし 此の繪合の繪を見たがるが。
- 上のも宮のも 帝附の女官も藤壺附の女房も。

風なれば、今めかしうをかしけに、目も輝くまで見ゆ。左にはそのことわりなし。次に伊勢物語に、正三位をあはせて、また定めやらす。これも、右はおもしろく賑ははしく、内裏わたりよりはじめ、近き世の有様を畫きたるは、をかしう見所まさる。平内侍、

「伊勢の海のふかき心をたどらすてふりにし跡と波や消つべき世の常のあだごとのひき繕ひ飾れるに壓されて、業平が名をやくたすべき。」と、争ひかねたり。右のすけ、

雲のうへに思ひのほれる心には千ひろの底もはるかにぞ見る

藤壺「兵衛の大君の心高さは、けに捨て難けれど、在五中將の名をば、得くたさじ。」と宣はせて、宮、

藤壺 見るめこそうらぶりぬらめ年經にしいせをのあまの名をや沈めむ

かやうの女言にて、亂りがはしく争ふに、一卷に言の葉を盡して、えも言ひやらす。たゞ淺はかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、上のも宮のも片端をだにえ見ず、いたう秘めさせ給ふ。

大臣参り給ひて、かくとりくに争ひ騒ぐ心ばへども、をかしく思ひて、源「同じくは、

- 紙繪 障子繪屏風繪に對し只の紙に描いた繪。
- わりなき窓 秘密にの意。
- 節會 年中の儀式
- 延喜 醍醐帝の。
- 我が 朱雀自身の
- 下り 伊勢下向の訣別の儀式。
- 公茂 巨勢金岡の孫公茂の描いた繪が
- 沈の箱 沈香木で作つた箱。
- 院の殿上 内裏に院御所に出仕する
- かの大極殿の 齋宮伊勢下りの際の際
- しめの外 禁裏外「しめ繩」の意をかける。
- そのかみ 「その昔」に「神」をかけたある。
- 聞え 返事を。
- 昔の 齋宮の時の

御前にてこの勝負定めむ。」と宣ひなりぬ。かかる事もやと、かねて思ひければ、中にも殊なるは擇りとめ給へるに、かの須磨明石の二巻は、思す所ありて取交せさせたまへりけり。中納言もその心劣らず。この頃の世には、たゞ斯く面白き紙繪を鑿ふることを、天の下營みたり。源「今改め畫かむ事は本意なき事なり。唯ありけむ限りをこそ。」と宣へど、中納言は人にも見せて、わりなき窓をあけて畫かせ給ふめるを、院にも斯かる事聞かせ給ひて、梅壺に御繪ども奉らせ給へり。年の内の節會どもの、おもしろく興あるを、昔の上手どものとりくに畫けるに、延喜の御手づから、事の心畫かせ給へるに、また我が御世の事も畫かせ給へる巻に、かの齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思ひければ、畫くべき様委しく仰せられて、公茂が仕う奉れるが、いとみじきを奉らせ給へり。艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉の様などいと今めかし。御消息はたゞ言葉にて、院の殿上にも侍ふ左近中將を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに、

朱雀 身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず

とのみあり。聞え給はざらむもいとかたじけなければ、苦しく思しながら、昔の御かんざしの端をいさゝか折りて、



- ありし世 御在位の時代。
- 過ぎにしかた 源を流請した事。
- 後の宮 故弘徽殿
- あの女御 今の弘徽殿女御。
- 尚侍 臘月夜。
- その日 繪合の日を。
- はかなう 手輕に
- 女房の侍 清涼殿の盤盤所。
- 心よせ 左右何れかに扇履の心を寄せ
- 打敷 下机を据ゑる敷物。
- 浅香 沈香の若木
- あしゆひ 机の足に巻いて飾る組紐。
- かき立つ 繪の人をつた箱を。
- 前後 左右に依り
- 内の大臣 源氏。
- 帥の宮 發兵部卿といふ、源の異腹の弟。

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞこひしきとて、縹の唐の紙に包みて參らせたまふ。御使の祿などいとなまめかし。院の帝御覽するに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世をとりかへさまほしく思しける。大臣をもつらしと思ひ聞えさせ給ひけむかし。過ぎにしかたの御報いにやありけむ。院の御繪は、後の宮より傳はりて、あの女御の御方にも多く參るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましきは人に勝れて、をかしき様にとりなしつゝ、集め給ふ。

その日と定めて、俄なる様なれど、をかしき様にはかなうしなして、左右の御繪ども參らせ給ふ。女房の侍に御座よそはせて、北南かたぐいに別れてさぶらふ。殿上人は後涼殿の簀子に、おのゝ心よせつゝ侍ふ。左は紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に櫻襲の汗衫、柏は紅に藤襲の織物なり。姿用意などなべてならず見ゆ。右は沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、花足の心ばへなど、いと今めかし。童青色に柳の汗衫、山吹がさねの柏著たり。皆御前にかき立つ。上の女房、前後と装束き分けたり。召しありて、内の大臣權中納言參り給ふ。その日帥の宮も參り給へり。いと由ありておはする中に、繪をなむたてて好

- 下に 源が内々で
- 判 繪合の審判役
- え定めやり 優秀の判断がつかない。
- 紙繪 障子屏風などの繪に對してたゞの繪をいふ。
- 限り 紙幅に。
- 人の心 構想の妙
- 昔の 古人の畫に
- 朝餉の 清涼殿の朝餉の問の。
- 知召し 繪畫の事を。
- さしいらへ 源が判定に不服で口を出す様子も立派である
- 敷ひまつ 最後に残つてゐる一番の時
- あなた 弘徽殿方
- 親王 判者帥の宮
- その世 退去の時

み給へば、大臣の下にすゝめ給へる様やあらむ、事々しき召しにはあらで殿上に侍ひ給ふを、仰言ありて、御前に參り給ふ。この判仕う奉り給ふ。けにいとみじう書き盡したる繪どもあり。更にえ定めやり給はず。例の四季の繪も、いにしへの上手どもの、面白き事どもを選びつゝ、筆とこほらず書きながしたる様、譬へむ方なしと見るに、紙繪は限りありて、山水のゆたかなる心ばへを、え見せ盡さぬものなれば、たゞ筆のかざり、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔の跡に恥なく、賑ははしくあなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くのあらそひども、今日はかたぐいに興ある事ども多かり。朝餉の御障子を開けて、中宮もおはします。深く知召したらむと思ふに、大臣もいと優に覺え給ひて、所々の判ども、心もとなき折々に、時々さしいらへ給ひける程あらまほし。定めかねて夜に入りぬ。左なほ數ひとつあるはてに、須磨の巻出で來たるに、中納言の御心さわぎにけり。あなたにも心して、はての巻は心ことに勝れたるを選び置き給へるに、かかるいみじき物の上手の、心のかぎり思ひすまして靜かに書き給へるは、譬ふべきかたなし。親王より始めたてまつりて、涙とめ給はず。その世に、心苦し悲しと思しし程よりも、おはしけむ有様、御心に思しけむ事ども、たゞ今の様に見ゆ。所のさま、おほつかなき浦

○草の手 草書(詞書の文字の事)。  
 ○まほの 正式の、當時の男子の日記は漢字で書く。  
 ○才なき附きぬべくや 自分に。  
 ○院の 桐壺の帝。  
 ○進みぬる 才學の。  
 ○さらでも 品たかくなくとも。  
 ○本才の 眞の學問。  
 ○かたぐいの 以外の。  
 ○ごり立てて 特に得意として。  
 ○山賤 須磨明石の謫居をいふ。  
 ○思ひよらぬ限なく その趣は十分會得出來たが。  
 ○心より 思ふ様に筆が動かぬ。

浦磯の隠れなく、書きあらはし給へり。草の手に、假名を所々に書きまぜて、まほの委しき日記にはあらず、哀れなる歌なども交れる類ゆかしう、誰も他事おほさず。さまざまの御繪の興、これに皆うつりはてて、あはれに面白し。萬皆おし讓りて、左勝になりぬ。夜明けがた近くなる程に、物いと哀れに思されて、御土器などまるる序に、昔の御物語共出で来て、遷、幼き程より、學問に心を入れて侍りしに、少しも才など附きぬべくや御覽じけむ、院の宣はせし様、「才學といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命と幸ひと並びぬるは、いと難きものになむ、品たかく生まれ、さらでも人に劣るまじき程にて、強ちにこの道な深く習ひそ。」と諫めさせ給ひて、本才のたがたの物教へさせ給ひしに、拙き事もなく、又とり立てて此の事と心得る事も侍らざりき。繪畫く事のみなむ、あやしくはかなきものから、如何にしてかは心行く許り畫きて見るべきと、思ふをりく侍りしを、覺えぬ山賤になりて、四方の海の深き心を見しに、更に思ひよらぬ限なくいたられにしかど、筆の行く限りありて、心よりは事のかすなむ思う給へられしを、序なくて御覽せさすべきならねば、斯う好々しき様なる、後の聞えやあらむ。」と、親王に申し給へば、至、何の才も、心よりはなちて習ふべきわざならねど、道々に

○好々しき 其の給を今お見せするのは無益な物好し繪の噂が。  
 ○學び所 お手本。  
 ○ありぬべし 得る所もあらう。  
 ○魂の程 才能の程。  
 ○おれ者 愚者。  
 ○然るべきにて 天才があつて。  
 ○打つ 茶を。  
 ○家の子 貴族の子。  
 ○人に抜ける人 人にすぐれて居る人。  
 ○院の御前 桐壺帝。  
 ○ごり立てたる云々 特に心をこめて源に修行をおさせになつた。  
 ○上も 桐壺も。  
 ○まさなきまで 不思議な程に上手で。  
 ○跡をくらうなしつ べかめる 逃け出す位。  
 ○書司 書籍樂器等の事を司る役所。  
 ○親王 養兵部卿宮。  
 ○上人 僧上人。  
 ○拍子たまはず 拍子を取る役を命ずる

物の師あり、學び所あらむは、ことの深き淺きは知らねど、自らうつさむに迹ありぬべし。筆とる道と棊うつ事とぞ、怪しう魂の程見ゆるを、深きらうなく見ゆるおれ者も、然るべきにて書き打つ類も出で來れど、家の子の中には、なほ人に抜ける人の、何事も好み得けるとぞ見えたる。院の御前にて、親王達内親王、いづれかは、様々とりくの才ならはさせ給はざりけむ。その中にも、とり立てたる御心に入れて、傳へうけとらせ給へるかひありて、文才をばさるものにていはず、然らぬ事の中には、琴彈かせ給ふ事なむ一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、つぎく習ひたまへると、上も思し宣はせき。世の人然思ひ聞えさせたるを、繪はなほ筆の序にすさびさせ給ふあだごととこそ思ひ給へしか。いと斯うまさなきまで、いにしへの墨書の上手ども跡をくらうなしつべかめるは、卻りてけしからぬわざなり。」と、うちみだれ聞え給ひて、ゑひ泣きにや、院の御事聞え出でて、打ちしほたれたまひぬ。二十日餘の月さし出でて、此方はまださやかならねど、大方の空をかき程なるに、書司の御琴めし出でて、權中納言、和琴賜はりたまふ。さは言へど、人には優りてかきたて給へり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少將の命婦仕うまつる。上人のなかに勝れたるを召して、拍子たまはず。いみじう面白し。明

○浦々の巻 繪日記  
 ○つぎ／＼に 追々  
 御覽に入れよう。  
 ○嬉しく見奉り 源  
 が。

○覺え 自分の娘の  
 御寵愛が。  
 ○上の御志云々 併  
 し帝はもごから弘徽  
 殿をお愛しになつて  
 居たから。  
 ○この御時 此の時  
 から始まつた例ミ。  
 ○私様の 私的の此  
 の繪合の様な遊び事  
 ○大人び 帝が。  
 ○昔の 以下源氏の  
 心。  
 ○齡足らで 若年で  
 ○過ぎにたり 分に  
 過ぎた。  
 ○中頃 須磨謫居の  
 頃。

けはつるまゝに、花の色も人の御容貌もほのかに見えて、鳥の囀るほど、心地ゆきめでた  
 き朝朗なり。祿どもは中宮の御方より賜はず。親王は御衣、又重ねて賜はり給ふ。

その頃の事には、この繪の御定めをし給ふ。源「かの浦々の巻は、中宮に侍はせ給へ。」と  
 聞えさせ給ひければ、これが初め、又残りの巻々ゆかしがらせ給へど、源「今つぎ／＼に」  
 と聞えさせ給ふ。上にも御心ゆかせ給ひて思召したるを、嬉しく見奉り給ふ。はかなき事  
 につけても、斯うもてなし聞え給へば、權中納言は猶覺え壓さるべきにやと、心やましう  
 思さるべかめり。上の御志は、もとより思ししみにければ、なほ細やかに思したる様を、  
 人知れず見奉り知り給ひてぞ、頼もしく然りとも思されける。さるべき節會どもにも、こ  
 の御時よりと、末の人の言ひ傳ふべき例を添へむと思し、私様の斯かるはかなき御遊び  
 も珍らしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御世なり。大臣ぞ。なほ常なきものに世を  
 思して、今少し大人びおはしますと見奉りてなほ世を背きなむと、深く思ほすべかめる。  
 昔のためしを見聞くにも、齡足らで官位高くのほり、世に抜けぬる人の、長くはえ保た  
 ぬわざなりけり、この世には、身のほど覺え過ぎにたり。中頃無きになりて沈みたりしう  
 れへに替りて、今までもながらふるなり、今より後の榮えは、なほ命うしろめたし、しづ

○末の君たち 幼い  
 子達。  
 ○疾く捨て 早く出  
 家する事は。  
 ○如何に 結局ごう  
 決着なさるお積りか  
 ○知り難し 源氏の  
 心は。

かに籠り居て、後の世の事をつとめ、かつは齡をも延べむとおほして、山里の長閑なるを  
 占めて、御堂作らせ給ふ。佛、經のいとなみ添へてせさせ給ふめるに、末の君たち、思ふ  
 様にかしづきいだして見むと思召すにぞ、疾く捨て給はむことは難けなる。如何に思し掟  
 つるにかと、いと知り難し。

松風

○源氏三十一歳 繪合と同年。内大臣。  
 ○東の院 二條の東院。  
 ○うつろはし 東院にうつさせ。  
 ○明石の御方 明石の上に住むべき所。  
 ○隔てく 幾つにも區別して。  
 ○時々渡り給ふ 源氏がこの院へ。  
 ○しつらひ 設備。  
 ○上り給ひぬべき事 明石の上の上京。  
 ○御有様 源氏の女に對しての待遇。  
 ○まして 況んや自分(明石)などは。  
 ○この若君の 明石の上と源氏との間に出來た姫君。  
 ○面伏 不面目。  
 ○這ひ渡り 源氏が

東の院つくり立てて、花散里と聞えし、うつろはし給ふ。西の對、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせ給ふ。東の對は、明石の御方と思しおきてたり。北の對は、殊に廣く造らせ給ひて、かりにても、哀れと思して行末かけて契りたのめ給ひし人々の、集ひ住むべき様に、隔てくしつらはせ給へるしも、懐かしう見所ありて細かなり。寢殿はふたけ給はず、時々渡り給ふ御休所にして、さる方なる御しつらひどもし置かせ給へり。

明石には御消息絶えず、今は猶上り給ひぬべき事を宣へど、女は猶我が身の程を思ひ知るに、こよなくやんごとなき際の人々だに、なか／＼さてかけはなれぬ御有様のつれなきを見つ、物思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりの覺えなりとてか、さし出でまじらはむ、この若君の御面伏に、數ならぬ身のほどこそあらはれめ、たまさかに這ひ渡り給ふ序を待つことにて、人笑へにはしたなき事如何にあらむと、思ひ亂れても、また、さり

○ひたすらにもえ恨み背かず 源氏の招きに否とも言ひ切れぬ。  
 ○心も盡きはてぬ 恩案に餘つた。  
 ○御後 子孫。  
 ○末の世に思ひかけぬ事出でてなむ 明石の上が源氏に見そめられて姫君まで生まれたこと。  
 ○舊き所尋ねて 舊縁の所を頼つて。  
 ○然るべき物はあけ渡さむ 入用の物は京へのほうさう。  
 ○下屋 雜舎。  
 ○内の大殿の造らせ給ふ御堂 源氏の嬪娥の御堂。  
 ○何かそれも それも差支なし。  
 ○内の事ども 家の内のこと。

とて斯かる所にて生ひ出で數まへられ給はざらむも、いと哀れなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親達もけに理と思ひ歎くに、なか／＼心も盡きはてぬ。昔母君の御祖父、中務の宮と聞えけるが、領じ給ひける所、大堰河の邊にありけるを、その御後、はか／＼しうあひ繼ぐ人もなくて、年頃荒れ惑ふを思ひ出でて、かの時より傳はりて、宿守の様に於ある人を、呼び取りて語らふ。入道世の中を今はと思ひはてて、かかる住居に沈み初めしかども、末の世に思ひかけぬ事出でてなむ、更に都の住處覓むるを、俄にまばゆき人中いとほしたなく、田舎びにける心地も靜かなるまじきを、舊き所尋ねてとなむ思ひ寄る。然るべき物はあけ渡さむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや。といふ。預り、「この年頃領する人もものし給はず、怪しき藪になりて侍れば、下屋にぞ、繕ひて宿りはべるを、この春の頃より、内の大殿の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと人氣騒がしうなりにて侍る。厳しき御堂ども建てて、多くの人なむ造りいとなみ侍るめる。靜かなる御本意ならば、それや違ひ侍らむ。」入道「何かそれも。かの殿の御かけに、かたかけてと思ふことありて。おのづから追々に内の事どもはしてむ。まづ急ぎて大方の事共を物せよ。」といふ。預り「自ら領する所に侍らねど、又知り傳へ給ふ人もなければ、

○かごかなる 周囲  
と交渉のないこと。  
○故民部大輔の君  
中務の宮の子孫か。  
○貯への事ども云々  
所有物を取上げら  
れはせぬか危みて  
○はちぶきいへは  
空嘘き。  
○券 田畑の所有の  
證書。  
○大殿のけはひをか  
くれは 源氏の後援  
のある様をみせる。  
○若君 明石の姫君  
○造りはてて 大塚  
の家。  
○人にまじらはむ事  
明石の上が人中に  
出るのを。  
○例の忍ぶる道は  
源氏の秘密には。  
○いろひ仕う奉  
携はつてつこめる。

かごかなる習ひにて、年頃かくろへ侍りつるなり。御莊の田畑などいふ事のいたづらに荒れ侍りしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて、さるべき物など奉りてなむ、領じつくり侍るを。」など、そのあたりの貯への事どもを危げに思ひて、鬚がちになし憎き顔を、鼻などうち赤めつ、はちぶきいへば、入道更にその田など様の事は、こゝには知るまじ。唯年頃のやうに思ひてものせよ。券などはこゝになむあれど、すべて世の中を捨てたる身に、年頃ともかくも尋ね知らぬを、そのことも今委しく認めむ。」などいふにも、大殿のけはひをかくれば、煩はしく、その後物など多く受取りてなむ、急ぎ造りける。かやうに思ひ寄るらむとも知り給はで、上らむ事を物憂がるも心得ずおほし、若君のさてつくづくと物し給ふを、後の世に人の言ひ傳へむ、今ひとときは人わろき疵にやと思ほすに、造りはてぞ、しかくくの所をなむ思ひ出でたると聞えさせける。人にまじらはむ事を苦しげにのみものするは、かく思ふなりけりと心得給ふ。口惜しからぬ心の用意の程かなと、思しなりぬ。惟光朝臣、例の忍ぶる道は、いつとなく、いろひ仕う奉る人なれば、遣はして、さるべき様に此處彼處の用意などせさせ給ひけり。惟光「あたりをかしうて、海面に通ひたる所のさまになむ侍りける。」と聞ゆれば、さやうの住居に、よしなからずはありぬべしと思

○劣らず 大覺寺の  
瀧殿に。  
○これは 明石の上  
の邸。  
○何のいたはりもな  
く 無造作に。  
○こぞそぎたる 簡  
畧にしたる。  
○くだしつかはす  
明石の迎へてして。  
○心づくし 心配が  
絶えぬ。  
○露のかゝらぬ類  
源氏に關係ない人々  
○同じ庵にも住まず  
入道と同じ庵に。  
○見なれそなれて  
「みなれ木のみなれ  
そなれて離れなは戀  
しからむや戀しから  
じや。」  
○もて僻めたる頭つ  
き 偏屈な入道の容  
貌。  
○若き人々 明石の  
侍女達。

す。造らせ給ふ御堂は、大覺寺の南にあたりて、瀧殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり。これは川面に、えもいはぬ松陰に、何のいたはりもなく建てたる、寢殿のことそぎたる様も、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで思し寄る。親しき人々、いみじう忍びてくだしつかはす。遁れ難くて今はと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、入道の心ほそくて一人留らむことを思ひ亂れて、よろづに悲し。すべてなどかく心づくしになり始めけむ身にかと、露のかゝらぬ類うらやましく覺ゆ。親達も、かかる御迎へにて上る幸ひは、年頃寝てもさめても願ひわたりし志の叶ふと、いと嬉しけれど、あひ見で過ぎむいぶせさの、堪へ難う悲しければ、晝夜思ひほれて、同じ事をのみ、入道「さらば若君をば見奉らでは侍るべきか。」と言ふより外の事なし。母君もいみじう哀れなり。年頃だに、同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰によりてかはかけだならざめるを、ましても僻めたる頭つき、心おきてこそ頼もしけなけれど、又さる方に、これこそは世を限るべき住家なめれと、ありはてぬ命を限りに思ひて、契り過し來つるを、俄に行き離れなむも心細し。若き人々のいぶせう思ひ沈みつるは、うれしきものか

○又はえしもかへら  
 じ 又歸つてくる事  
 はなるまい。  
 ○その日さある曉  
 今日出發といふ日。  
 ○海の方を見出して  
 居たるに 明石の上  
 が。  
 ○後夜 後夜の佛前  
 の勤め。  
 ○鼻す、りうちして  
 泣くさま。  
 ○若君 明石の姫。  
 ○見馴れてまつはし  
 給へる 若君が入道  
 を見馴れて。  
 ○かく人に違へる身  
 入道した我が身。  
 ○もろごもに都はい  
 でき 明石入道の播  
 磨守に成つて下りし  
 時を言ふ。  
 ○御かた 明石の上  
 ○おくりにだに 見  
 送りにでも一緒に

ら、見捨て難き濱のさまを、又はえしもかへらじかすと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。秋の頃ほひなれば、物のあはれ取り重ねたる心地して、その日とある曉、秋風涼しくて、蟲の音もとりあへぬに、海の方を見出して居たるに、入道、例の後夜より深う起きて、鼻す、りうちして、行ひましたり。いみじう言忌すれど、誰もくいと忍び難し。若君は、いともく美しげに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外にはなち聞えざりつるを、見馴れてまつはし給へる、心ざまなど、ゆ、しきまで、かく人に違へる身を、いまいましく思ひながら、片時見奉らでは、いかでか過ぎむとすらむと、つ、みあへず。  
 「行くさきをはるかに祈る別れ路にたへぬは老の涙なりけり  
 いともの、しや」とて、おし拭ひかくす。尼君、  
 もろごもに都はいできこのたびやひとり野中の道に惑はむ  
 とて泣き給ふ様、いと理なり。こゝら契りかはして積りぬる年月の程を思へば、斯う浮きたる事を頼みて、捨てし世にかへるも、思へばはかなしや。御かた、  
 「いきて又あひ見むことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まむ  
 おくりにだに。」と、切に宣へど、かたぐにつけて、え然るまじきよしを言ひつ、さす

○人の國 地方に。  
 ○君の御ため 明石  
 の上の爲に。  
 ○古受領のしづめる  
 類 國守の古手の客  
 落して居る奴。  
 ○親の御なきか伊  
 父が大臣である故云  
 ふ。  
 ○その方につけては  
 さうした一身の進  
 退については。  
 ○思ひより難くて  
 思ひも寄らず。  
 ○なか、却つて  
 ○契りこみに覺え  
 姫は其の様な運命の  
 人では無いと思はれ  
 る。  
 ○見奉らざらむ心惑  
 ひ 姫を見ぬ悲しみ  
 ○暫しかかる山がつ  
 の心を云々 暫し我  
 を斯く悲しませべき  
 前世の約束があつた  
 のであらう。

がに道のほども、いとうしろめたき氣色なり。入道「世の中を捨て始めしに、かかる人の國に思ひ下り侍りし事も、たゞ君の御ため思ふやうに旦暮の御かしづきも心に叶ふやうもとや、思ひ給へ立ちしかど、身の拙かりける際の、思ひ知らるゝ事多かりしかば、更に都に歸りて、古受領のしづめる類にて、貧しき家の蓬葎の、もとの有様あらたむる事もなきものから、公 私にをこがましき名をひろめて、親の御なきかけを、はづかしめむ事のいみじさになむ、やがて世を捨てつる首途なりけりと、人にも知られにしを、その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひ侍るに、君のやうくおとなび給ひ、物思ほし知るべきに添へて、などかう口惜しき世界にて錦をかくし聞ゆらむと、心の閑晴間なく歎きわたり侍りしまゝに、佛神を頼み聞えて、さりと、斯う拙き身に引かれて、山がつの庵にはまじり給はじと、思ふ心一つに頼み侍りしに、思ひより難くて、嬉しき事どもを見奉りそめても、なか／＼身の程をとざまかうざまに悲しう歎き侍りつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かかる渚に月日を過し給はむも、いとかたじけなう。契りことに覺え給へば、見奉らざらむ心惑ひは鎮め難けれど、この身は長く世を捨てし心侍りき。君達は、世を照らし給ふべき光著ければ、暫しかかる山がつの心を、亂り給ふばか

○天に生まるゝ人の  
天人果報盡きれば  
俄鬼畜生地獄の三惡  
道に歸る。  
○命盡きぬと私  
死んだと。  
○心ぎたなく 思ひ  
切り懸く。  
○うちひそみぬる  
泣面する。  
○かたへづゝ車と  
船路とに。  
○哀れいひける浦  
「ほのくゝ」明石の  
浦の朝霧に島がくれ  
ゆく船をしぞ思ふ。  
○心すまはずまじく  
煩惱が断てさうも  
なく。  
○かのきしに 彼岸  
の淨土に。  
○思ふ方の風 順風  
○入り給ひぬ 京に  
○輕らかに 簡單に

りの御契りこそはありけめ。天に生まるゝ人の、あやしき三つの途に歸るらむ一時に思ひ  
擬へて、今日長く別れ奉りぬ。命盡きぬと聞召すとも、後の事思ほしいとなむな。さらぬ  
別れに御心動かし給ふな。」など、言ひ放つものから、人遣「煙ともならむ夕までは、若君の  
御事をなむ、六時のつとめにも、なほ心ぎたなくうちませ侍りぬべき。」とて、これにぞう  
ちひそみぬる。御車はあまた續けむも所せく、かたへづゝ分けむも煩はしとて、御供の人  
人も、あながちに隠ろへ忍ぶれば、船にて忍びやかにと定めたり。辰の時に船出し給ふ。  
昔の人も哀れといひける浦の、朝霧隔たり行くまゝに、いと物悲しくて、入道は、心すみ  
はつまじく、あくがれて眺め居たり。こゝら年を経て今更に歸るも、なほ思ひつきせず、  
尼君は泣き給ふ。

かのきしに心よりにし海士船のそむきし方に漕ぎかへるかな

御かた、

いくかへり行きかふ秋を過しつゝ、浮木にのりてわれかへらむ

思ふ方の風にて、限りける日違へず入り給ひぬ。人に見咎められじの心あれば、道の程  
も輕らかにしなしたり。家の様もおもしろうて、年頃經つる海面に覺えたれば、所かへた

○細やかなるにはあ  
らねど 十分手が届  
いて造つてはるない  
が。  
○親しき家司に 源  
氏が。  
○御まうけ 到著の  
樂應。  
○渡り給はむ事 源  
氏自身がこゝへ。  
○折のいみじう忍び  
難ければ 場合が非  
常に悲しい時だから  
○身をかへて 人道  
と別れて來た意。  
○故里に云々 明石  
の浦を思ひよむ。  
○大臣 源氏。  
○女君 紫の上。  
○見るべき事 行く  
べき用事。  
○さぶらはむと言ひ  
し人 尋ねてやる約  
束の人。

る心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、哀れなること多かり。作り添へたる廊など、故  
ある様に、水の流れもをかしうしなしたり。まだ細やかなるにはあらねど、住みつかば然  
てもありぬべし。親しき家司に仰せ給ひて、御まうけの事せさせ給ひけり。渡り給はむ事  
は、とかう思したばかり程に、日頃經ぬ。なか／＼物思ひつゞけられて、棄てし家居も戀  
しうつれ／＼なれば、かの御かたみの琴をかきならず。折のいみじう忍び難ければ、人離  
れたる方に打解けて少し弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君物悲しげにて寄り臥  
し給へる、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松かぜぞ吹く

御かた、

故里に見し世の友を戀ひわびてさへづることを誰かわくらむ

かやうに物はかなくて明し暮すに、大臣、なか／＼しづ心なく思さるれば、人目をもえ  
憚りあへ給はでわたり給ふを、女君には、斯くなむと確かに知らせ奉り給はざりけるを、  
例の聞きもやあはせ給ふとて、消息聞え給ふ。暁柱に見るべき事侍るを、いさや心にもあ  
らで程經にけり。とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く來居て待つなれば、心苦し

○桂の院 紫の上は桂と大堰を同じ所と思つてゐる。  
 ○心づきなければ不快なれば。  
 ○斧の柄さへ云々 何時歸られる事やら故事に昔の玉質石室山に入り斧に腰かけて仙人の園裏を見る歸らんとして起ては斧の柄既に朽ち、家に歸れば七世の孫に遇へり。又「斧の柄は朽ちなはまたもす伊かへむうき世の中にかへらずもがな。」  
 ○くらべ苦しき 調子の合はせにくき。  
 ○大殿はらの君 葵の上腹の夕霧。  
 ○山口 芽はえ。  
 ○乳母 明石の姫の鹽屋 漁村の裏に

くてなむ。嵯峨野の御堂にも、かざりなき佛の御とぶらひすべければ、一三日ははべりなむ。」と聞え給ふ。桂の院といふ所、俄に作らせ給ふと聞くは、そこにすゑ給へるにやと思すに、心づきなければ、紫の斧の柄さへ改め給はむ程や、待遠に。」と心ゆかね御氣色なり。源例のくらべ苦しき御心かな。古の有様なごりなしと世の人もいふなるものを。」と、何やかやと御心とり給ふ程に、日たけぬ。忍びやかに、御前疎きはまぜで、御心づかひして渡り給ひぬ。たそがれ時におはしつきたり。狩の御衣にやつれ給へりしだに、世に知らぬ心地せしを、まして然る御心して引繕ひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひ咽びつる心のやみも晴る、やうなり。珍らしう哀れにて、若君を見給ふも、いかゞ淺くはおほされむ。今まで隔てける年月だに、淺ましく悔しきまで思す。大殿ばらの君を、美しげなりと世人もてさわぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり。かくこそは優れたる人の山口はしるかりけれと、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき勻ひたるを、いみじううたしと思す。乳母の、下りし程は衰へたりし容貌、ねびまさりて、月頃の御物語など馴れて聞ゆるを、哀れにさる鹽屋の傍に過しつらむ事を、おほし宣ふ。源「こゝにも、いと里離れて、渡らむことも難きを、なほ彼の本意ある所にうつろひ

○立石 庭石。  
 ○情ありてしなさは趣ある様に拵へたらは。  
 ○あいなきわざつ まらぬ事。  
 ○さても過しはてねは云々 須磨や明石に其の徳居著く事もならないから。  
 ○水の心はへ 遣水の模様。  
 ○いさめでたう 尼君が源氏をみて。  
 ○開伽の具 佛に水を奉る具。  
 ○罪輕くおふし立て 給へる云々 明石姫がよく育つたのは尼君の祈念疎かならぬ爲に感謝する。  
 ○彼處には 人道は〇様々になむ 色々に思ふ。

給へ。」と宣へど 明石「いと初々しき程過して。」と聞ゆるも、理なり。夜一夜、よろづに契り語らひ明し給ふ。繕ふべき所、所のあづかり、今加へたる家司などに仰せらる。桂の院に渡り給ふべしとありければ、近き御莊の人々、参り集まりたりけるも、みな尋ね参りたり。前裁どもの折れ伏したるなど、つくろはせ給ふ。源「こゝかしこの立石どもも、皆轉び失せたるを、情ありてしなさは、をかしかりぬべき所かな。かかる所をわざと繕ふも、あいなきわざなり。さても過しはてねば、立つ時もの憂く、心とまる、苦しかりき。」など、來し方の事も宣ひ出でて、泣きみ笑ひみうちとけ給へる、いとめでたし。尼君のぞきて見奉るに、老も忘れ物思ひも晴る、心地して、うち笑みぬ。東の渡殿の下より出づる水の心ばへ、つくろはせたまふとて、いとなまめかしき桂姿、うちとけ給へるを、いとめでたう嬉しと見奉るに、開伽の具などのあるを見たまふに、思し出でて、源「尼君は此方にか。いとしどけなき姿なりけりや。」とて、御直衣召し出でて奉る。几帳のもとに寄り給ひて、源「罪輕くおふし立て給へる人の故は、御行ひの程衰れにこそ思ひなし聞ゆれ。いといたく思ひすまし給へりし御住處を捨てて、うき世に歸り給へる志淺からず。又彼處には、如何に留りて思ひおこせ給ふらむと、様々になむ。」と、いとなつかしう宣ふ。尾捨て侍り



○二葉の松 明石姫  
 ○浅き根ざし云々  
 母方を卑下していふ  
 ○山なからねは 品  
 格ある故。  
 ○親王 尼の祖父中  
 務卿宮のこと。  
 ○つくろはれたる  
 手入れしたる。  
 ○住み馴れし云々  
 昔住みし我は却つて  
 不案内で庭の清水の  
 方が主人らしい。  
 ○いさらる 小井。  
 ○月ごとの十四五日  
 つごもりに云々 十  
 四日普賢、十五日阿  
 彌陀、晦日釋迦の念  
 佛常行三昧。  
 ○めぐらし仰せらる  
 多くの人に割り附  
 けらる。  
 ○ありし夜の事 明  
 石で阿邊に通ひしこ  
 と。

し世を、今さらに立歸り思ひ給へ亂るゝを、推しはからせ給ひければ、命ながさのしるし  
 も思ひ給へ知られぬる。」と、うち泣きて、尼荒磯かけに、心苦しうおもひ聞えさせ侍りし  
 二葉の松も、今はたのもしき御生先と、いはひ聞えさせるを、浅き根ざしゆるゑや如何と、  
 かたぐ心盡され侍る。」など、聞ゆるけはひ由なからねば、昔物語に、親王の住み給ひけ  
 る有様など語らせ給ふに、つくろはれたる水の音なひ、かごとがましう聞ゆ。  
 住み馴れし人はかへりてたどれども清水ぞ宿のあるじがほなる

わざとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞き給ふ。  
 「いさらるはやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる

あはれ。」とうち眺めて立ち給ふ姿にほひ、世に知らずのみ思ひきこゆ。  
 御寺に渡り給ひて、月ごとの十四五日つごもりに、行はるべき普賢講、阿彌陀、釋迦の

念佛の三昧をばさるものにて、又々加へ行はせ給ふべきこと、定め置かせ給ふ。堂のかざ  
 り、佛の御具など、めぐらし仰せらる。月の明きに歸り給ふ。ありし夜の事思し出でらる  
 る折過さず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかたなく物哀れなるに、え忍び給はでか  
 きならし給ふ。まだ調べも變らず、ひきかへし、そのをり今の心地し給ふ。

契りしにかはらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや  
 女、

明石  
 かはらじと契りしことをたのみにて松のひゞきに音をそへしかな

と聞えかはしたるも、似けなからぬこそは、身に餘りたる有様なめれ。こよなうねびまさ  
 りにける容貌けはひ、え思ほし棄つまじう、若君はた、盡きもせずまもられ給ふ。如何に  
 せまし、隠ろひたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二條院にわたして、心  
 の行くかぎりもてなさば、後のおほえも罪免れなむかしと思ほせど、又思はむ事いとほし  
 くて、えうち出で給はで、涙ぐみて見給ふ。幼き心地に、少し恥らひたりしが、やうく  
 うち解けて、物いひ笑ひなどして、むつれ給ふを見るまゝに、にほひ勝りてうつくし。抱  
 きておはする様、見るかひありて、宿世こよなしと見えたり。

またの日は京へ歸らせ給ふべければ、少し大殿籠り過して、やがてこれより出で給ふべ  
 きを、桂の院に人々多く参り集ひて、こゝにも殿上人あまた参りけり。御装束などし給ひ  
 て、運いとはしたなきわさかな。かく見顯はさるべき隈にもあらぬを。」とて、騒がしきに  
 引かれて出で給ふ。心苦しければ、さりけなく紛らはして、立ちとまり給へる戸口に、乳



○上手のかぎり 上手のものはかり。  
 ○上に侍ひける 殿上に伺候して居る。  
 ○六日の御物忌 六日間の謹慎。  
 ○必ず参り給ふ 源氏が。  
 ○まうけの物 使に賜ふ引出物。  
 ○わざならぬ 餘り仰々しくない。  
 ○こりあへたる 有り合はせたもの。  
 ○かづけ給ふ 辨に。  
 ○なかに生ひたる 古歌「久方の中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる。」  
 ○處がらかも 「淡路にてあはま通かに見し月の近き今宵は處がらかも。」

りて、いと今めかし。ひきもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手のかぎりして、折にあひたる調子吹きたつる程、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさしあがり、よろづの事澄める夜のや、更くる程に、殿上人四五人ばかり連れて参れり。上に侍ひけるを、御遊びありけるついでに、冷泉「今日は六日の御物忌あく日にて、必ず参り給ふべきを、如何なれば。」と仰せられければ、こゝに斯う泊らせ給ひにける由聞召して、御消息あるなりけり。御使は藏人の辨なりけり。

冷泉 「月のすむ河のをちなる里なればかつらの影はのどけかるらむ

羨ましう。」とあり。かしこまり聞えさせ給ふ。上の御遊びよりも、なほ所がらすごささへ添へたる物の音をめでて、又酔ひ加はりぬ。こゝには、まうけの物の侍はざりければ、大堰に、「わざとならぬまうけのものや。」と、言ひ遣はしたり。とりあへたるに従ひて参らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の辨は疾くかへり参れば、女の装束かづけ給ふ。

源 久かたの光に近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬやまざと

行幸まち聞え給ふ御心ばへなるべし。源「なかに生ひたる。」とうち誦じ給ふついでに、かの淡路島をおほし出でて、躬恆が、「處がらかも。」と、おほめきけむ事など宣ひ出でたるに、

○おさなびて 老人にて。  
 ○夜半の月 桐壺を啼へていふ。  
 ○氣近ううちしづまりたる 源氏の態度打和らいでしめやかな。  
 ○今日さへは 今日までも居續けること出来ぬ。  
 ○近衛寮の名高き舍人 職務上神樂催馬券をよくす。  
 ○その駒 神樂歌、「その駒や我に草かふ草はさりかへ水はさりかはむ。」  
 ○消息をだにせでこ 明石の上に断りもせず。  
 ○殿 二條院。  
 ○暇聞えし程 約束の日限。

物あはれなる酔ひ泣きどもあるべし。

源 めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

頭中將、

うき雲にしほしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき

右大辨、すこしおとなびて、故院の御時にも、むつまじう仕うまつりなれし人なりけり。

右大辨 雲の上のすみかをすてて夜半の月いづれの谷に影かくしけむ

心々に數多あめれど、うるさくてなむ。氣近ううちしづまりたる御物語、少しうちみだれて、千年も見聞かまほしき御有様なれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて急ぎ歸り給ふ。物ども品々にかづきて、霧の絶間に立ちまじりたるも、前裁の花に見えまがひたる色あひなど、殊にめでたし。近衛寮の名高き舍人、物の節どもなどさぶらふに、さうざうしければ、「その駒。」など亂れ遊びて、ぬぎかけ給ふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと見ゆ。の、しりて歸らせ給ふ響を、大堰には物隔てて聞きて、なごりさびしうながめ給ふ。消息をだにせでと、大臣も御心にかゝれり。

殿におはして、とばかりうちやすみ給ふ。山里の御物語など聞え給ふ。源「暇聞えし程過

○なすらひならぬ  
比較にもならぬ。  
○ひきそほめて隠  
して源氏が手紙を書  
く。  
○うちさゞめきて  
内證で言ひ附ける。  
○ありつる御かへり  
明石の上の返事。  
○つきなき 不似合  
な年輩。  
○見隠し給へ 紫の  
上見ないふりをして  
見るのたまかこつ。  
○らうたけなるもの  
明石姫。  
○物めかさむ程も云  
云 母方の位のない  
のをいふ。  
○同じ心に 我ま  
緒に。  
○こゝにて育み給ひ  
てむや 養育してく  
れ。

ぎつれば、いと苦しいこそ。このすきものども尋ね来て、いといたう強ひ留めしにひかさ  
れて、今朝はいとなやまし。」とて、大殿ごもれり。例の心とけず見え給へど、見知らぬや  
うにて、源「なすらひならぬ程をしひて思しくらぶるも、わろきわざなめり。我はわれと思  
ひなし給へ。」と、教へ聞え給ふ。暮れかゝる程に、内裏に参り給ふに、ひきそばめて急ぎ  
書き給ふは、かしこへなめり。側目こまやかに見ゆ。うちさゞめきてつかはすを、御達な  
ど憎み聞ゆ。その夜は内裏にも侍ひ給ふべけれど、解けざりつる御氣色とり、夜更けぬ  
れどまかで給ひぬ。ありつる御かへりもて参れり。え引き隠し給はで御覽す。殊に憎かる  
べきふしも見えねば、源「これ破り隠し給へ。むづかしや。かかるものの散らむも、今はつ  
きなき程になりけり。」とて、御脇息に寄り居給ひて、御心のうちには、いと哀れに戀し  
う思しやらるれば、火をうちながめて、殊に物も宣はず。文はひろごりながらあれど、女  
君見給はぬやうなるを、源「せめて見隠し給へ。御まじりこそ煩はしけれ。」とて、うち笑み  
給へる、御愛敬所せきまでこほれぬべし。さし寄り給ひて、源「まことは、らうたけなるも  
のを見しかば、契り淺くも見えぬを、さりとて物めかさむ程も憚り多かるに、思ひなむ煩  
ひぬる。同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給へ。いかゞすべき。こゝにて育み給

○蛭の子 三歳。蛭  
子神三歳にして足立  
たす岩船に載せて  
放ちたる神代の傳説  
○いはけなけなる下  
つかた 蓑袋をいふ  
○目ざましと思さず  
は 御心にかゝらぬ  
なら。  
○思はずにのみ云々  
私の心も知らず  
わけ隔てをする故私  
も怨みもするが本當  
は左程にも思はない  
○いはけなからむ御  
心には 其の子の機  
嫌には。  
○年のわたり 七夕  
の一年一度の契り。  
古歌「天の川たえぬ  
物からあら玉の年の  
わたりにたゞ一夜の  
み。」

ひてむや。蛭の子が齡にもなりにけるを、罪なき様なるも思ひすて難うこそ。いはけなけ  
なる下つかたも、紛らはさむなど思ふを、目ざましと思さずは、ひき結ひ給へかし。」と聞  
え給ふ。源「思はずにのみとりなし給ふ御心のへだてを、せめて見知らずうらなくやはとて  
こそ。いはけなからむ御心には、いとよう叶ひぬべくなむ。いかに美しき程に。」とて、少  
しうち笑み給ひぬ。兒をわりなうらうたきものにし給ふ御心なれば、得て抱きかじつかば  
やと思す。いかにせまし、迎へやせましと思し亂る。渡り給ふこといとかたし。嵯峨野の  
御堂の念佛など待ち出でて、月に二たびばかりの御契りなめり。年のわたりには、立ちま  
さりぬべかめるを及びなきことと思へども、なほいかゞ物思はしからぬ。

○源氏三十一歳多より三十二歳秋まで。  
○河づらの住居 大堰の川に臨める明石の上の邸。

○うはの空なる 落ち響かぬ。

○かの近き所に思ひ立ちね 二條東院に移るやう決心せよ。

○つらき所多く「宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもある哉。」

○残りなき心地 慰める餘地のない心地

○對に聞き置きて「對」は紫の上を云ふ 明石姫の事を聞いて

○かしこには 紫の上には。

○かかる人 斯様な子供。  
○あながちに 無理に。

薄雲

冬になり行くまゝに、河づらの住居いと心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつ、明し暮すを、君も、「なほ斯くてはえ過ぎじ。かの近き所に思ひ立ちね。」と勸めたまへど、つらき所多く試みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか、などいふ様に思ひ亂れたり。源「さらばこの若君を、斯くてのみは便なき事なり、思ふ心あればかたじけなし、對に聞き置きて常にゆかしがるを、暫し見ならばさせて、袴著の事なども、人知れぬさまならずしなむとなむ思ふ。」と、まめやかに語らひ給ふ。然思すらむと思ひ渡る事なれど、いと胸つぶれぬ。明石「改めてやんごとなき方にもてなされ給ふとも、人の漏り聞かむことは、なかくにやつくろひ難く思されむ。」とて、放ち難く思ひたり。源「理にはあれど、後安からぬ方にやなどは、な疑ひ給ひそ。かしこには、年経ぬれどかかる人も無きがさうしく覺ゆるまゝに、前齋宮のおとなび物し給ふをだにこそ、あながちにあつかひ聞ゆめれば、ましてかく憎み難けなめる程を、疎かには思ひ放つまじき心ばへになむ。」

○女君の 紫の上。  
○いかばかりの事に 定まり ざれ位の女が源氏の本妻と定り  
○御心の 源氏の。  
○おほろけの 泣々の。  
○人の御有様 紫の上の御有様。  
○こゝらの御中に 數多の女達の中に。  
○生先遠き人 姫君  
○この御爲 姫君のため。  
○世に仕へ給ふ 臣下となる。  
○故大納言 桐壺更衣の父。  
○なすらふべき事 同様に考ふべき事。  
○猶さし向ひたる云 本妻ならぬ女の腹に生まれた子は。

薄雲

と女君の御有様の思ふ様なる事も語り給ふ。けに古は、いかばかりの事に定まりたまふべきにかと、傳にもほの聞えし御心の、なごりなくしづまり給へるは、おほろけの御宿世にもあらず、人の御有様も、こゝらの御中に勝れ給へるにこそはと、思ひやられて、數ならぬ人のならび聞ゆべき覺えにもあらぬを、さすがに立出でて、人も目ざましと思ふことやあらむ、我が身はとてまかくても同じ事、生先遠き人の御上も、遂にはかの御心にか、るべきにこそあめれ、然りとならば、けに斯う何心なきほどにや譲り聞えましと思ふ。又手を放ちてうしろめたからむ事、徒然も慰む方なくては、いかゞ明し暮すべからむ。何につけてか、たまさかの御立寄りもあらむなど、様々思ひ亂るゝにも、身の憂き事かぎりなし。尼君思ひやり深き人にて、馬あぢきなし。見奉らざらむ事は、いと胸いたかりぬべけれど、遂にこの御爲によかるべからむ事をこそ思はめ。淺く思ひて宣ふ事にはあらじ。たゞうち頼み聞えて、渡し奉り給ひてよ。母方がらにこそ、帝の御子もきはくにおはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御有様ながら、世に仕へ給ふは、故大納言の、今ひとときざみなり劣り給ひて、更衣腹といはれ給ひし差別にこそおはすめれ。まして唯人はなすらふべき事にもあらず。又親王たち大臣の御腹といへど、猶さし向ひたるおとりの所に

○これは 明石の姫君は。  
 ○かかる人 子供。  
 ○ひまふしもてかしのづかれぬる 相當に大事にされる。  
 ○御袴著 姫君の。  
 ○任せ聞え 姫君を源氏の意にまかせ。  
 ○さかしき人の心のうら 賢き人の此の事に對する考へ。  
 ○勝るべし 幸福が日なご取らせ 吉日を擇ばせて。  
 ○さるべき事なき 明石姫取りの用意  
 ○君の御爲 姫君のお爲。  
 ○たづきななき事 乳母に別れる事を云ふ  
 ○君も泣く 明石の上。  
 ○さるべきにや かなやうな宿縁であらう

は、人も思ひおとし、親の御もてなしも、え齊しからぬものなり。ましてこれは、やんごとなき御方々にかかる人出でものし給はば、こよなく消たれ給ひなむ。程々につけて、親にもひとふしもてかしのづかれぬるこそ、やがて賤しめられぬはじめとはなれ。御袴著の程も、いみじき心を盡すとも、かかる深山がくれにては何の榮えかあらむ。たゞ任せ聞え給ひて、もてなしきこえ給はむ有様をも聞き給へ。」と教ふ。さかしき人の心のうらどもにも、物問はせなどするにも、なほ渡り給ひては勝るべしとのみいへば、思ひ弱りにたり。殿も然思しながら、思はむ所のいとほしさに強ひてもえ宣はで、源「御袴著のこといかやうにか。」と宣へる、御返りに、明互「よろづの事、かひなき身にたぐへ聞えては、けに生先もいとほしかるべく覚えはべるを、たちまじりて、いかに人笑へにや。」と聞えたるを、いと哀れにおほす。日など取らせ給ひて、忍びやかに、さるべき事など宣ひおきてさせ給ふ。放ち聞えさせむことは、なほいとあはれに覺ゆれど、君の御爲によかるべき事をこそはと念す。乳母をもひき別れなむこと、且暮の物おもはしさ、つれづれをも打語らひて慰めならひつるに、いとたづきななき事をさへ取添へ、いみじう覺ゆべきことと君も泣く。乳母も、「さるべきにや、覚えぬさまにて見奉りそめて、年頃の御心ばへの、忘れ難う戀しう覺

○うちたえ聞ゆる これぎりになる事。  
 ○終には 後には再會する事もあらうと  
 ○思ひのほかの本意ならぬ。  
 ○限りなき人 貴人  
 ○かやうならむ日 姫を手放して後此の様な天氣の日など。  
 ○雪ふかき云々 我が住家は山里にて雪深く鎖して路悪くとも音信はしてくれよ  
 「ふみ」は「踏み」を「文」にかける。  
 ○ゆきまなき云々 假令雪深い吉野山の奥であつても尋ね上げて音信は申上げり  
 ○渡り給へり 源氏が明石の邸へ。  
 ○さならむと 姫を連れに來たのであらうと。

え給ふべきを、うちたえ聞ゆることはよも侍らじ。終にはと頼みながら、暫しにても餘所餘所に、思ひのほかのまじらひし侍らむが、安からずも侍るべきかな。」など、うち泣きつづ過す程に、十二月にもなりぬ。  
 雪霰がちに心細さ増りて、怪しくさまざまに物思ふべかりける身かなと、うち歎きて、常よりもこの君を撫でつくろひつ、居たり。雪かきくらし降り積るあした、來し方行くさきの事、残らず思ひ續けて、例はことに端近なる出で居などもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよ、かなる數多著て、ながめるたる容體、頭つき、うしろでなど、限りなき人と聞ゆとも、かうこそおはすらめと見ゆ。おつる涙をかい拂ひて、明互「かやうならむ日、まして如何に覺束なからむ。」と、らうたけに打泣きて、  
 雪ふかき深山のみちは霽れずともなほふみかよへ跡たえずして  
 と宣へば、乳母うち泣きて、  
 ゆきまなき吉野の山をたづねても心のかよふ跡たえめやは  
 と言ひ慰む。  
 この雪少し解けて渡り給へり。例は待ち聞ゆるに、さならむと思ふ事により、胸うちつ

○人やりならず自分の心からのこと。  
 ○生ほす御髪の姫がのはす髪。  
 ○尼そぎの程の切り下の尼の髪位の長さ  
 ○心の闇の明石の上の姫君に對する情。  
 ○口惜しき身の程ならずたに云々の卑しい腹に生まれし子ぞと輕蔑せられぬ様にしてさへ下さらは満足。  
 ○寄せたるの車を。  
 ○いつか木だかき云々の何時此の子の出世を見得る事ぞ。  
 ○おひそめし云々の我と君と契り深い中に生まれ此の子であるから。  
 ○天兒の小兒の側に置く人形。  
 ○人だまひの副車。

ぶれて、人やりならず覺ゆ。わが心にこそあらめ、否び聞えむを強ひてやは、あぢきな、など覺ゆれど、輕々しき様なりと、せめて思ひかへす。いと美しけにて、前に居給へるを見給ふに、疎かには思ひ難かりける人の宿世かなと思ほす。この春より生ほす御髪、尼そぎの程にて、ゆらくとめでたく、頬つきまみの薫れる程など、いへば更なり。餘所の物に思ひやらむ程の、心の闇推しはかり給ふに、いと心苦しければ、うちかへし宣ひ明す。明石「何か、かく口惜しき身の程ならずだに、もてなし給はば。」と聞ゆるものから、念じあへすうち泣くけはひ哀れなり。姫君は何心もなく、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出で給へり。片言の、聲はいと美しく、袖をとらへて、乗り給へと引くもいみじう覺えて、

末明石とほき二葉の松にひきわかれいつか木だかかけを見るべき  
 えも言ひやらす、いみじう泣けば、然りや、あな苦しとおほして、  
 「おひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代をならべむ  
 のどかにを。」と慰め給ふ。然ることと思ひしづむれど、えなむ堪へざりける。乳母の少將とてあてやかなる人ばかり、御佩刀、天兒やうの物取りて乗る。人だまひよろしき若

○留りつる人の明石の上。  
 ○暗うおはし著きて日暮れてから二條院について。  
 ○田舎びたる心地にもの附添ひ来た女の  
 ○西面を殊にの明石姫の室とする爲に。  
 ○此方にての紫の上の方で。  
 ○うちひそみの泣顔する。  
 ○山里のつれづれの源氏の心、明石の上を思ふ。  
 ○且暮思す様に云々の紫の上が姫を育てるのを見たならば。  
 ○物あひたるの十分な、不足のない。  
 ○このわたりに出でおはせでの紫の上には子が出来ないで、  
 ○上にの紫の上。

人、童など乗せて、御送りにまゐらす。道すがら、留りつる人の心の苦しさを、いかに罪や得らむと思す。

暗うおはし著きて、御車寄するより、花やかにけはひことなるを、田舎びたる心地どもは、はしたなくてや交らはむと思ひつれど、西面を殊にしつらはせ給ひて、小さき御調度ども、美しけに整へさせたまへり。乳母の局には、西の渡殿の、北に當れるをせさせ給へり。若君は道にて寐給ひにけり。抱きおろされて、泣きなどはし給はず。此方にて御菓子まゐりなどし給へど、やうく見廻らして、母君の見えぬをもとめて、らうたけにうちひそみ給へば、乳母召し出でて、慰め紛らはし聞え給ふ。山里のつれづれ、ましていかにと思しやるはいとほしけれど、且暮思す様にかしづきつ、見給ふは、物あひたる心地し給ふらむ。いかにぞや人の思ふべき瑕なき事は、このわたりに出でおはせでと、口をしく思さる。暫時は人々もとめて泣きなどし給ひしかど、おほかた心安くをかしき心ざまなれば、上にいとよくつき睦び聞え給へれば、いみじう美しき物得たりと思しけり。他事なく抱きあつかひ翫び聞え給ひて、乳母もおのづから、近う仕う奉り馴れにけり。又やんごとなき人の乳ある、添へて参り給ふ。御袴著は、何ばかりわざと、思し急ぐ事はなけれど、氣色

○参り給へる客人  
 袴著の祝ひ當日に。  
 ○袴引結び給へる  
 袴著の時座をゆふ。  
 ○身のおこたり 明  
 石の上が我が身の過  
 ちを。  
 ○然こそいひしか  
 紫の上の方にやるや  
 うに勧めはしたけれ  
 じ。  
 ○何事をかは云々  
 明石の上よりの音信  
 身を卑下して却つて  
 何も贈らぬ。  
 ○待遠ならむも 源  
 氏の心、明石の上が  
 趣を。  
 ○されはよ 果して  
 来なくなつた。  
 ○女君 紫の上。  
 ○うつくしき人 明  
 石の姫。  
 ○おさなしき程のは  
 年輩の人々は。  
 ○東の院の對の御方  
 花散里。

ことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参り給へる客人ども、たゞ且暮  
 の差別しなれば、あながちに目もたたざりき。たゞ姫君の袴引結び給へる胸つきぞ、美  
 しけき添ひて見えたまへる。大堰には、盡きせず戀しきにも、身のおこたりに歎き添へた  
 り。然こそいひしか、尼君もいと涙もろなれど、とかくもてなしかしづかれ給ふを、聞  
 くは嬉しかりけり。何事をかはなかく訪らひ聞え給はむ。たゞ御方の人々に、乳母より  
 初めて、世になき色あひを思ひ急ぎてぞ、贈り聞え給ひける。待遠ならむも、いとされ  
 ばよと思はむに、いとほしければ、年の内に忍びて渡り給へり。いと寂しき住居に、且  
 暮のかしづきぐさをさへ離れ聞えて、思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶間なく  
 遣はず。女君も、今は殊に怨じ聞え給はず、うつくしき人に罪免し聞え給へり。  
 年もかへりぬ。うらゝかなる空に、思ふ事なき御有様はいとめでたく、磨き改めたる  
 御よそひに、参り集ひ給ふめる人の、おとなしき程のは、七日の御悦びなどし給ふ引連れ  
 給へり。若やかなるは、何ともなく心地よけに見えたり。つぎくの人も、心の中には思  
 ふ事もやあらむ、うはべは、誇りかに見ゆる頃ほひなりかし。東の院の對の御方も、有  
 様は好ましく、あらまほしき様に、侍ふ人々童への姿など、うちとけず心づかひしつゝ過

○近きしるし 源氏  
 の近所に居るため。  
 ○御心さまの 花散  
 里の氣立が。  
 ○こめきて 子供ら  
 しくて。  
 ○をりふしの御心お  
 きて 花散里に對す  
 る源氏。  
 ○こなたの 紫の上  
 に對する。  
 ○山里の 明石の上  
 の方の。  
 ○たきしめ 香を衣  
 裳に。  
 ○まかり申し 紫の  
 上に暇乞する。  
 ○女君唯ならず 紫  
 の上が氣にかける。  
 ○明日かへり來む  
 催馬樂「櫻人その船  
 ちめめ島つ田を十町  
 作れる見て歸り來む  
 や、そよや明日歸り  
 來む。」

し給ふに、近きしるしはこよなくて、長閑なる御暇の隙などには、ふとはひ渡りなどし給  
 へど、夜立ち泊りなどやうに、わざとは見え給はず。たゞ、御心さまのおいらかにこめき  
 て、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと、思ひなしつゝ、ありがたきまで後安く、  
 のどかに物し給へば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御有様に劣るけぢめ、こよ  
 なからずもてなし給ひて、悔り聞ゆべうはあらねば、おなじごと、人も参り仕う奉りて、  
 別當家司どもも事怠らず、なか／＼亂れたる所なく、めやすき御有様なり。  
 山里の徒然をも絶えず思しやれば、公 私物騒がしき程過して、渡り給ふとて、常よ  
 り殊にうちけさうじ給ひて、櫻の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ装束き給  
 ひて、まかり申し給ふ様、くまなき夕日に、いとしく清らに見え給ふを、女君唯ならず  
 見奉り送り給ふ。姫君はいはけなく、御指貫の裾にかゝりて、慕ひ聞え給ふ程に、外にも  
 出で給ひぬべければ、立ちとまりて、いと哀れと思したり。こしらへ置きて、遂「明日かへ  
 り來む」と口すさびて出で給ふに、渡殿の口に待ちうけて、中將の君して聞え給ふ。  
 船とむるをちかた人のなくばこそあすかへりこむ夫とまち見め  
 いたう馴れて聞ゆれば、いと勻ひやかにほゝゑみて、



○あすもさねこむ 明日にもはやく歸り来るべし。  
 ○遠方人のめざましさも 明石の上の恨めしさも。  
 ○うちまもりつゝ、紫の上が姫君を。  
 ○なごか云々 紫の上に御子が無いのか同じ事なら實子であつたらは。  
 ○彼所には 大坂邸様はなれて 變つて。  
 ○みづからの 明石の上の。  
 ○たゞ尋常の云々 源氏の心。  
 ○人のほご 明石の人柄に不足はないが。  
 ○夢のわたりの浮橋か 世の中は夢のわたりの浮橋か打渡しつゝ、ものをこそ思へ。」

源 行きて見てあすもさねこむなかくにをちかた人は心おくとも  
 何事も聞きわかでざれ歩き給ふ人を、上はうつくしと見給へば、遠方人のめざましさも、こよなく思ひ免されにたり。いかに思ひおこすらむ、我にてはいみじう戀しかりぬべき様をと、うちまもりつゝ、懐に入れて、美しけなる御乳をく、め給ひつゝ、戯れ居給へる御さま見所多かり。御前なる人々は「なごか。同じくはいでや。」など語りひあへり。彼所には、いとどのどやかに、心ばせあるけはひに住みなして、家の有様も様はなれて珍らしきに、みづからのけはひなどは、見る度毎に、やんごとなき人々に劣る差別こよなからず、容貌用意あらまほしうねびまさり行く。たゞ尋常のおほえにかきまぎれたらば、さる類なくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞えなどこそ苦しけれ、人のほどなどはさてもあべきものをなどおほす。わづかに飽かぬ程にのみあればにや、心のどかならず立ちかへり給ふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か。」とのみうち歎かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜ふけたりし音も、例の思し出でらるれば、琵琶をわりなく責め給へば、少しかき合はせたる、いかで斯うのみひき具しけむと思さる。若君の御事など、こまやかに語り給ひつゝ、おはす。

○近き御寺云々 明石邸へは寺や桂殿等へ行くに託してのみ行き、わざ／＼ゆく事はない。  
 ○おほろけに 容易に。  
 ○やんごとなき所 立派な身分の女の所。  
 ○御もてなし 源氏の。  
 ○ふりはへ給へる云云 特に訪ね来られるところに誇りがある。  
 ○明石にも云々 入道も此の世を捨てたるやうに言ふことも。  
 ○太政大臣 葵の上の父。  
 ○籠り給へりしほご 辭表を出せし時の事。  
 ○押譲り うちまかせて。

こゝは斯かる所なれど、かやうに立ちとまり給ふ折々あれば、はかなき菓物、強飯ばかりは聞召す時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつゝ、いとまほには亂れ給はねど、又いとけざやかにはしたなく、おしなべてのさまにはもてなし給はぬなどこそは、いと覺え殊には見ゆめれ。女もかかる御心の程を見知り聞えて、過ぎたりと思すばかりの事はしいでず、又いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふ事なく、いと目やすぐぞありける。おほろけにやんごとなき所にてだに、斯ばかりもうち解け給ふ事なく、氣高き御もてなしを聞き置きたれば、近き程にまじらひては、なかく／＼いと目なれて、人あなつられなる事どもぞあらまし、たまさかにても、かやうにふりはへ給へるこそたけき心地すれと思ふべし。明石にも、さこそいひしか、この御心おきてありさまをゆかしがりて、おほつかかなからず人は通はしつゝ、胸つぶるゝこともあり、又おもだたく、嬉しと思ふことも多くなむありける。  
 その頃太政大臣亡せたまひぬ。世のおもしとおはしつる人なれば、おほやけにも思し歎く。暫し籠り給へりしほどをだに、天の下のさわぎなりしかば、まして悲しとおもふ人ばかり。源氏の大臣も、いと口惜しう、よろづの事押譲りきこえてこそ、暇もありつるを、

○御年 十五歳。  
 ○後めたく云々 源氏が心配するに及ばぬが。  
 ○誰に譲りてかは 帝の後見役を。  
 ○後の御わざ 葬式法事。  
 ○おほやけざまに云 朝廷に怪異多き雲のたすまひ雲の様子に怪しむべき處あり。  
 ○道々の勸文 陰陽博士、天文博士等の意見書。  
 ○内の大臣 源氏。  
 ○入道後の宮 藤壺院に別れ奉らせ冷泉が桐壺帝にお別れになつた時。  
 ○いみじう 今度はおそろしくしき云云 大病にもあらざりし故。

心細く事繁くも思されて、歎きおはす。帝は、御年よりはこよなう大人々々しうねびさせ給ひて、世のまつりごと、後めたく思ひ聞え給ふべきにはあらねども、又とりたてて御後見し給ふべき人もなきを、誰に譲りてかは、靜かなる御本意もかなはむと思すに、いと飽かず口惜し。後の御わざどもにも、御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかに訪らひあつかひ聞え給ひける。その年おほかた世の中騒がしくて、おほやけざまに物のさとし繁く、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたすまひありとのみ、世の人驚く事多くて、道々の勸文ども奉れるにも、怪しう世になべてならぬ事どもまじりたり。内の大臣のみなむ、御心の中に煩はしく思し知らる、事ありける。

入道後の宮、春の初めより惱み渡らせ給ひて、三月にはいと重くならせ給ひぬれば、行幸などあり。院に別れ奉らせ給ひし程は、いといはけなくて、物深くも思されざりしを、いみじうおほし歎きたる御氣色なれば、宮もいと悲しく思召さる。藤壺「今年は必ず通るまじき年と思つたまへつれど、おどろしくしき心地にも侍らざりつれば、命のかぎり知り顔に侍らむも、人や、うたて、事々しう思はむと憚りてなむ、功德の事なども、わざと例よりも取り別きてしも侍らすなりにける。参りて心のどかに昔の御物語も、など思ひ給へな

○うつしざまなる 心のたしかな時。  
 ○いぶせく 心で思ふのみで情なく。  
 ○惜しく悲しと云々 冷泉の心。  
 ○暗々しからで 氣分すぐれず。  
 ○常の御惱みとのみ うちたゆみ、いつもの御病だまはかり思つて油断して。  
 ○宮 藤壺。  
 ○上の夢の中にも云 冷泉が一向源氏と藤壺との關係を知らぬ。  
 ○心苦しう 藤壺がむすぼれたる事困つた事。  
 ○思し絶えたりつる 思ひ切りて久しくなれる情交。  
 ○御几帳 藤壺の。

がら、うつしざまなる折少なく侍りて、口惜しういぶせくて過ぎ侍りぬること。」と、いと弱けに聞え給ふ。三十七にぞおはしましたしける。されどいと若く盛りにおはします様を、惜しく悲しと見奉らせ給ふ。慎ませ給ふべき御年なるに、晴々しからで月頃過ぎさせ給ふ事をだに、歎きわたり給ひつるに、御つししみなどを常よりも異にせさせ給はざりけることと、いみじう思召したり。たゞこの頃ぞ、驚きて、よろづの事せさせ給ふ。月頃は常の御惱みとのみうちたゆみたりつるを、源氏のおとゞも深く思し入りたり。限りあれば、程なく還らせたまふも、悲しきこと多かり。宮いと苦しうて、はかしくしう物も聞えさせ給はず。御心の中に思しつゞくるに、高き宿世、世の榮えもならぶ人なく、心の中にあかす思ふことも、人にまさりける身と思し知らる。上の、夢の中にも、かかることの心を知らせ給はぬを、さすがに心苦しう見奉らせたまひて、これのみぞ、後めたくむすぼれたる事に、思し置かるべき心地したまひける。大臣はおほやけ方様にても、斯くやんごとなき人の限り、うち續き失せ給ひなむことを、思し歎く。人知れぬあはれはた限りなくて、御祈りなど思し寄らぬことなし。年頃思し絶えたりつる筋さへ、今一度聞えずなりぬるが、いみじく思さるれば、近き御几帳のもとによりて、御有様などさるべき人々に問ひ聞き給

○御行ひ 佛の勤め  
 ○柑子などをだに云 何物も食はない  
 ○院の御遺言云々 源氏にいふ詞。  
 ○内裏の御後見 源氏が。  
 ○思ひ知り侍る 威謝する。  
 ○長閑に のんきに  
 ○ほのく 聞ゆる  
 源氏のまごころに。  
 ○いにしへよりの御有様 薄雲女院の。  
 ○惜しき人の 薄雲女院の事。  
 ○又斯く 薄雲が病氣危篤に。  
 ○燈火など消え入るやう 薄雲逝去。  
 ○かしこき御身の程 云々 以下薄雲の性行をいふ。

へば、親しき限りに侍ひて細かに聞ゆ。女房「月頃惱ませ給へる御心地に、御行ひを時の間もたゆませ給はず、せさせ給ふつもの、いとゞいたうくづほれさせ給へるに、此の頃となりては、柑子などをだに、觸れさせ給はずなりにたれば、頼み所なくならせ給ひにたる事。」と、歎く人々多かり。女院「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕う奉り給ふ事、年頃思ひ知り侍る事多かれど、何につけてかは、その心よせ異なる様をも漏らし聞えむとのみ、長閑に思ひ侍りけるを、今なむ哀れに口惜しく。」と、ほのかに宣はするも、ほのく聞ゆるに、御答へも聞えやり給はず、泣き給ふさまいといみじ。など斯うしも心弱き様にと、人目を思しかへせど、いにしへよりの御有様を、大方の世につけても、あたらしく惜しき人の御有様を、心に叶ふわざならねば、かけ留め聞えむ方なく、いふかひなく思さる事限りなし。源はかなくしからぬ身ながらも、昔より、御後見仕う奉るべき事を、心の至る限りは、疎かならず思ひ給ふるに、太政大臣のかくれ給ひぬるをだに、世の中心あわたゞしく思ふ給へらるゝに、又斯くおはしませば、よろづに心亂れ侍りて、世に侍らむ事も残りなき心地なむし侍る。」と聞え給ふ程に、燈火などの消え入るやうにてはて給ひぬれば、いふかひなく悲しき事を思しなげく。かしこき御身の程と聞ゆる中にも、御心ばへな

○普く哀れに 誰にも恵み深く。  
 ○豪家にことよせて 我が身の權威をたのんで。  
 ○人の愁ひとあること 人を困らせる事  
 ○人の仕う奉る 人のしてくれる事も。  
 ○これは 藤壺は。  
 ○え給ふべき 藤壺がおもらひになる。  
 ○何とわくまじき 何の分別もない。  
 ○をさめ奉る 葬式  
 ○ひさつ色に 皆一様に喪服を著て。  
 ○今年ばかりは「深草の野邊の櫻し心あらは今年ばかりは墨染にさけ。」  
 ○御わざ 法事。  
 ○この入道の宮の御母后 藤壺の母后。

どの、世のためにも普く哀れにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁ひとあることなども、おのづからうちまじるを、聊かもさやうなる事の亂れなく、人の仕う奉る事をも、世の苦しびとあるべき事をばとゞめ給ふ。功德の方とても、勤むるにより給ひて、厳しう珍らしうし給ふ人など、昔の賢しき世にも皆ありけるを、これはさやうなる事もなく、唯もとよりの寶物、え給ふべき年官、年爵、御封のもの、さるべき限りして、まことに心深き事どもの限りをしおかせ給へれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみ聞ゆ。をさめ奉るにも、世の中ひゞきて悲しと思はぬ人なし。殿上人など、なべてひとつ色に黒みわたりて、物の榮えなき春の暮なり。二條院の御前の櫻を御覽じても、花の宴の折など思し出づ。源「今年ばかりは。」ひとりごち給ひて、人の見咎めつべければ、御念誦堂に籠り居給ひて、日一日泣き暮し給ふ。夕日花やかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄く渡れるが、鈍色なるを、何事も御目とゞまらぬ頃なれど、いと物あはれに思さる。

入日さす峯にたなびくうす雲はものおもふ袖に色やまがへる  
 人間かぬ所なればかひなし。  
 御わざなども過ぎて、事どもしづまりて、帝物心ほそく思したり。この入道の宮の御母

○故宮 藤壺。  
 ○おほやけにも 冷泉も篤く信仰して。  
 ○終りの行ひ 最後の勤行。  
 ○宮の御事 藤壺のこと。  
 ○夜居 寢ずの番。  
 ○古代に 古めかし。此の僧都が。  
 ○かへりては 奏したならば却つて。  
 ○知らしめされぬ 帝が御存じなき故罪重く。  
 ○天の眼 肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼の五眼の一。  
 ○えうち出でぬ 申し上げかねて居る。  
 ○そこには斯く お前はここのやうに。  
 ○忍び残されたる 殘して隠してゐる。

后の御世より傳はりて、御祈りの師にて侍ひける僧都、故宮にもいとやんごとなく親しきものに思したりしを、おほやけにも重き御おほえにて、嚴しき御願ども多くたてて、世にかしこき聖なりける、年七十許りにて、今は終りの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて、常に侍はせ給ふ。この頃は猶もとの如く参り侍はるべき由、大臣もす、め宣へば、僧都「今は夜居などいと堪へ難う覺え侍れど、仰せ言のかしこきにより、ふるき御志をそへて。」とて侍ふに、靜かなる曉に、人も近く侍はず、あるは退出などしぬるほどに、古代にうちしはぶきつ、世の中の事ども奏し給ふ序に、僧都「いと奏し難く、かへりては罪にもやまかり當らむと思ひ給へ憚る事多かれど、知らしめされぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひ給へらるゝ事を、心にむせび侍りつ、命終り侍りなば、何の益かは侍らむ。佛も心ぎたなしと思召さむ。」とばかり、奏しして、えうち出でぬ事あり。上、何事ならむ、この世に恨み残るべく思ふ事やあらむ、法師は聖といへども、あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあなるものと思して、冷泉「いはけなかりし時より、隔て思ふことなきを、そこには斯く忍び残されたる事ありけるをなむ、つらく思ひぬる。」と宣はすれば、僧都「あなかしこ。更に佛のいさめ守り給ふ眞言の深き道を

○廣め仕う 傳授し奉る。  
 ○心にくま 隠す事  
 ○これは來し方云々 今申し上げかねて居る事は過去から未來にかけての一大事  
 ○院、后の宮 桐壺帝と藤壺。  
 ○大臣 源氏。  
 ○うれへ 雜儀になる。  
 ○御祈り仕う奉らせ 私に命じて。  
 ○いよ、懼ぢ 藤壺が。  
 ○更に事加へ 一層祈禱を命ぜられて。  
 ○委しく奏するを 源氏と藤壺との關係  
 ○便なく思召す 逆鱗かぞ。  
 ○この事を知りて お前の外に此の事を知つて。

だに、隠しとむむる事なく、廣め仕うまつり侍り。まして心にくまある事、何事にか侍らむ。これは來し方行くさきの大事と侍る事を、過ぎおはしましにし院、后の宮、たゞ今世をまつりごち給ふ大臣の御ため、すべて、かへりて善からぬ事にやもり出で侍らむ。かかる老法師の身には、たとひうれへ侍りとも、何の悔いか侍らむ。佛天の告げあるによりて、奏し侍るなり。我が君は生まれおはしましたりし時より、故宮の深く思し歎く事ありて、御祈り仕う奉らせ給ふ故なむ侍りし。委しくは法師の心にくま悟り侍らず。事のたがひめありて、大臣横さまの罪にあたり給ひし時、いよ、懼ぢ思しめして、重ねて御祈りども承り侍りしを、大臣も聞召してなむ、又更に事加へ仰せられて、御位に即きおはしまし、めで、仕う奉る事ども侍りし。その承りしやう。」とて、委しく奏するを聞召すに、淺ましう珍らかにて、恐ろしうも悲しうも、様々に御心亂れけり。とばかり御答へもなければ、僧都、進み奏しつるを便なく思召すにやと、煩はしう思ひて、やをら畏まりてまかり出づるを、召し留めて、冷泉「心にくま知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりて後めたき心なりと思ひぬる。又この事を知りて、漏らし傳ふる類やあらむ。」と宣はす。僧都「更に某と王命婦とより外の人、こ

○このけなり 此の故である。  
 ○幼く 冷泉が。  
 ○咎をも示す 天が  
 ○何の罪も 帝が  
 この天變は何の罪によつてであるかとも  
 ○思ひ給へ消ちてし事 一旦口に出さじ  
 と決心せし事。  
 ○まかでぬ 僧都退  
 出。  
 ○故院 桐壺。  
 ○大臣 源氏。  
 ○故宮 藤壺。  
 ○ひるよなく 涙の  
 乾く時なく。  
 ○式部卿 権の齋院  
 の父。  
 ○つと侍ひ給ふ 内  
 裏に詰め切り。  
 ○世は盡きぬるにや 我が命数の盡きし  
 にや。

の事の氣色見たる侍らず。然るによりなむ、いと恐ろしう侍る。天變頼りにさとし、世の中靜かならぬは、このけなり。幼く、物の心知ろしめすまじかりつる程こそ侍りつれ、やうく御齡足りおはしまして、何事も辨へさせ給ふべき時に至りて、咎をも示すなり。よろづの事、親の御世より始まるにこそ侍るなれ。何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、思ひ給へ消ちてし事を、更に心より出し侍りぬる事。」と、泣くく聞ゆるほどに、明けはてぬればまかでぬ。

上は、夢のやうに、いみじき事を聞召して、いろく思ひ亂れさせたまふ。故院の御ためもうしろめたく、大臣の斯くたゞ人にて世に仕へ給ふも、哀れに辱かりけること、かたく思し惱みて、日闌くるまで出でさせ給はねば、斯くなむと聞き給ひて、大臣も驚きて参り給へるを、御覽するにつけても、いと忍び難く思召されて、御涙のこほれさせ給ひぬるを、おほかた故宮の御事を、ひるよなく思召したる頃なればなめりと、見奉り給ふ。その日式部卿の親王亡せ給ひぬるよし奏するに、いよく世の中の騒がしきことを歎き思したり。かかる頃なれば大臣は里にもえまかで給はで、つと侍ひ給ふ。しめやかなる御物語の序に、冷泉「世は盡きぬるにやあらむ、物心ほそく例ならぬ心地のみなむするを、

○あわたしく 心安からず。  
 ○故宮の思さむ所云 藤壺の思はくを  
 憚つて讓位も申し出  
 でなかつたが。  
 ○心安きさまにて  
 退隱して氣樂に。  
 ○直くゆがめるに  
 正しきと邪なるを。  
 ○さかしき世 賢明  
 な帝の世。  
 ○理の歸 死ぬべき  
 老人の時節到來して  
 死にたるを。  
 ○片端まねぶも 其  
 の一端を書き連ぬる  
 も。  
 ○違ふ所 源氏と冷  
 泉と。  
 ○御鏡にも云々 鏡  
 を御覽になつて御自  
 身と源氏と容貌が似  
 てるを。

天の下も斯くのどかならぬに、よろづあわたしくなむ。故宮の思さむ所によりてこそ、世の中のことも思ひ憚りつれ、今は心安きさまにても、過ぎまほしくなむ。」と語り聞え給ふ。運いとあるまじき御事なり。世の靜かならぬことは、必ず政事の直くゆがめるにもより侍らず。さかしき世にしもなむ、善からぬことども侍りける。聖の帝の世にも、よこざまの亂れ出で来る事、唐土にも侍りける。我が國にも然なむ侍る。まして理の齢どもの時、至りぬるを思し歎くべき事にも侍らず。」など、すべて多くの事共を聞え給ふ。片端まねぶもいとかたはらいたしや。常よりも黒き御よそひに、やつし給へる御容貌、違ふ所なし。上も年頃御鏡にも思しよる事なれど、聞召しし事の後は、又細かに見奉りたまひつづ、まことにいと哀れに思しめさるれば、いかでこの事をかすめ聞えばやと思せど、流石にはしたなくも思しぬべき事なれば、若き御心地につ、ましくて、ふともえ打出で聞え給はぬ程は、たゞ大方の事どもを、常より殊に懐かしう聞えさせ給ふ。うちかしこまり給へる様にて、いと御氣色ことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見奉り給へど、いと斯くさだくと聞召したらむとは思さざりけり。上は、王命婦に委しき事問はまほしう思召せど、今更に、しか忍び給ひけむ事知りにけりと、かの人にも思はれじ、たゞ大臣に

○亂りがはしき事  
王者の系統の正しからぬ事。  
○一世の源氏 皇子にて源姓を賜はりし人。  
○親王にもなり一度臣下となつた方が再び。  
○位にも即き 光仁天皇、桓武天皇など  
○人がらのかしこき 源氏賢明なればそれに事よせて位を譲らんかなど。  
○太政大臣になりたまふべき事 源氏が取りわきて 特に御寵愛ありながら。  
○もとの御掟 桐壺の定められし如く。  
○のぞかなる行ひ 出家して。

いかでほのめかし問ひ聞えて、前々斯かる事の例はありけりやと問ひ聞かむとぞ思せど、更に序もなければ、いよく御學問をせさせ給ひつゝ、様々の書どもを御覽するに、唐土には、顯はれても忍びても、亂りがはしき事いと多かりけり。日本には、さらに御覽じ得る所なし。たとひ有らむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか傳へ知る様のあらむとする。一世の源氏、又納言、大臣になりて後に、更に親王にもなり、位にも即き給へるも、あまたの例ありけり。人がらのかしこきにことよせて、さもや譲り聞えましなど、よろづにぞ思しける。

秋の司召に、太政大臣になり給ふべき事、うち／＼に定め申したまふ序になむ、帝思し寄するすぢの事、漏らし聞え給ひけるを、大臣いとまばゆく怖ろしう思して、更にあるまじきよしを申し返し給ふ。源「故院の御志、あまたの御子達の御中に、取りわきて思召しながら、位を譲らせ給はむ事をば思しめし寄らずなりにけり。何か、その御心改めて、及ばぬ際にはのほり侍らむ。たゞもとの御掟のまゝに、おほやけに仕う奉りて、今少しの齡かさなり侍りなば、のぞかなる行ひに籠り侍りなむと思ひ給ふる。」と、常の御言の葉にかはらず奏し給へば、いと口惜しうなむ思しける。太政大臣になり給ふべき定めあれど、し

○御位そひて 陛下として。  
○世の中の御後見 天下の攝政以下源氏の心。  
○權中納言 もこの頭中將。此の人が。  
○思しめぐらす 冷泉が源氏の秘密を知つたすれは。  
○案内し 問ふ。  
○更にかけても 藤原が一寸でも冷泉に知られん事を恐れ。  
○かつは罪癒るこゝ 冷泉が親子の禮を失ふの罪。  
○齋宮女御 秋好。  
○思しもしるき 源氏の前に思つた事がよく當つて立派な  
○もてかしづき 源氏が。  
○二條院に 秋好が  
○むゆの 全くの。

ばしとおほす所ありて、たゞ御位そひて、牛車ゆるされて参りまかでし給ふを、帝飽かず辱きものに思ひ聞え給ひて、なほ親王になり給ふべき由を思し宣はすれど、世の中の御後見し給ふべき人なし。權中納言、大納言になりて、右大將かけ給へるを、今ひときはあがりなむに、何事も譲りてむ、さて後に、ともかくも靜かなるさまにとぞ思しける。なほ思しめぐらすに、故宮の御ためにもいとほしう、又上のかく思し惱めるを、見奉り給ふもかたじけなきに、誰斯かる事を漏らし奏しけむと、あやしう思さる。命婦は御匣殿のかはりたる所に移りて、曹司賜はりて参りたり。大臣對面し給ひて、源「この事を、もし物のついでに、露ばかりにても漏らし奏し給ふ事やありし。」と、案内し給へど、命婦「更にかけても聞召さむことを、いみじき事に思召して、かつは罪獲ることによと、上の御ためを、なほ思召し歎きたりし。」と聞ゆるにも、一方ならず心深くおはせし御有様など、盡きせず戀ひ聞え給ふ。

齋宮女御は思しもしるき御後見にて、やんごとなき御おほえなり。御用意ありさまなども思ふ様にあらまほしう見え給へれば、辱きものにもてかしづき聞え給へり。秋のころ二條院にまかで給へり。寢殿の御しつらひ、いとゞかゞやくばかりし給ひて、今はむけ

○いにしへの事共  
御息所や秋好との従  
来の關係など。  
○わたりたまへり  
源氏が。  
○託け給ひて 實は  
藤原の爲に引續きて  
の精進。  
○みづから 源氏が  
秋好に直接に。  
○ひもこき 花咲き  
○心やりて 花のみ  
が。  
○野の宮にたち煩ひ  
し 桐の巻に出づ。  
○かくれば 「いに  
しへの昔の事をい  
さしくかくれば袖ぞ  
露けかりける。」  
○うたてあるや 記  
者の評語。  
○過ぎ給ひにし 六  
條御息所。

の親さまにもてなして、あつかひ聞え給ふ。秋の雨いと静かに降りて、御前の前裁のいろ  
いろ亂れたる露のしけさに、いにしへの事共かき續け思し出でられて、御袖もぬれつ、  
女御の御方にわたりたまへり。こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなど  
託け給ひて、やがて御精進なれば、數珠ひきかくして御様よくもてなし給へる、盡きせず  
なまめかしき御有様にて御簾の内に入り給ひぬ。御几帳ばかりを隔てて、みづから聞え給  
ふ。源「前裁どもこそ残りなくひもとき侍りにけれ。いと物すさまじき年なるを、心やりて  
時知り顔なるも、あはれにこそ。」とて、柱により居給へる夕ばえ、いとめでたし。昔の御  
事ども、かの野の宮にたち煩ひし 曙などを、聞え出で給ふ。いと物哀れと思したり。宮  
も、「かくれば。」とにや、少し泣き給ふけはひ、いとらうたけにて、うち身じろき給ふほど  
も、淺ましくやはらかに、なまめきておはすべかめる。見奉らぬこそ口惜しけれと、胸う  
ちつぶる、ぞうたてあるや。源「過ぎにし方、殊に思ひ悩むべき事もなく侍りぬべかりし  
世の中にも、なほ心から、すきくしき事につけて、物思ひの絶えずも侍りけるかな。さ  
るまじき事共の心苦しきが、あまた侍りし中に、遂に心も遂けず、むすほはれて止みぬる  
事二つなむ侍る。まづ一つは、この過ぎ給ひにし御事よ。淺ましうのみ思ひつめて止み給

○燃えし煙の 「結  
ばはれ燃えし煙をい  
かませむ君だにかけ  
よ長き契りを。」  
○今一つは 藤原と  
の事。  
○身の無きに沈み  
須磨に左遷の事。  
○東の院にもする  
人 花散里。  
○そこはかさなく  
便りなくて。  
○心ほへの憎からぬ  
花散里の氣立のよ  
い事。  
○かやうなる好きが  
ましき方 秋好の世  
話。  
○むづかしうて 秋  
好の心。  
○さきや さうか。  
○この門廣げ 秋好  
の力で我が一門を繁  
昌せしめて。

ひにしが、永き世のうれはしき節と思ひ給へられしを、斯うまでも仕う奉り御覽せらる、  
をなむ、なぐさめに思ふ給へなせど、燃えし煙のむすほはれ給ひけむは、なほいぶせうこ  
そ思ひ給へらるれ。」とて、今一つは宣ひさしつ。源「中ごろ身の無きに沈み侍りし程、かた  
がたに思ひ給へしこと、かたはしづ、叶ひにたり。東の院にもする人の、そこはかと  
なくて、心苦しう覺え渡り侍りしも、穩しう思ひなりに侍り。心ばへの憎からぬなど、  
我も人も見給へあきらめて、いとこそ爽かなれ。かく立ちかへり、おほやけの御後見仕う  
奉る喜びなどは、さしも心に深く染ます。かやうなる好きがましき方は、しづめ難うのみ  
侍るを、おほろけに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせ給ふらむや。哀れとだに宣はせ  
ずば、いかにかひなく侍らむ。」と宣ふ。むづかしうて、御答へもなければ、源「さきや。あ  
な心憂。」とて、他事に言ひ紛らはし給ひつ。源「今はいかでのどやかに、生ける世の限り、  
思ふこと残さず後の世のつとめも心に任せて、籠り居なむと思ひ侍るを、この世の思ひ出  
にしつべき節の侍らぬこそ、さすがに口惜しう侍りぬべけれ。數ならぬ幼き人の侍る。生  
先いと待遠なりや。辱くともなほこの門廣げさせたまひて、侍らすなりなむ後にも、か  
すまへさせ給へ。」など聞え給ふ。御答へはいとおほどかなる様に、辛うじて一言ばかりか

○聞きつきて 聞き入りて。  
 ○はかなくしき 重大な立派な。  
 ○心の行くこと 愴快に思ふ事。  
 ○春の花の錦 白樂天「春不遊樂、恐是無心人。」  
 ○秋のあはれ 「春は唯ひとへに花の咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる。」  
 ○いづかたにか 春秋何れを好み給ふか  
 ○まして 私如き者が。  
 ○あやしと聞きし夕 「いつても戀しからずはあらねども秋の夕は怪しかりけり。」  
 ○はかなう消え給ひにし 故母御息所逝去の時は秋なれば。

すめ給へるけはひ、いとなつかしけなるに、聞きつきて、しめくくと暮る、までおはす。源「はかなくしき方の望みはさるものにて、年のうちゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心の行くことも侍りにしがな、春の花の林、秋の野のさかりをなむ、昔よりとりどりに人争ひ侍りける、そのころのけにと心よるばかり、あらはなる定めこそ侍らざなれ。唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり。やまと言の葉には、秋のあはれをとり立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。狭き垣根の内なりとも、その折々の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘りうつして、徒らなる野邊の蟲をも棲ませて、人に御覽せさせむと思ひ給ふるを、いづかたにか御心よせ侍るべからむ。」と聞え給ふに、いと聞えにくき事と思せど、無下に絶えて御答へ聞え給はざらむうたてあれば、秋好まして如何思ひわき侍らむ。けに何時となき中に、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消え給ひにし露のよすがにも、思ひ給へられぬべけれ」と、しどけなげに宣ひ消つもいとらうたけなるに、え忍び給はで、

「君もさはあはれをかはせ人知れず我が身にしむる秋のゆふかせ

○いづこの御答へ 何と返事の仕様。  
 ○え籠め給はで 黙するに忍びず。  
 ○今少しがごも もう少し打ちみだれた舉動。  
 ○いさうたてき けしからぬと。  
 ○心づきなう 秋好が疎ましく思ふ。  
 ○やはらづ、すこしづ、 柳が枝「梅が香を櫻の花に匂はせて柳の枝に咲かせてしがな。」  
 ○對 葉の上の方。  
 ○あながちなる事 秋好に對する無理な戀。  
 ○いにしへの好き青年時代の戀。  
 ○うしろやすく 年されは分別もつく。

忍び難きをりくも侍りかし」と聞え給ふに、いづこの御答へかはあらむ。心得ずとおぼしたる御氣色なり。このついでに、え籠め給はで恨み聞え給ふ事どもあるべし。今少しひがごともし給ひつべけれども、いさうたてと思いたることわりに、我が御心も若々しうけしからずと思しかへして、うち歎き給へる様の、物深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬる。やはらづ、ひき入り給ひぬる氣色なれば、源「あましましうも疎ませ給ひぬるか。まことに心深き人は、斯くこそあらざなれ。よし、今より憎ませ給ふなよ。つらからむ。」とて渡り給ひぬ。うちしめりたる御にほひの留りたるさへ、疎ましく思さる。人々御格子など参りて、「この御裯の移香、言ひ知らぬものかな。いかでかく取り集め、柳が枝にさかせたる御有様ならむ。ゆかし。」と聞えあへり。

對にわたり給ひて、頓にも入り給はず。いたうながめて、端近う臥し給へり。燈籠とほくかけて、近く人々侍はせ給ひて、物語などせさせ給ふ。かうあながちなる事に胸塞がるくせの、猶ありけるよと、我が身ながら思し知らる。これはいと似けなき事なり、怖ろしう罪深き方は、多く勝りけめど、いにしへの好きは、思ひやりすくなき程のあやまちに、佛神も免し給ひけむと思しさますも、なほこの道はうしろやすく、深き方のまさりけるか



○女御 秋好。  
 ○物むづかしうて  
 ひびく困つて。  
 ○すくよかに 源氏  
 ○女君 紫の上。  
 ○山里の人 明石の  
 上。  
 ○所せさのみまさる  
 物事窮屈になるは  
 かり。  
 ○世の中を 明石の  
 上が。  
 ○おほぞうの 平凡  
 の。普通の。  
 ○不斷の御念佛 嵯  
 峨の御堂の。  
 ○住み馴る、儘に  
 大井邸の様。  
 ○いと深からざらむ  
 事にてたに 愛情が  
 薄くとも。  
 ○かかる住居に云々  
 明石にて斯かる景  
 色に馴れなかつたな  
 らは。

など思し知られ給ふ。女御は秋のあはれを知り顔に、答へ聞えてけるも悔しう恥かしと、御心ひとつに物むづかしうて惱ましけにさへし給ふを、いとすくよかにつれなくて、常よりも親がりありき給ふ。女君に、源「女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに、君の、春の曙に心しめ給へるも理にこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな。公 私 の營み繁き身こそふさはしからね、いかで思ふ事してしがな、たゞ御ためさうしくやと思ふこそ、心苦しけれ。」など語らひ聞え給ふ。

山里の人も、いかになど絶えず思しやれど、所せさのみまさる御身にて、渡り給ふ事いと難し。世の中を味氣なく憂しと思ひ知る氣色、などかさしも思ふべき、心やすく立ち出でて、おほぞうの住居はせじと思へるを、おほけなしとは思すものから、いとほしくて、例の不斷の御念佛にことづけて渡り給へり。住み馴る、儘に、いと心すごけなる所のさまに、いと深からざらむ事にてだに、あはれ添ひぬべし。まして見奉るにつけても、つらかりける御契りの、さすがに淺からぬを思ふに、なか／＼にて慰め難き氣色なれば、こしらへかね給ふ。いと木しけき中より、篝火どものかけの、遣水の瑩に見えまがふもをかし。源「かかる住居にしほじまざらましかば、珍らかに覺えまし。」と宣ふに、

○いさりせし云々  
 明石の漁火を思ひ出  
 さしむる彼の篝火は  
 我が身の憂きを名に  
 負へる浮船がこま  
 でも我が身に附きま  
 さふであらう。」う  
 き「憂き、浮き。  
 ○思ひこそ云々 明  
 石の漁火と思ひ違へ  
 る。  
 ○淺からぬ云々 其  
 方が嘆くのは我が深  
 い心を知らないから  
 であらう。  
 ○誰憂きもの 「う  
 たかたも思へは悲し  
 世の中を誰憂きもの  
 と知らせそめけむ。」  
 ○たふとき事ども  
 佛事。  
 ○日ごろ經給ふにや  
 長逗留になつた故  
 明石の上も少し慾ひ  
 を忘れたであらう。

「いさりせしかけ忘れぬか、り火は身のうきふねや慕ひ來にけむ  
 思ひこそまがへられ侍れ。」と聞ゆれば、

源「淺からぬしたの思ひを知らねばやなほか、り火の影はさわける  
 誰憂きもの。」とおしかへし恨み給ふ。大かた物靜かに思さる、頃なれば、たふとき事ども  
 に御心とまりて、例よりは日ごろ經給ふにや、すこし思ひまぎれむとぞ。

権あさがほ

○源氏三十二歳、薄雲卷の末と同年の九月。  
 ○齋院は御服にて父式部卿宮の喪によりて。  
 ○女五の宮 式部卿宮の同胞、源氏権の伯母。  
 ○今も親しく云々 源氏が此の人々を。  
 ○同じ寢殿の云々 権と女五の宮を。  
 ○宮對面し 女五の宮が源氏に。  
 ○故大殿の宮 葵の上の母、桐壺帝の皇妹。  
 ○もてはなれ 女五の宮は打つて變りて。  
 ○こちへしく 無骨に。  
 ○院の 桐壺帝。  
 ○この宮 式部卿宮  
 ○さまり侍る 生き残る。

齋院は、御服にて下り居給ひにきかし。大臣、例の思しそめつる事絶えぬ御くせにて、御訪らひなどいとしけう聞え給ふ。宮、煩はしかりし事を思せば、御返りもうちとけて聞え給はず。いと口惜しと思しわたる。九月になりて、桃園の宮に渡り給ひぬるを聞きて、女五の宮の其處におはすれば、そなたの御訪らひに託けてまうで給ふ。故院の、この御子たちをば心殊にやんごとなく思ひ聞え給へりしかば、今も親しくつぎに聞えかはし給ふめり。同じ寢殿の西東にぞ住み給ひける。程もなく荒れにける心地して、哀れにけはひしめやかなり。宮對面し給ひて、御物語聞え給ふ。いと舊めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮は、あらまほしく古りがたき御有様なるを、もてはなれ、聲ふつ、かに、こちへしく覺え給へるもさるかたなり。女五院の上崩れ給ひて後、よろづ心ほそく覺え侍りつるに、年の積るまゝに、いと涙がちにて過しはべるを、この宮さへかく打棄て給へれば、いよくあるかなきかにとまり侍るを、かく立

○物忘れ 憂を忘る  
 ○知らぬ世 須磨論居の事。  
 ○數まへられ 人なみに取り扱はれ。  
 ○こりみたり 朝廷の仕事に取給れ。  
 ○いぶせく思ひ 情なく思ひ。  
 ○見奉りさしてましかば 源氏が落魄中に自分が死んだならば遺憾であるが今對面して満足である。  
 ○内裏の上なむ云々 冷泉がよく源氏に似た。  
 ○さりとも云々 冷泉は源氏に。  
 ○山賤になりて 須磨明石に謫居した事を言ふ。  
 ○ありがたく 稀である。

寄り訪はせ給ふになむ、物忘れしぬべく侍る。」と聞え給ふ。かしこくも古り給へるかなと思へど、うち畏まりて、齋院崩れ給ひて後は、様々につけて、同じ世のやうにも侍らず。覺えぬ罪にあたり侍りて、知らぬ世に惑ひ侍りしを、たましくおほやけに數まへられ奉りては、又とりみだり暇なくなどして、年頃も、参りて古の御物語をだに聞え承らぬを、いぶせく思ひ給へ渡りつ、なむ。」など聞え給ふを、女五いとよく淺ましく、何方につけても定めなき世を同じさまにて見給へすぐす。命長さのうらめしき事多く侍れど、かくて世に立ちかへり給へる御悦びになむ、ありし年頃を見奉りさしてましかば、口惜しからましと覺え侍る。」と、うち戦き給ひて、女五いと清らにねびまさり給ひにけるかな。童に物し給へりしを見奉りそめし時、世にかかる光の出でおはしたる事と驚かれ侍りしを、時々見奉るごとに、ゆゝしく覺え侍りてなむ、内裏の上なむいとよく似奉らせ給へると、人々聞ゆるを、さりとも劣り給へらむとこそ、推し量りはべれ。」と、長々と聞え給へば、ことに斯くさし向ひて人の譽めぬわざかなと、をかしくおほす。山賤になりて、いたう思ひくづほれ侍りし年頃の後、こよなく衰へて侍るものを、内裏の御容貌は、古の世にも並び人なくやとこそ、ありがたく見奉り侍れ。あやしき御おしはかりになむ。」と聞え給ふ。

○時々見奉らば 源氏を。  
 ○醒めぬる はれた  
 ○三の宮 葵の上の  
 母。  
 ○さるべき御ゆかり  
 源氏は増なれば言  
 ふ。  
 ○この亡せ給ひぬる  
 も 式部卿宮も権を  
 源氏に譲られはよか  
 ったと思ふ。  
 ○さし放たせ 私を  
 疎外なさつて。  
 ○あなたの御前 権  
 の室。  
 ○あなたの御さぶら  
 ひ 権を御見舞すべ  
 きであつて。  
 ○簀子より 権の方  
 へ。  
 ○鈍色の御簾 喪中  
 なれば。  
 ○宣旨 侍女。  
 ○神さびにける年月  
 の勞云々 年來の心  
 盡しを思へば。

女五「時々見奉らば、いとゞしき命や延び侍らむ。今日は老も忘れ、うき世のなけき皆醒めぬる心地なむ。」とても、又泣い給ふ。女五「三の宮羨ましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見奉り給ふを羨み侍る。この亡せ給ひぬるも、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか。」と聞え給ふにぞ、少し耳とまり給ふ。源「さも侍ひ馴れなましかば、いかに思ふさまに侍らまし。皆さし放たせ給ひて。」と、うらめしげに氣色ばみ聞え給ふ。  
 あなたの御前を見遣り給へれば、枯れ々なる前裁の心ばへも殊に見渡されて、のどやかに眺め給ふらむ御有様容貌もいとゆかしく哀れにて、え念じ給はで、遷かく侍ひたる序を過し侍らむは、志なき様なるを、あなたの御とぶらひ聞ゆべかりけり。」とて、やがて簀子より渡り給ふ。暗うなりたる程なれど、鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし。簀子はかたはらいたければ、南の廂に入れ奉る。宣旨對面して、御消息きこゆ。源「今さらに若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の勞數へられ侍るに、今は内外も許させ給ひてむとぞ頼み侍りける。」とて、飽かず思したり。源「ありし世は皆夢になして、今なむ醒めてはかなきにやと、思ひ給へ定め難く侍るに、勞などはしづかにや定め聞えさすべう侍らむ。」と、聞え出し給へり。實に

○今は何のいさめに  
 か もとは神であつ  
 たが今は何にも。  
 ○世に煩はしきこも  
 須磨へ退去せし事  
 ○様々に思ひ 色々  
 と煩悶して。  
 ○片端をたに 一端  
 でも漏らしたい。  
 ○いさいたう過し給  
 へば 年はとつたが  
 位に合はせては若々  
 し。  
 ○その世の罪 昔の  
 齋院時代の罪。  
 ○みそぎを神は「戀  
 せじとみたらし川に  
 せし御禊神は受けず  
 もなりにけるかな。」  
 ○世づかぬ 物なれ  
 ぬ。  
 ○齡のつもりには  
 年をさるご恥をかく  
 ○所狭きまで 侍女  
 等がうるさく譽める

こそ定め難き世なれと、はかなき事につけても思しつゞけらる。  
 「人知れず神のゆるしを待ちしまにこゝらつれなき世をすぐすかな  
 今は何のいさめにかかこたせ給はむとすらむ。なべて世に煩はしきことさへ侍りしものち、  
 様々に思ひ給へあつめしかな。いかで片端をだに。」と、あながちに聞え給ふ。御用意など  
 も、昔よりも今少しなまめかきけさへ添ひ給ひにけり。さるはいといたう過し給へど、  
 御位の程にはあはざめり。  
 なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしことと神やいさめむ  
 とあれば、源「あな心愛、その世の罪は、みな科戸の風にたぐへてき。」と宣ふ愛敬もこよな  
 し。源「みそぎを神はいかゞ侍りけむ。」など、はかなき事を聞ゆるも、まめやかにはいと  
 たはらいたし。世づかぬ御有様は、年月にそへても、物深くのみひき入り給ひて、え聞え  
 給はぬを、見奉りなやめり。源「すきくしき様になりぬるを。」など、淺はかならずうち歎  
 きて立ち給ひつ。源「齡のつもりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを  
 今ぞとだに聞えさすべくやは、もてなし給ひける。」とて出で給ふなごり、所狭きまで例の  
 聞えあへり。大方の空もをかしき程に、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしものの哀れ

○御心はへ 源氏の  
○思ひ出で 侍女達  
が。

○立ち出で給ひぬる  
は 立ち出でた源氏  
は。

○まるらせ 上げさ  
せて。

○奉れ給ふ 権へ。

○けざやかなりし  
さつぱり他人向の

○年頃のつもりも  
年來戀ひ慕ふ我が心  
を察しては下さるだ  
らう。

○おぼつかならむ  
も云々 返事せぬも  
情知らずの様だ。

○人々も 返事を勵  
む。

○おき難く 源が手  
を離し難く。

○青鈍の紙 喪中の  
手紙、青黒色の紙。

とり返しつゝ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心ばへなども思ひ出で聞えさす。

心やましくて立ち出で給ひぬるは、まして寢覺がちに思し續けらる。疾く御格子まららせ給ひて、朝霧をながめ給ふ。枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに蔓ひ纏はれて、あるかなきかに咲きて、勻ひも殊にかはれるを、折らせ給ひて奉れ給ふ。

源 けざやかなりし御もてなしに、人わろき心地し侍りて、うしろでもいとゞいかゞ御覽じけむとねたく。されど、

見しをりの露忘れぬあさがほの花のさかりは過ぎやしぬらむ  
年頃のつもりも哀れとばかりは、然りとも思し知るらむやとなむ、かつは。

など聞え給へり。大人び給へる御文の心ばへに、おぼつかならむも見知らぬ様にやと思し、人々も御祝とりまかなひて聞ゆれば、

「秋はてて霧の籬にむすほほれあるか無きかにうつるあさがほ

似つかはしき御よそへにつけても、露けく。

とのみあるは、何のをかしき節もなきを、如何なるにかおき難く御覽すめり。青鈍の紙の

○墨つきはしも 墨  
色だけは。

○もて離れぬ 権が  
まるで相手にならぬ  
でもなく従ひもせぬ

○更がへりて 逆戻  
りして。

○東の對 二條院の  
○宣旨 権の侍女。

○侍ふ人々 齋院に  
侍ふ女房。

○さしもあらぬ際の  
事 平凡な男にさへ

○あやまちも 自分  
の方から挑み兼ねぬ  
位に。

○宮 権。

○誰も思ひなかるべ  
き 戀など不似合の  
年齢で。

○對の上 業の上。

○隔てては思したら  
じ 源氏が我に打明  
けぬ筈なし。

権

なよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆめり。人の御ほど、書き様などにつくろはれつゝ、その折は罪なき事も、つきくしうまねびなすには、ほ、ゆがむ事もあめればこそ、さかしらに書き紛らはしつゝ、覺束なき事も多かりけり。立ちかへり今更に若々しき御文書なども、似けなき事と思せど、猶かく昔よりも離れぬ御氣色ながら、口惜しくて過ぎぬるを、思ひつゝ、え歇むまじく思さるれば、更がへりてまめやかに聞え給ふ。東の對に離れおはして、宣旨を迎へつゝ、語らひ給ふ。侍ふ人々の、さしもあらぬ際の事をだに靡きやすなるなどは、あやまちもしつべくめで聞ゆれど、宮はそのかみだにこよなく思し離れたりしを、今はまして、誰も思ひなかるべき御齡おほえにて、はかなき本草につけたる御かへりなどの折過さぬも、軽々しくやとりなさるらむなど、人の物いひを憚り給ひつゝ、うちとけ給ふべき御氣色もなければ、古りがたく同じさまなる御心ばへを、世の人にかはり、珍らしくも、妬くも思ひ聞え給ふ。世の中に漏り聞えて、「前齋院に懇に聞え給へばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似けなからぬ御あはひならむ。」など言ひけるを、對の上は傳へ聞き給ひて、暫しは、然りとも然様ならむこともあらば、隔てては思したらじと思しけれど、うちつけに目とゞめ聞え給ふに、御氣色なども、例ならずあくがれ

○まめくしく眞實の戀。  
 ○同じすが、權と紫と異腹の姉妹。  
 ○御心なごうつりなは、源氏の心極に傾かば。  
 ○年頃の御もてなし、紫の上が年來第一に重んぜられ來りて。  
 ○かきたえ、まるで我を棄てられずとも。  
 ○よろしき事、一通りの事。  
 ○まめやかに、心からつらいと思ふ。  
 ○いた、紫の上の推量。  
 ○氣色をだに、おほろけにも。  
 ○神事なごもごまりて、諒闇中故十一月の神事やめられて。  
 ○まかり申し、紫の上に暇乞だけはする

たるも心憂く、まめくしく思しなるらむ事を、つれなく戯れにいひなし給ひけむよと、同じすぢには物し給へど、覺えことに、昔よりやんごとなく聞えたまふを、御心などうつりなばはしたなくもあべいかなと、年頃の御もてなしなどは、立竝ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむことなど、人知れず思し歎かる。かきたえなごりなき様にはもてなし給はずとも、いと物はかなき様にて、見馴れたまへる年頃のむつび、侮らはしき方にこそはあらめなど、様々に思ひ亂れ給ふに、よろしき事こそ、うち怨じなど憎からず聞え給へ、まめやかにつらしと思せば、色にも出し給はず。端近うながめがちに、内裏住み繁くなり、役とは御文を書き給へば、けに人の言は空しかるまじきなめり、氣色をだにかすめ給へかすと、疎ましくのみ思ひ聞え給ふ。

冬つ方、神事などもとまりてさうくしきに、徒然と思し餘りて、五の宮に例の近づき参り給ふ。雪うち散りて艶なる黄昏時に、なつかしき程に馴れたる御衣どもを、いよくたきしめ給ひて、心ことにけさうじ暮し給へれば、いと心弱からむ人はいか々と見たり。さすがにまかり申し、はた聞え給ふ。源女五の宮の惱ましくし給ふなるを、訪らひ聞えになむ。」とて、つい居給へれば、見もやり給はず。若君をもてあそび紛らはし坐する、

○そほめの、横顔の  
 ○しほやき衣の「須磨の蜃の鹽焼衣馴れゆけは疎くのみこそなり勝りけれ。」  
 ○馴れ行くこそ「なれゆくはうき世なればや須磨の蜃の鹽焼衣まほなるらむ。」  
 ○斯かりける事も  
 ○紫の上の心。  
 ○うらなくて、何の隔てもなく。  
 ○忍びやかなる限り、内々供する者のみを連れて。  
 ○内裏より外の、参内以外の出あるき。  
 ○いでや御すき心人々の私語。  
 ○西なるが事々しきを、西門が正門。  
 ○うすき、せき込んで出て來る。

そばめのたゞならぬを、驚怪しく御氣色の變れる頃かな。罪もなしや。しほやき衣のあまり目馴れ、見立てなく思さるゝにやとて、とだえ置くを、又いかゞ。」など聞えたまへば、驚馴れ行くこそけに憂き事多かりけれ。」と許りにて、うち背きて臥し給へるは、見捨てて出で給ふ道物憂けれど、宮に御消息聞え給ひてければ、出で給ひぬ。斯かりける事もありける世を、うらなくて過しけるよと、思ひ續けて臥し給へり。鈍びたる御衣共なれど、色あひ重なり好ましくなかく見えて、雪の光にいみじく艶なる御姿を見出して、まことに離れまさり給はばと、忍びあへず思さる。御前など忍びやかなる限りして、内裏より外のありきは物憂き程になりけりや。桃園の宮の心細きさまにて物し給ふも、式部卿の宮に年頃は譲り聞えつるを、今は頼むなど思し宣ふも、理にいとほしければ。」など、人々にも宣ひなせど、「いでや御すき心のふり難きぞ、あたら御疵なめる。輕々しき事も出で來なむ。」などつぶやきあへり。宮には北面の人繁き方なる御門は、入り給はむも輕々しければ、西なるが事々しきを、人入れさせ給ひて、宮の御方に御消息あれば、今日しも渡り給はじと思しけるを、驚きてあけさせ給ふ。御門守寒けなるけはひ、うすき出で來て、頓にもえ開けやらず。これより外の男はた無きなるべし。ごほくと引きて、門番、錠のいと

○三十年のあなた今源氏三十二歳なれば。

○かりそめの宿り此の世を捨て得ず。

○ひこじろひ引いたりしやくつたり。

○御耳も驚かず源氏の耳にいらす。

○宵まごひ宵の内から睡がる。

○いと古めかしき老人の。

○名のり出づるにぞ源氏やうく思ひ出す。

○その世の事 桐壺帝時代の事。

○親なしに「しなてるや片岡山の飯に餓えてふせる旅人あはれ親なし。」源氏の父母なきより言ふ。

○すけみにたる口つき 老人の齒おちてまはらなる。  
○舌つきにて あまえたる物言ひ。  
○うちざれむ ふざけんぞ。  
○まほゆさよ 氣恥かしさよ。  
○今しも來たる老今更に來たる老。  
○このさかりに 源内侍の若盛りの頃。  
○入道の宮などの御齡よ 薄雲のいまだ四十にもならぬを言ふ。

○年の程 源内侍の如き。  
○親のおや「親の親と思はましかほごひてましわが子の子にはあらぬなるべし。」  
○のぞかにぞ 緩々

いたく錆びにければ、開かず。」と憂ふるを、あはれと聞しめす。昨日今日と思す程に、三十年のあなたにもなりにける世かな、斯かるを見つゝ、かりそめの宿りをえ思ひすてず、本草の色にも心をうつすよと、思し知らる。口ずさびに、

いつのまに蓬がもととむすほほれ雪ふる里と荒れしかき根ぞ

や、久しくひこじろひ開けて入り給ふ。宮の御方に、例の御物語聞え給ふに、古事どもそこはかとなきうちはじめ、聞え盡し給へど、御耳も驚かず、ねぶたきに、宮も欠伸うちし給ひて、女五「宵まごひをし侍れば、物もえ聞えやらす。」と、宣ふ程もなく、躰とか、聞き知らぬ音すれば、喜びながら立出で給はむとするに、またいと古めかしき咳嗽うちして、参りたる人あり。内侍「かしこけれど、聞召したらむと頼み聞えさするを、世にある者とも數まへさせ給はぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせ給ひし。」など、名のり出づるにぞ思し出づる。源内侍のすけといひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にて行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知り給はざりつるを、淺ましうなりぬ。源「その世の事は、皆昔語りになり行くを、遙かに思ひ出づるも心細きに、うれしき御聲かな。親なしにふせる旅人とはぐ、み給へかし。」とて、寄り居給へる御けはひに、いと昔思ひ出でつゝ、古

りがたくなまめかしき様にもてなして、いたうすけみにたる口つき思ひやらるゝ聲づかひの、さすがに舌つきにて、うちざれむとは猶思へり。内侍「いひこし程に。」など聞えかゝるまばゆさよ。今しも來たる老のやうになど、ほゝゑまれ給ふものから、ひきかへこれも哀れなり。このさかりにいとみ給ひし女御更衣、あるはひたすら亡くなり給ひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへ給ふもあべかめり。入道の宮などの御齡よ、あさましとのみ思さるゝ世に、年の程身の残りすくなけさに、心ばへなども、物はかなく見えし人の、いきとまりて、のどやかに行ひをもうちして過しけるは、なほすべて定めなき世なりと思すに、物哀れなる御氣色を、心ときめきに思ひて、若やぐ。

内侍 年経れどこのちぎりこそ忘れね親のおよとかいひし一言と聞ゆれば、疎ましくて、

源 「身をかへて後も待ち見よこの世にて親を忘るゝ例ありやとたのもしき契りぞや。今のどかにぞ聞えさすべき。」とて立ち給ひぬ。

西面には御格子参りたれど、厭ひ聞えがほならむもいかゞとて、一間二間はおろさず。月さし出でて、薄らかに積れる雪の光にあひて、なか／＼いと面白き夜の様なり。ありつ

○老いらく 源内侍  
 ○よからぬもの 枕  
 草紙に「すさまじき  
 物おうなのけさうし  
 はすの月夜。」  
 ○まめやかに 眞面  
 目に。  
 ○おり立ちて 眞劍  
 に。  
 ○昔我も人も 権の  
 心、権も源氏も。  
 ○故宮 父式部卿。  
 ○世の末にさたすぎ  
 盛りすぎて。  
 ○心づからの 「戀  
 しさも心づからのわ  
 ざなれば置所なくも  
 てぞ煩ふ。」  
 ○けにかたはらいた  
 し 侍女等の心。  
 ○いさら川 「犬上  
 のまこの山なるいさ  
 や川いさ答へて我  
 が名漏すらな。」

る老いらくの心けさうも、よからぬものの世のたとひとか聞きしと、思し出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやかに聞えたまひて、一言、憎しなども、人傳ひとつてならで宣はせむを、思ひ絶ゆる節にもせむ。」と、おり立ちてせめ聞え給へど、昔我も人も若やかに罪免されたりし世にだに、故宮などの心よせ思したりしを、猶あるまじく恥かしと思ひ聞えてやみにしを、世の末にさたすぎ、つきなき程にて、一聲もいとまばゆからむとおほして、更に動きなき御心なれば、あさまじうつらしと思ひ聞え給ふ。さすがにはしたなく、さし放ちてなどはあらぬ、人傳ひとつての御返りなどぞ心やましきや。夜もいたう更け行くに、風のけはひ烈しくて、まことにいと物心ほそく覺ゆれば、様よき程におし拭ひ給ひて、

「つれなきをむかしにこりぬ心こそ人のつらさに添へてつらけれ  
 心づからの。」と宣ひすさぶるを、けにかたはらいたしと人々例の聞ゆ。

「あらためて何かは見えむ人の上にかかりと聞きし心ばかりを  
 昔に變ることは習はず。」と聞えたまへり。言ふかひなくて、いとまめやかに怨じ聞えて出で給ふも、いと若々しき心地し給へば、一言、いとかく世の例たとひになりぬべき有様、漏らし給ふなよ、ゆめ／＼。いさら川なども馴れ／＼しや。」とて、切せきにうち囁ささめき語らひ給へど、何事

○あなかたじけな  
 あまりなるあしらひ  
 ○輕らかに 源氏が  
 輕々しく無理な所業  
 はしない。  
 ○けに人の程の 権  
 の心。  
 ○輕々しき心の程も  
 我が心の輕い處を  
 源氏に見られる事も  
 ○餘所の御返り 一  
 通りの返事。  
 ○年頃しづみつる  
 齋院として佛に遠ざ  
 かりし。  
 ○俄にかかる御事を  
 しも云々 源氏に對  
 して振りもぎる様な  
 態度を示すのも却つ  
 て目だつて人の噂に  
 なるかも知れぬ。  
 ○ひみつ心 齋院の  
 女房達が源氏を

にかあらむ。人々も、「あなかたじけな。あながちになさけ後れても、もてなし聞え給ふらむ。輕かろらかにおし立ちてなどは見え給はぬ御氣色を、心苦しう。」といふ。けに人の程のをかしきにも、哀れにも思し知らぬにはあらねど、物思ひ知る様に見え奉るとて、おしなべての世の人の、めで聞ゆらむつらにや思ひなされむ、かつは輕々しき心の程も見知り給ひぬべく、恥かしけなめる御有様をと思せば、懐かしからむ情もいとあいなし。餘所の御返りなどはうち絶えて、覺束なかるまじき程に聞え給ひ、人傳ひとつての御答へ、はしたなからで過してむ、年頃しづみつる罪失ふばかり御行ひをとほし立てど、俄にかかる御事をも、もてはなれ顔にあらむも、なか／＼今めかしき様に見え聞えて、人のとりなさじやはと、世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつは侍ふ人にもうちとけ給はず、いたう御心づかひし給ひつ、やう／＼御行ひをのみし給ふ。御兄弟おんはらの君達きみたち數多ものし給へど、ひとつ御腹ならねば、いと疎々しく、宮の内いと幽かすかになりゆくま、に、さばかりめでたき人のねんころ懇に御心を盡し聞え給へば、皆人心をよせ聞ゆるも、ひとつ心と見ゆ。

おと大臣は、あながちに思し入るゝにしもあらねど、つれなき御氣色のうれたきに、負けて止みなむも口惜しく、けにはた人の御有様の、世のおほえ殊にあらまほしく、物を深く

○世の人のさある云  
 源氏いろ／＼の  
 経歴を経て心持ま  
 する。  
 ○夜がれ 毎夜留守  
 にする。  
 ○女君 紫の上。  
 ○忍び給へや 紫の  
 上の心。  
 ○宮 藤壺。  
 ○見習はぬこと っ  
 いぞ無事。  
 ○まろがれたる御額  
 髪 涙にかたまつた  
 紫の上の髪。  
 ○誰がならばし聞え  
 たるぞ 誰の仕込ぞ  
 ○齋院にはかなしご  
 ぞ 齋院に戯談いふ  
 ○持て離れたる 戀  
 とは縁遠い。  
 ○昔より 齋院の事  
 ○氣遠き 遠慮深い

思し知り、世の人のとあるかかる差別も聞き集め給ひて、昔よりもあまた經まさりて思さ  
 るれば、今さらの御仇氣も、かつは世のもどきをも思しながら、空しからむはいよく人  
 わらへなるべし、如何にせむと、御心動きて、二條院に夜がれかさね給ふを、女君は、戲  
 れにくくのみ思す。忍び給へど、如何うちこほる、折もなからむや。源「怪しく例ならぬ御  
 氣色こそ、心得難けれ。」とて御髪をかきやりつ、いとほしと思したる様も、繪に畫かま  
 ほしき御あはひなり。源「宮亡せ給ひて後、上のいとさう／＼しけにのみ世を思したるも、  
 心苦しう見奉り、太政大臣も物し給はで、見ゆづる人なき事しけさになむ、この程の絶間  
 などを、見習はぬことに思すらむも、理に哀れなれど、今はさりと心のかに思せ。大  
 人び給ひたれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬ様に物し給ふこそらうた  
 けれ。」など、まろがれたる御額髪ひきつくり給へど、いよく背きて物も聞え給はず。  
 源「いといたく若び給へるは、誰がならばし聞えたるぞ。」とて、常なき世にかくまで心おか  
 る、も味氣なのわざやと、かつはうちながめ給ふ。源「齋院にはかなしごと聞ゆるや、もし  
 思し僻むる方ある。それはいと持て離れたることぞよ。おのづから見給ひてむ。昔よりこ  
 よなう氣遠き御心ばへなるを、さう／＼しき折々、たゞならで聞えなやますに、彼處もつ

○まめ／＼しき本  
 氣の沙汰。  
 ○後めたるはあらじ  
 氣遣はない。  
 ○松と竹との差別  
 松と竹の雪のつもり  
 様の別なる事。  
 ○思ひ流され 思ひ  
 やられ。  
 ○すさまじき例 枕  
 草紙「すさまじき物  
 はおうなのけさうし  
 はすの月夜。」  
 ○咽びて 氷りて流  
 れ兼ねたる様。  
 ○さまざまの袖 童  
 女の衣。  
 ○もてはやしたる  
 見はえある。  
 ○ふくつけがれど  
 怒はれども。  
 ○かたへ 一部の童  
 女等。

れづれに物し給ふ所なれば、たまさかの御答へなどし給へど、まめ／＼しき様にもあらぬ  
 を斯くなむあるとしようれへ聞ゆべき事にやは。後めたるはあらじとを思ひ直し給へ。」な  
 ど日一日慰め聞え給ふ。  
 雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつ、松と竹との差別をかしく見ゆる夕暮に、  
 人の御容貌も光まさりて見ゆ。源「時々につけても 人の心をうつすめる、花紅葉の盛りよ  
 りも、冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそ、怪しう色なきものの身にしてみて、  
 此の世の外の事まで思ひ流され、面白さも哀れさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひ  
 置きけむ人の心浅さよ。」とて、御簾巻きあけさせ給ふ。月は限なくさし出でて、ひとつ色  
 に見え渡されたるに、しをれたる前裁のかけ心苦しう、遣水もいといたう咽びて、池の水  
 もえもいはず凄きに、童へおろして、雪まろばしせさせ給ふ。をかしけなる姿、頭つきど  
 も、月にはえて、大きやかに馴れたるが、さまざまの袖亂れ著、帯しどけなき宿直姿なま  
 めいたるに、こよなう餘れる髪のスス、白き庭には、ましてもてはやしたる、いとけざや  
 かなり。小さきは、童けて喜びはしるに、扇なども落して、打解け顔をかしけなり。いと  
 多う轉ばさむと、ふくつけがれど、えも押し動かさで侘ぶめり。かたへは東の妻戸など



○中宮 藤壺。  
 ○世に古りたる 珍らしからぬ。  
 ○口惜しう 藤壺が思ひ出されて。  
 ○後やすきもの 藤壺源氏を心やすく思ふ。  
 ○もて出でて 表立つて才能を現はした事はないが。  
 ○さいへや 性質藤壺に似てはるが。  
 ○煩はしき氣 やかましい所。  
 ○尚侍 藤月夜。  
 ○あさはかなる筋云 藤月夜は輕率の事はない筈の人だのに源氏と浮名を立てられたるは怪しい。  
 ○なほ引き出でつべき 藤月夜は。

に出で居て、心もとなげに笑ふ。

源一年、中宮の御前に雪の山造られたりし、世に古りたることなれど、なほ珍らしくもはかなき事をしなし給へりしかな。何の折々につけても、口惜しう飽かずもあるかな。いと氣遠くもてなし給ひて、くはしき御有様を見馴らし奉りし事はなかりしかど、御まじらひの程に、後やすきものには思したりきかし。うち頼み聞えて、とあることかか折につけて、何事も聞え通ひしに、もて出でて、らうくじき事も見え給はざりしかど、いふかひありて、思ふ様に、はかなき事わざをもしなし給ひしはや。世に又さばかりの類ありなむや。やはらかにおびれたるものから、深う由づきたる所の、ならびなく物し給ひしを、君こそは、さいへど紫のゆるこよなからず物し給ふめれど、少し煩はしき氣をひて、かどかどしさのすゝみ給へるや苦しからむ。前齋院の御心ばへは、又様ことにぞ見ゆる。さうさうしきに、何となくとも聞え合はせ、我も心遣ひせらるべき御あたり、唯この一所や、世に残り給へらむ。」と宣ふ。尚侍こそは、らうくじく故々しき方は人にまさり給へれ。あさはかなる筋など、もてはなれ給へりける人の御心を、怪しくもありける事どもかな。」と宣へば、運然かし。なまめかしう容貌よき女の例には、なほ引き出でつべき人ぞか

○うちあだけ あたあだしい浮氣者。  
 ○人よりは云々 我は比較のおとなしい男と思つたのに。  
 ○かんの君 藤月夜  
 ○數にもあらず 明石の上の事。  
 ○物の心 譯は分つて居さうな。  
 ○思ひあがれる様 明石の上の氣位高い事。  
 ○いふかひなき際 一向つまらぬ女。  
 ○東の院 花散里。  
 ○古りがたく 相變らず可憐である。  
 ○然はた云々 あの様にも又ありにくい  
 ○傾き 頭をかきし  
 ○かんざし 髪つき  
 ○戀ひ聞ゆる 藤壺  
 ○いさゝかわくる 權に分くる愛情。

し。さも思ふには、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけ好きたる人の、年積り行くまゝに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひしだに。」など、宣ひ出でて、かんの君の御事にも、涙少しはおとし給ひつ。運この、數にもあらず貶しめ給ふ山里の人こそは、身の程にはや、打過ぎ、物の心など得つべけれど、人により異なるべきものなれば、思ひあがれる様をも見消ちて侍るかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人は勝れたるは難き世なりや。東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。然はた更にえあらぬものを、さる方につけての心ばせ人にとりつ、見そめしより、同じやうに世をつゝましけに思ひて過ぎぬるよ。今はた、互に背くべくもあらず、深うあはれと思ひ侍る。」など、昔今の御物語に夜ふけゆく。月いよく澄みて、靜かにおもしろし。女君、

こほりとぞ石間の水はゆきなやみ空すむ月のかげぞなる、

外を見出して、少し傾き給へるほど、似る物なく美しけなり。かんざし面様の、戀ひ聞ゆる人の面かけにふと覺えて、めでたければ、いさゝかわくる御心もとりかへしつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

- かきつめて 色々の事を思ひ出して。
- 宮 藤壺。
- ほのかに 藤壺の姿を。
- もらさじと 源氏との祕密を人に言はじと。
- 苦しきめ 藤壺が死後苦を受ける。
- 驚きて 目さめて
- 涙も流れ 夢中にも涙を流した。
- うちもみじろか 源氏が。
- 然とはなくて 誰の爲とは言はず。
- 何わざをして ぞうかして。
- しるべなき世界 冥土。
- かの御爲 藤壺の爲。
- 内裏にも 冷泉も

かきつめてむかし戀しき雪もよに哀れをそふるをしのうきねか  
 入り給ひても、宮の御事を思ひつ、大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見奉るを、いみじく怨み給へる御氣色にて、藤壺もらさじと宣ひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥かしう苦しきめを見るにつけても、つらくなむ。」と宣ふ。御答へ聞ゆとおほすに、おそはる心地して、女君の「こはなど斯くは。」と宣ふに、驚きて、いみじく口惜しく、胸のおき所なくさわけば、おさへて、涙も流れ出でにけり。今もいみじく濡らし添へ給ふ。女君、如何なる事にかと思すに、うちもみじろかて臥し給へり。

とけて寝ぬねざめさびしき冬の夜に結ほほれつる夢のみじかさ

なか／＼飽かず悲しと思すに、疾く起き給ひて、然とはなくて、所々に御誦經などせさせ給ふ。苦しきめ見せ給ふと恨み給へるも、さぞ思さるらむかし、行ひをしたまひ、よろづに罪輕けなりし御有様ながら、此の一事にてぞ、この世の濁りをす、ぎ給はざらむと、物の心を深く思したるに、いみじく悲しければ、何わざをして、しるべなき世界におはすらむを、訪らひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばやなど、つく／＼と思す。かの御爲に、とり立てて何わざをもし給はむは、人咎め聞えつべし。内裏にも、御心の鬼に思す

- おなじ蓮 藤壺と一蓮托生と慕ふ。
- なき人を云々 なき人を慕へども藤壺の在處を知らぬ三途川のほざりて途方にくれる事であらう。
- 水の瀬 三の瀬。(三途の川を三瀬川といふ)

所やあらむと、思しつゝ、むほどに、阿彌陀佛を心にかけて、念じ奉り給ふ。おなじ蓮にとこそは、  
 なき人をしたふ心にまかせてもかけ見ぬ水の瀬にやまどはむ  
 と思すぞ憂かりけるとや。

○源氏三十三歳の夏のはじめより、三十五歳の十月まで。  
 ○宮の御はて三月藤壺の一週忌。  
 ○色あらたまり喪服を常服にかへて。  
 ○更衣 四月の初めに當る。  
 ○祭 賀茂祭、四月中西日。  
 ○若き人々 侍女等  
 ○大殿 源氏。  
 ○御禊の日 齋院御禊の日。  
 ○かけきやは 思ひかけぬ。  
 ○ふぢのやつれ 喪服にやつれてゐる。  
 ○すくよか 堅くろしく。  
 ○御服なほし 喪服をぬいで平常の衣にかへること。

少 女

年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中色あらたまりて、更衣のほどなども今めかしきを、まして祭の頃は、大かたの空の氣色心地よけなるに、前齋院にはつれづれと眺め給ふ。御前なる桂の下風、懐かしきにつけても、若き人々は思ひ出づる事どもあるを、大殿より、「御禊の日はいかにのどかに思さるらむ。」と、とぶらひ聞えさせ給へり。

源 今日、

かけきやは川瀬の波もたちかへり君がみそぎのふぢのやつれを

紫の紙、立文すくよかにて、藤の花につけ給へり。折のあはれなれば、御かへしあり。

ふぢ衣著しは昨日と思ふまに今日はみそぎの瀬にかはる世を

はかなく。

とばかりあるを、例の御目とゞめ給ひて見おはす。御服なほしの程などにも、宣旨のもとに、所狭きまで思しやれる事共あるを、院は見苦しき事に思ほし宣へど、をかしやかに、

○氣色はめる 御文。艶書の意。  
 ○おほやけざま 表向の見舞。  
 ○折過さず 源氏が機會をはずさず音信する。  
 ○この君の 源氏の  
 ○こなたにも 女五の宮が権に逢ふ時。  
 ○故宮 権の父。  
 ○筋異になり給ひて 源氏と姻戚でない意味。  
 ○故大殿の姫君 葵の上の事。  
 ○えさらぬ筋 葵の上。  
 ○さやうにて 権が源氏と逢つても。  
 ○さらがへりて 昔に返つて。  
 ○古代に 古風に。  
 ○心ごはきもの 強情者。

少 女

氣色はめる御文などのあらばこそ、とかくも聞え返さめ、年頃も、おほやけざまの折々の御訪らひなどは、聞えならはし給ひていとまめやかなれば、いかゞは聞えも紛らはすべからむと、もて煩ふべし。女五の宮の御方にも、かやうにも、折過さず聞え給へば、いと哀れに、女五「この君の、昨日今日の兒と思ひしを、かく大人びて訪らひ給ふ事、容貌のいと清らなるに添へて、心さへこそ人には殊に生ひ出で給へれ。」と、譽め聞え給ふを、若き人々は笑ひ聞ゆ。こなたにも對面し給ふ折は、女五「この大臣の、かく懇に聞え給ふめるを、何か、今始めたる御志にもあらず、故宮も、筋異になり給ひてえ見奉り給はぬ歎きを、給ひては、思ひ立ちし事を強ちにもてはなれ給ひし事など、宣ひ出でつゝ、悔しげにこそ思したりし折々ありしか。されど故大殿の姫君物せられし限りは、三の宮の思ひ給はむことのいとほしさに、とかく言添へ聞ゆる事も無かりしなり。今はその、やんごとなくえさらぬ筋にてもせられし人さへ亡くなられにしかば、實になどてかは、さやうにておはせましも悪しからまじと、うち覺え侍るにも、さらがへりて斯くねんごろに聞え給ふも、さるべきにもあらむとなむ思ひはべる。」など、いと古代に聞えたまふを、心づきなしと思して、権「故宮にも、しか心ごはきものに思はれ奉りて過ぎ侍りにしを、今更に又世に靡き

○いとつきなき 不  
 似合なる。  
 ○聞えおもむけ 説  
 きふせる。  
 ○宮人 権の侍女等  
 ○御自らは 源氏自  
 身は。  
 ○見え聞えて 権の  
 前齋院に。  
 ○若君 夕霧。  
 ○思し急ぐ 源氏が  
 ○大宮 夕霧の祖母  
 ○かの殿 左大臣邸  
 ○右大将 頭中將。  
 ○御伯父 葵の兄弟  
 ○あるじ方 左大臣  
 邸。  
 ○所狭き御いそぎ  
 大變な(元服式の)御  
 準備。  
 ○いそぎは 幼稚  
 ○淺葱にて 六位の  
 著る袍の色。  
 ○この事 大宮が。

侍らむも、いとつきなき事になむ。」と聞え給ひて、恥かしけなる御氣色なれば、強ひても  
 え聞えおもむけ給はず。宮人も上下皆心が聞えたれば、世の中いと後めたくのみ思さる  
 れど、かの御自らは、我が心をつくし哀れを見え聞えて、人の御氣色の、うちも動かむほ  
 どをこそ待ちわたり給へ。さやうにあながちなる様に、御心破り聞えなむなどは思さざる  
 べし。

大殿ばらの若君の、御元服のこと思し急ぐを、二條院にてとおほせど、大宮のいとゆか  
 しげに思したるも、理に心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせ奉り給ふ。右大将殿  
 をはじめ聞えて、御伯父の殿ばら、皆上達部のやんごとなき、御覺え殊にてのみ物し給へ  
 ば、あるじ方にも、我もくとさるべき事ども、とりとくに仕う奉り給ふ。大かた世ゆす  
 りて、所狭き御いそぎの勢ひなり。四位になしてむと思し、世の人も然ぞあらむと思へる  
 を、まだいときびはなる程を、我が心に任せたる世にて、然ゆくりかならむも、なか／＼  
 目馴れたる事なりと思しとゞめつ。淺葱にて殿上に還り給ふを、大宮は飽かず淺ましき事  
 と思したるぞ、理にいとほしかりける。御對面ありて、この事聞え給ふに、源たゞ今か  
 う強ちにしも、まだきにおひつかすまじう侍れど、思ふ様侍りて、大學の道に、暫しなら

○御前に侍じて 父  
 桐壺帝の。  
 ○廣き心を知らぬ程  
 智識の淺いうち。  
 ○はかなき親 愚か  
 な親。  
 ○かしこき子の勝る  
 はかなき親に勝る  
 ○次々傳はりつ、  
 父から子、子から孫  
 きたん／＼傳はつて  
 ○心になひ 思ふ  
 まゝになる。  
 ○遠くなむ むたな  
 事、縁遠い事。  
 ○鼻まじろきをしつ  
 つ 馬鹿にしながら  
 ○氣色よりつ、御  
 機嫌をとりながら。  
 ○人さ覺えて 立派  
 な人物らしく思はれ  
 て。  
 ○さし當りては 今  
 のところでは。

はさむの本意侍るにより、今一三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕  
 う奉りぬべき程にもならば、今人となり侍りなむ。自らは九重の内に生ひ出で侍りて、世  
 の中の有様も知り侍らず、晝夜御前に侍ひて、僅かになむはかなき書なども習ひ侍りし。  
 たゞ畏き御手より傳へ侍りしに、何事も廣き心知らぬ程は、文才をまねぶにも、琴笛  
 の調にも、音足らず、及ばぬ所の多くなむ侍りける。はかなき親にかしこき子の勝るため  
 しは、いと難きことになむ侍れば、まして次々傳はりつ、隔たりゆかむほどの、行くさ  
 きいと後めたきによりなむ、思ひ給へおきてはべる。高き家の子として、官爵心にな  
 ひ、世の中盛りに驕りならひぬれば、學問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむ覺ゆ  
 べかめる。戯れ遊びを好みて、心のまゝなる官爵に上りぬれば、時に隨ふ世の人の、下に  
 は鼻まじろきをしつ、追従し、氣色とりつ、隨ふほどは、おのづから人と覺えて、やん  
 ごとなきやうなれど、時うつり、さるべき人に立ち後れて、世衰ふる末には、人に輕め侮  
 らるゝに、かゝり所なきことになむ侍る。なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用るらる  
 る方もつよう侍らめ。さし當りては、心もとなきやうに侍りとも、終の世のおもしとなる  
 べき心おきてを習ひなば、侍らずなりなむ後も、後安かるべきによりなむ、たゞ今は、は

- この大将 頭中將
- 傾きはべる 考へる、合點がゆかね。
- 幼心地 夕霧の。
- 左衛門督 頭中將の兄弟。
- 辛しと思はれたるが 幼心地にも思はれたるがとつゞく。
- およすけても(夕霧が) ませた事をいつて。
- 字 成人の後つける名。
- 東の院 二條東院
- 珍らしく 字をつけるは儒者の作法であるから。
- なむむるこまなく 容赦なく。
- 家より外に求めたる 装束 他家から借りてきた装束、博士達の貧しいさま。

かばかしからずながらも、かくて育み侍らば、せまりたる大學の衆とて、笑ひあなづる人もよも侍らじと思ふ給ふる。」など聞え知らせ給へば、うち歎き給ひて、大宮實にかくも思し寄るべかりけるを、この大将なども、あまりひき違へたる御ことなりと、傾きはべるめるを、この幼心地にもいと口惜しく、大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下藤と思ひ貶したりしだに、皆各加階しのほりつ、およすけあへるに、淺葱をいと辛しと思はれたるが、心苦しう侍るなり。」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、源いとおよすけても恨み侍るなりな。いとかなしや。この人のほどよ。」とて、いとうつくしと思したり。源學問などして、少し物の心も得侍らば、その恨みはおのづから解け侍りなむ。」と聞え給ふ。字つくることは、東の院にてし給ふ。東の對をしつらはれたり。上達部殿上人、珍らしくいぶかしき事にて、我もくと集ひまゐり給へり。博士どももなか／＼臆しぬべし。源憚る所なく。例あらむにまかせて、なだむることなく、嚴しう行へ。」と仰せたまへば、強ひてつれなく思ひなして、家より外に求めたる装束どもの、うちあはず頑しき姿なども、恥なく、面もち、聲づかひ、うべくしくもてなしつ、座に就き並びたる作法より初め、見も知らぬ様どもなり。若き君達は、え堪へずほゝゑまれぬ。さるは物笑ひなど

- 右大将 頭中將。
- おふなく 丁寧に。
- おろす 叱る。
- たうぶ 給ふの轉
- ほころびて 吹き出して、堪へかねて笑ひ出す意。
- この道より 大學出身の人。
- かかる方ざま 學問の方面。
- 思し好みて 源氏が。
- 顔ども 博士達の
- 猿樂がましく 猿樂のやうで。猿樂は滑稽な物眞似を言ふ
- あざれ きちんこ してゐないこと。
- 著きあまりて 人数が多すぎて。
- 召しよめて 大學の衆どもを。

すさまじく、すぐしつ、靜まれる限りをとえり出して、瓶子なども取らせ給へれど、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おふなく土器とり給へるを、淺ましう咎め出でつ、おろす。儒者おほし垣下あるじはなはだ非常に侍りたうぶ。かくばかりのしるしとある某を知らずして、朝廷には仕う奉りたうぶ。甚だ嗚呼なり。」などいふに、人々皆ほころびて笑ひぬれば、また、儒者嗚高し。嗚止まむ。甚だ非常なり。座をひきて立ちたうびなむ。」など、威しいふもいとをかし。見ならひ給はぬ人々は、珍らしく興ありと思ひ、この道より出で立ち給へる上達部などは、したり顔にうち微笑みなどしつ、かかる方ざまを思し好みて、志し給ふがめでたきことと、限りなく思ひ聞え給へり。いさ、か物いふをも制す。無禮なりとても咎む。かしがましようの、しり居る顔どもも、夜に入りてはなか／＼、今少し掲焉なる火影に、猿樂がましくわびしけに人わろけなるなど、様々に、けにいとなべてならず、様異なるわざなりけり。大臣は、源いとあざれ、かたくななる身にて、けうさうし惑はされなむ。」と宣ひて、御簾の内に隠れてぞ御覽じける。數定まれる座に著きあまりて、歸りまかづる大學の衆どもあるをきこしめして、鈞殿の方に召しよめて、殊に物など賜はせけり。事果ててまかづる博士、才人ども召して、又々文作ら

○たゞの人 博士でない上達部や殿上人  
 ○講ずる 披講にて人々の作を讀みあける事。  
 ○左中辨 系圖外の人。  
 ○おほえ心こころなる 博士 左中辨は人望も殊にある博士だ。  
 ○かかる高き家 夕霧が源氏の子として  
 ○窓の登、枝の雪 學問に出精する意、車胤は螢を集めて書を読み、孫康は雪に映して書を読んだ故事。  
 ○賞でゆすりける 世間中の大評判であった。  
 ○大臣の御は 源氏の作の詩は。  
 ○女のえ知らぬこと 作者式部卑下の詞

せ給ふ。上達部殿上人も、さるべき限りをば、皆とゞめ侍はせ給ふ。博士の人々は四韻、たゞの人は、大臣を始め奉りて、絶句作り給ふ。興ある題の文字選りて、文章博士奉る。短き頃の夜なれば、明けはててぞ講ずる。左中辨講師仕う奉る。容貌いと清けなる人の、聲つかひ物々しく神さびて讀みあけたる程、いとおもしろし。おほえ心ことなる博士なりけり、かかる高き家に生まれ給ひて、世界の榮花にのみ戯れ給ふべき御身もちて、窓の螢をむつび、枝の雪をならし給ふ、志の勝れたるさまを、萬のことによそへ擬へて、心々に作り集めたる、句ごとに面白く、唐土にも持てわたり傳へまほしけなる世の文どもなりとなむ、その頃世に賞でゆすりける。大臣の御はさらなり。親めき哀れなる事さへ勝れたるを、涙おとして誦じさわぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは、憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。

うちつゞき、入學といふ事させ給ひて、やがてこの院の内に御曹司作りて、まめやかに才深き師にあづけ聞え給ひてぞ、學問させ奉り給ひける。大宮の御許にも、をさく參うで給はず。晝夜うつくしみて、なほ兒のやうにのみもてなし聞えたまへれば、彼處にては、え物習ひ給はじとて、靜かなる所に籠め奉り給へるなりけり。月に三度ばかりを參り

○人はなくやはある 人はない事もあるまい。  
 ○まじらひ 交際。  
 ○寮試 大學寮の試験、史記を讀ませる  
 ○わが御前 源氏の  
 ○大將 頭中將、以下三人系圖外の人。  
 ○御師の大内記 夕霧の先生。  
 ○かへさふべき 問ひかへすだらうと思はれるべき。  
 ○爪じるし 不審の點に爪にしてしをつけておくこと。  
 ○故大臣 頭中將の父左大臣。  
 ○おし拭ひ 源氏が涙を。  
 ○杯さし給へば 師の大内記に。  
 ○ひがもの すね者

給へとぞ、許し聞え給ひける。つと籠り居給ひて、いぶせきまゝに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位にのほり、世に用ゐらるゝ人はなくやはあると、思ひ聞え給へど、おほかたの人柄まめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いと能く念じて、いかで然るべき書ども疾く讀みはてて、まじらひもし、世にも出でたたむとおもひて、たゞ四五月の中に、史記などいふ書は、讀みはて給ひてけり。いまは寮試うけさせむとて、まづわが御前にて試みせさせ給ふ。例の大將、左大辨、式部の大輔、左中辨などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き巻々、寮試受けむに、博士のかへさふべき節々を引き出でて、一わたり讀ませ奉り給ふに、至らぬ限なく、かたぐに通はし讀み給へる様、爪じるし残らず、淺ましきまで有り難ければ、然るべきにこそおはしけれと、誰もく涙落し給ふ。大將はまして、「故大臣おはせましかば」と、聞え出でて泣き給ふ。殿もえ心強うもてなし給はず、源人の上にてかたくななりと見聞き侍りしを、子の大人ぶるに親の立ちかはり癡れ行くことは、幾許ならぬ齡ながら、かかる世にこそ侍りけれ。」など宣ひて、おし拭ひ給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり。大將杯さし給へば、いたう酔ひしれてをる顔つき、いと瘦々なり。世のひがものにて、才の程よりは用ゐる

- 大學に参り給ふ日 寮試の日。
- 寮門 大學寮の門
- またなく 此の上もなく。
- 冠者の君 夕露。
- かかる交らひ 大學生としての交際。
- 例の怪しき者共 博士ごもの事。
- 昔覺えて 此の時は昔のやうに。
- 文人擬生 文章生
- すが／＼しうすらすら。
- 殿にも 源氏の邸
- 后居給ふべきを 立后あるべきを。
- 齊宮の女御 秋好
- 母君 冷泉の母君
- 故薄雲の女院。
- 弘徽殿 頭中將、
- (此の時右大將)の女

られず、助けなくて身貧しくなむありけるを、御覽じうる所ありて、かく取り分き召し寄せたるなりけり。身に餘るまで御願みを賜はりて、この君の御徳に、たちまちに身をかへたると思へば、まして行くさきは、並ぶべき人なき御覺えにぞあらむかし。

大學に参り給ふ日は、寮門に、上達部の御車ども數しらず集ひたり。大方世に残りたる人あらしと見えたるに、またなくもてかしづかれて、繕はれ入りたまへる冠者の君の御さま、けにかかる交らひには堪へず、あてに美しけなり。例の怪しき者共の立ち交りつゝ、來居たる座の末を、辛しと思すぞ、いと理なるや。こゝにても、又おろしの、しる者共ありて、めざましけれど、少しも臆せず讀み果て給ひつ。昔覺えて大學の榮ゆる頃なれば、上中下の人、我も／＼とこの道に志し集まれば、いよく世の中に、才ありはか／＼しき人多くなむありける。文人擬生などいふなる事どもよりうちはじめ、すが／＼しうしはて給へれば、偏に心に入れて、師も弟子もいと勵みまし給ふ。殿にも文作りしけく、博士才人ども所えたり。すべて何事につけても、道々の才の程、顯はるゝ世になむありける。かくて、后居給ふべきを齊宮の女御をこそは、母君も御後見とゆづり聞えたまひしかばと、大臣も託け給ふ。源氏のうちしきり后に居給はむ事、世の人免し聞えず。弘徽殿の、

- 兵部卿の宮 紫の上の父君。
- ましてやんごみなき 兵部卿は當代の伯父君だから言ふ。
- 梅壺居給ひぬ 梅壺(秋好)が后に居給ひぬの意。
- 譲り聞え給ふ 源氏が内大臣になつた頭中將に。
- 人柄いと 以下頭中將の事を言ふ。
- 塞韻 此の事柄巻にてある。
- 劣らず 源氏に。
- 女は 女の御子は
- 今一所 雲井廬と言ふ。
- わかんとほり 王孫の意。
- 劣るまじ 雲井廬は弘徽殿に。
- 大宮 葵の上の母

まづ人より先に参り給ひにしも如何など、うち／＼に、此方彼方に心よせ聞ゆる人々、覺束ながり聞ゆ。兵部卿の宮と聞えし、今は式部卿にて、この御時にはましてやんごみなき御覺えにておはする御女、本意ありて参りたまへり。同じごとと王女御にて侍ひ給ふを、同じくは、御母かたにて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの、後見にとことよせて、似つかはしかるべくと、とり／＼に思し争ひたれど、なほ梅壺居給ひぬ。御幸ひの、かく引きかへ勝れ給へりけるを、世人驚き聞ゆ。大臣、太政大臣にあら給ひて、大將、内大臣になり給ひぬ。世の中の事どもまつりごち給ふべく、譲り聞え給ふ。人柄いとすくよかに、きら／＼しくて、心もちぬなどもかしこく物し給ふ。學問を立ててし給ひければ、塞韻には負け給ひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十餘人、大人びつゝ、物し給ふも、次々になり出でつゝ、劣らず榮えたる御家のうちなり。女は女御と今一所となむおはしける。わかんとほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察の大納言の北の方になりて、さし向ひたる子共の數多くなりて、それにまぜて後の親に譲らむ、いとあいなしとて、とり放ち聞え給ひて、大宮にぞ預け聞え給へりける。女御には、いとこよなく思ひおとし聞え給へれど、人がらかたちなど、いと美しうぞおは

○氣遠く夕霧と雲井鷹との間が。  
 ○幼心地に夕霧の  
 ○今も恥ぢ 雲井鷹が夕霧にあふ事を。  
 ○御後見ども 夕霧と雲井鷹との。  
 ○物休なきほご戀を解しない年頃。  
 ○これをぞ 二人の逢はれない事を。  
 ○片おひなる 未熟な。  
 ○おひさき美しき有望な書風で。  
 ○御方の人 雲井鷹の乳母など。  
 ○萩の上風 「秋はなほ夕まぐれこそ唯ならぬ萩の上風萩の下露。」  
 ○内の大臣 頭中將  
 ○姫君わたし 雲井鷹をお呼びになつて

しける。くわぎの君ひとつ所にて生ひ出で給ひしかど、おの／＼十に餘り給ひて後は、御方ことにて、睦まじき人なれど、男子にはうちとくまじきものなりと、父大臣聞えたまひて、氣遠くなりたるを、幼心地に思ふことなきにしあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、懇にまつはれありきて、志を見え聞え給へば、いみじう思ひかはして、けざやかに今も恥ぢ聞えたまはず、御後見どもも、何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひ給へる御あはひを、俄にも、いかゞはもて離れはしたなめ聞えむと見るに、女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそ物けなきほどと見聞ゆれ、おほけなくいかなる御中らひにありけむ。餘所々々になりては、これをぞしづ心なく思ふべき。まだ片おひなる手のおひさき美しきにて、書き交し給へる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の方は、ほの／＼知れるもありけれど、何かは、斯くこそと誰にも聞えむ、見かくしつゝあるなるべし。

所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬる頃、時雨うちして、萩の上風もたゞならぬ夕暮に、大宮の御方に、内の大臣参り給ひて、姫君わたし聞え給ひて、御琴など弾かせ奉り給ふ。宮はよろづの物の上手におはすれば、いづれも傳へ

○實しう傳へたる人琵琶の強法を正しく傳へたる人。  
 ○太政大臣の 源氏  
 ○山里にこめ置き給へる人 明石の上。  
 ○あそびの方の才音楽の伎倆。  
 ○ひまりご 獨奏  
 ○柱さすこ 左手で絃を押すこ。  
 ○幸ひにうち添へて 明石の上の事。  
 ○老の世にも給へらぬ源氏が年たけてもなかつた。  
 ○身に添へて 明石の上が姫君を手もこにおいて。  
 ○やんごとなき 紫の上をいふ。  
 ○思はぬ人 秋好。  
 ○東宮 朱雀院の御子後に今上とある方

奉り給ふ。頭中「琵琶こそ、女のしたるに憎き様なれど、らう／＼しきものに侍れ、今の世に實しう傳へたる人、をさ／＼侍らすなりにたり。何の親王、くれの源氏。」など數へ給ひて、頭中「女の中には、太政大臣の、山里にこめ置き給へる人こそ、いと上手と聞え侍れ。物の上手の後は侍れど、末になりて、山賤にて年経たる人の、いかでさしも引き勝れけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひて宣ふ折々はべれ。他事よりは、あそびの方の才はなほ廣うあはせ、彼此に通はし侍るこそかしこけれ。ひとりごとにて、上手となりけむこそ、珍らしきことなれ。」など宣ひて、宮にそゝのかし聞え給へば、大宮「柱さすこと初々しくなりにけりや。」と宣へど、おもしろう弾き給ふ。大宮「幸ひにうち添へて、なほ怪しうめでたかりける人なりや。老の世にも給へらぬ女子を設けさせ奉りて、身に添へてもやつし居たらず、やんごとなきに讓れる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る。」など、かつ御物語聞え給ふ。頭中「女はたゞ心ばせよりこそ、世に用ゐらるゝものに侍りけれ。」など人の上宣ひ出でて、頭中「女御を、けしうはあらず、何事も人に劣りてはおひ出でずかしと、思ひ給ひしかど、思はぬ人におされぬる宿世になむ、世は思ひの外なるものと思ひ侍りぬる。この君をだに、いかで思ふ様に見なし侍らむ。東宮の御元服たゞ今の事になりぬ



○おひすがひ 追ひ  
 ○立ち出で 明石姫  
 が人内する事をいふ  
 ○さる筋の人 皇后  
 ○故大臣 頭中將の  
 父左大臣。  
 ○おはせましかは  
 故大臣が存命ならば  
 ○姫君の 雲井鷹の  
 ○うちまもり 頭中  
 將が。  
 ○そはみ給へる 雲  
 井鷹が側をむいた。  
 ○かたはらめ 傍か  
 ら見た姿。  
 ○取由 左手で琴の  
 緒を押へること。  
 ○押しやり 等を。  
 ○風の方 文選「落  
 葉侯(微塵)の隅、而  
 風之力蓋(蓋)を管(管)連(連)  
 雍門(而)泣、琴之威以  
 末」  
 ○いとし 興を。

るをと、人知れず思ひ給へ志したるを、かういふさいはひ人の腹の后(きさき)がねこそ、又おひすがひぬれ。立ち出で給へらむに、ましてきしろふ人ありがたくや。」とうち歎きたまへば、大宮「などか然しもあらむ。この家にさる筋の人いで物し給はで止むやうあらじと、故大臣の思ひ給ひて、女御の御事をも、ゐたち急ぎ給ひしものを、おはせましかば、かくもて僻むる事もなからまし。」など、この御事にてぞ、太政大臣を恨めしげに思ひ聞え給へる。姫君の御様の、いとさびには美しくて、筆の御琴(おんこひ)弾き給ふを、御髪(みげ)の下端(したは)、簪(かんざし)などの、あてになまめかしきをうちまもり給へば、恥ぢらひて少しそばみ給へるかたはらめ、面つき美しげにて、取由(とりゆ)の手つきいみじう、つくりたる物の心地するを、宮も限りなく悲しと思したり。搔き合はせなど弾きすさび給ひて、押しやり給ひつ。大臣和琴(わこん)ひき寄せ給ひて、律(りつ)の調(しらべ)のなか／＼今めきたるを、さる上手の亂れてかい弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢(せう)ほろ／＼と残らぬに、老御達(おいごたち)など、涙おとしつ、こ、かしこの御几帳(みさやう)の後に頭をつどへたり。頭中「風の力(ちから)けだし寡(さび)し。」と、うち誦(ぞん)じ給ひて、頭中「琴(こ)の感(か)ならねど、怪しく物あはれなる夕(ゆふ)かな。なほ遊ばさむや。」とて、秋風樂(あきかぜがく)にかき合はせて、唱歌(うたが)し給へる聲いとおもしろければ、皆さま／＼、大臣(おとよ)をもいと美しと思ひ聞え給ふに、いと／＼添(そ)へむと

○才(さい)のほごより 學  
 の餘りに過ぎたのは  
 ○こまわざ 學問以  
 外の事。  
 ○いさ若(わ)う 夕霧(ゆきり)が  
 ○萩(はぎ)が花(はな)すり 催馬  
 樂「衣(え)がへせむわが  
 衣(え)は野原(の)萩(はぎ)萩(はぎ)の花  
 すり。」  
 ○大殿(おほい) 源氏。  
 ○かやうの御遊(み)び  
 音楽。  
 ○心のゆくわざ 氣  
 のはれること。  
 ○姫君(ひめぎみ) 雲井鷹。  
 ○氣(き)遠(と)く 夕霧(ゆきり)と雲  
 井鷹(いづた)を隔(へ)て。  
 ○御琴(みこひ)の音(ね) 雲井鷹  
 の強(つよ)く琴(こ)の音(ね)さへも  
 ○ねび人(ねびひと) 年老(ねい)いた  
 女房(にようぼう)ども。  
 ○大臣(おとよ) 頭中將。  
 ○出(い)で給(たま)ひぬる 歸  
 るやうにみせかけて

にやあらむ、冠者(くわんしや)の君(きみ)参(ま)り給(たま)へり。こなたにとて、御几帳(みさやう)隔(へ)てて入れ奉(たま)り給(たま)へり。頭中(おほちゆう)をさをさ對面(たいめん)もえ賜(たま)はらぬかな。などかく、この御學問(みまが)のあながちならむ。才(さい)のほどより餘りぬるも味氣(あじき)なきわざと、大臣(おとよ)も思(おも)ひ知(し)れることなるを、かくおきて聞(き)え給(たま)ふ、様(さま)あらむとは思(おも)う給(たま)へながら、斯(いか)う籠(こ)りおはすることなむ、心苦(こころ)しう侍(さむら)ひ。」と聞(き)え給(たま)ひて、頭中(おほちゆう)時(とき)はことわざもし給(たま)へ。笛(ふえ)の音(ね)にも古事(ふること)は傳(た)はるものなり。」とて、御笛(みふえ)奉(た)り給(たま)ふ。いと若うをかしげなる音(ね)に吹(ふ)きたてて、いみじうおもしろければ、御琴(みこひ)どもをば暫(しば)しとめて、大臣(おとよ)拍子(ひら)おどろ／＼しからず、うち鳴(な)らし給(たま)ひて、「萩(はぎ)が花(はな)すり。」など謠(うた)ひ給(たま)ふ。頭中(おほちゆう)大殿(おほい)も、かやうの御遊(み)びに心(こころ)とめて給(たま)ひて、いそがしき御政事(みまじりごと)どもをば、遁(に)れ給(たま)ふなりけり。けに味氣(あじき)なき世(よ)に、心のゆくわざをしてこそ、過(す)し侍(さむら)ひなまほしけれ。」など宣(のたま)ひて、御土器(みどらぎ)まるり給(たま)ふに、暗(くら)うなれば、大殿(おほい)油(あぶら)まるり、御湯漬(みゆづき)菓子(かき)など、誰(たれ)も／＼聞(き)召(め)す。姫君(ひめぎみ)はあなたに渡(わた)し奉(た)り給(たま)ひつ。強(つよ)ひて氣遠(きとほ)くもてなし給(たま)ひ、御琴(みこひ)の音(ね)ばかりをも聞(き)かせ奉(た)らじと、今はこよなくへだて聞(き)え給(たま)ふを、「いとほしき事(こと)ありぬべき世(よ)なるにこそ。」と、近(ちか)う仕(つか)うまつる大宮(おほみや)の御方(みかた)のねび人(ねびひと)どもさめてけり。大臣(おとよ)出(い)で給(たま)ひぬる様(さま)にて、忍(しの)びて人に物宣(もののたま)ふとて立ち給(たま)へりけるを、やをらかい細(こ)りて

少 女

○かしこがり 頭中  
將自らは賢いこと。  
○をれたることよ  
くないこと。  
○子を知る 日本紀  
「知子莫如父。」  
○うちたゆみて 油  
断して。  
○殿は 頭中將。  
○あたけごみ 好色  
の振舞。  
○冠者の君 夕霧。  
○あなむくつけや  
あ、困った事よ。  
○しりうごみ 陰口  
○煩はしき御心 頭  
中將の心をいふ。  
○大臣の強ひて云々  
源氏が無理に弘徽  
殿を壓倒する。  
○殿の御中 頭中將  
と源氏の友情。  
○さやうの氣色 夕  
霧と雲井麿との戀。

出で給ふ道に、かかるさゞめき言をするに、怪しうなり給ひて、御耳とゞめ給へば、わが御上をぞいふ。女房達「かしこがり給へど、人の親よ。自らをれたる事こそ出でくべかめれ。子を知るはといふは、空言なめり。」などぞつきしろふ、淺ましくもあるかな、さればよ、思ひよらぬ事にあらねど、いはけなき程にうちたゆみて、世は憂きものにもありけるかなと、氣色をつぶくと心え給へど、音もせで出で給ひぬ。御前おふ聲の嚴しきにぞ、女房達「殿は今こそ出でさせ給ひけれ。いづれの隈におはしましたらむ。今さへかかる御あだけごどぞ。」といひあへり。さゞめきごとの人々は、「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましたつるとこそ思ひつれ。あなむくつけや。しりうごどやほの聞召しつらむ。煩はしき御心を。」とわびあへり。殿は道すがらおほすに、いと口惜しく悪しきことにはあらねど、珍らしけなきあはひに、世の人も思ひいふべき事、大臣の、強ひて女御をおししづめ給ふもつらきに、わくらばに、人に優ることもやとこそ思ひつれ、嫉くもあるかなとおほす。殿の御中の大かたには、昔も今もいと善くおはしながら、かやうの方にては、挑み聞え給ひしなごりも思ひ出でて、心憂ければ、寢覺めがちにて明し給ふ。大宮も、さやうの氣色は御覽すらむものを、世になくかなしうし給ふ御孫にて、まか

○あざやきたる 圭  
角のある。  
○参り給へり 頭中  
將が大宮のところに  
○御尼額引きつろ  
ひ 大宮が切下髪  
を調べ。  
○まほならず 面  
向ひあはないで。  
○大臣 頭中將。  
○こゝに侍ふも 雲  
井麿の事を怒りてい  
ふ。  
○御めかれず 絶え  
ないで。  
○善からぬもの 雲  
井麿。  
○御目もおほきに  
あきれて目を見張る  
○心おきて 御心隔  
て。  
○幼きもの 雲井麿  
○目に近きが 弘徽  
殿の事。

せて見給ふならむと、人々のいひし氣色を、めざましう妬しと思すに、御心動きて、少し男々しうあざやきたる御心には、しづめがたし。  
二日ばかりありて参り給へり。しきりに参り給ふ時は、大宮もいと御心ゆき、嬉しきものに思ひたり。御尼額引きつろひ、うるはしき御小桂など奉りそへて、子ながらも恥かしけにおはする人様なれば、まほならず見え奉り給ふ。大臣御けしき悪しくて、頭中「ここに侍ふもはしたなく、人々いかに見侍らむと心おかれにたり。はかしくしき身に侍らねど、世に侍らむかぎりは、御めかれず御覽せられ、覺束なき隔てなくとこそ思ひ給ふれ。善からぬものうへにて、怨めしと思ひ聞えさせつべき事の出でまうで來たるを、かうも思ふ給へど且は思ふ給ふれど、猶しづめ難く覺え侍りてなむ。」と、涙おし拭ひ給ふに、宮けさうじ給へる御顔の色たがひて、御目もおほきになりぬ。大宮「如何やうなることにてか、今更の齡の末に、心おきては思さるらむ。」と聞えたまふも、流石にいとほしけれど、頭中「たのもしき御かけに、幼きものを奉りおきて、自らはなかく幼くより見給へもつかず。まづ目に近きがまじらひなど、はかしくしからぬを見給ひ歎きいとなみつ、さりともしも人となさせ給ひてむと、頼みわたり侍りつるに、思はずなることの侍りければ、いと口

○あはつけき様に  
淡々しいやうに。  
○かの人の夕霧の  
○かたはなる 宜し  
くない。  
○さし離れ 己の家  
さ全く關係のない。  
○今めかしうもてな  
さる、珍重せられ  
る。  
○夢にも 大宮は夕  
霧と雲井廬との事を  
○この人々 夕霧と  
雲井廬。  
○こゝにこそ 私こ  
そ。  
○諸共に 私にまで  
○見奉りしより 雲  
井廬を引受けて以來  
○そこに 貴方の。  
○物けなき程 物心  
のない子供を。  
○空しきことにて  
無實のことで。

惜しうなむ。まことに天の下ならぶ人なき有識には物せらるめれど、親しきほどに斯かるは、人の聞き思ふ所も、あはつけき様になむ、何ばかりの程にもあらぬ、なからひにだし侍るを、かの人の御爲にも、いとかたはなる事なり。さし離れ、きら／＼しう珍らしけあるあたりに、今めかしうもてなさる、こそをかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましき様にて、大臣も聞きおほす所侍りなむ。さるにても、かかる事なむと知らせ給ひて、殊更にもてなし、少しゆかしけある事をまてこそ侍らめ。幼き人々の心に任せて御覽じ放ちけるを、心憂く思ふ給ふる。」など聞え給ふに、夢にも知り給はぬことなれば、あさましう思ひて、大宮「けに斯う宣ふもことわりなれど、かけてもこの人々の下の心なむ知り侍らざりける。けにいと口惜しきことは、こゝにこそまして歎くべく侍れ。諸共に罪を責せ給ふは、恨めしき事になむ。見奉りしより、心殊に思ひ侍りて、そこに思し至らぬことをも、勝れたる様にもてなさむとこそ、人知れず思ひ侍れ。物けなき程を、心の闇に惑ひて、急ぎ物せむとは思ひよらぬことになむ。さても、誰かは斯かる事は聞えけむ。善からぬ人の言につきて、きはだけく思し宣ふも味氣なく、空しきことにて、人の御名や穢れむ。」と宣へば、頭中「何の浮きたることにか侍らむ。侍ふ人々も、かつは皆もどき笑ふべかめるもの

○一夜のしりうごとの人々 先夜陰口を  
きいた人々。  
○さし覗き 頭中將  
が雲井廬のさまを。  
○さいなみ給ふ 頭  
中將が責める。  
○さるべき隙にてこ  
そあらめ、いい機会  
を見て取持つたらう  
○これは 夕霧と雲  
井廬との間は。  
○げざやかなる さ  
やかなる。  
○若き人とても 世  
間には若い人でも。  
○夢に亂れたる所  
夕霧は少しも亂れた  
所「夢にも」の誤りか  
○心をやりて 注意  
して。  
○かしこ 己の所。  
○宮の御心 大宮の  
御料簡。

を、いと口惜しく、安からず思ひ給へらる、や。」とて、立ち給ひぬ。心知れる人は、いみじういとほしく思ふ。一夜のしりうごとの人々は、まして心地も違ひて、何にかかる睦物語をしけむと、思ひ歎きあへり。姫君は、何心もなくておはするに、さし覗き給へれば、いとらうたけなる御様を、哀れに見奉り給ふ。頭中「若き人といひながら、心幼く物し給ひけるを知らで、いとかく人なみ／＼にと思ひける、我こそ優りてはかなかりけれ。」とて、御乳母共をさいなみ給ふに、聞えむ方なし。乳母等「かやうの事は、限りなき帝の御いつき女も、自らあやまつ例、昔物語にもあめれど、氣色を知り傳ふる人、さるべき隙にてこそあらめ、これは、旦暮立ちまじり給ひて年頃おはしましたるを、何かはいはけなき御程を、宮の御もてなしよりさし過しても、隔て聞えさせむと、うちとけて過し聞えつるを、一昨年ばかりよりは、げざやかなる御もてなしになりて侍るめるに、若き人とてもうち紛ればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかめるを、夢に亂れたる所おはしまさざめれば、更に思ひよらざりける事。」と、おのがどち歎く。頭中「よし、暫しかかる事漏らさじ。隠れあるまじきことなれど、心をやりて、あらぬ事とだに言ひなされよ。今かしこに渡し奉りてむ。宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりととも、いとかがれとしも思

○大納言殿 雲井鷹の繼父、按察使大納言。  
 ○めでたきにも夕霧は。  
 ○萬に申し 頭中將がいろ／＼言つても  
 ○うち泣き 頭中將  
 ○徒らに 雲井鷹が  
 ○男君の御かなしき夕霧を愛する心。  
 ○かかる心 夕霧の情なくこよなき事  
 ○夕霧と雲井鷹との事を頭中將が。  
 ○もよよりいたう 元來頭中將は雲井鷹を餘り愛せず。  
 ○こりはずして 春宮の妃にする望みを  
 ○この君より 夕霧  
 ○等しき人 夕霧に  
 ○これより及びなからむ 雲井鷹以上の

はれざりけむ。」と宣へば、いとほしき中にも、うれしく宣ふと思ひて、乳母等、あないみじや。大納言殿に聞き給はむ事をさへ思ひ侍れば、めでたきにも直人のすぢは、何の珍らしきにか思ふ給へかけむ。」と聞ゆ。姫君はいと幼けなる御さまにて、萬に申し給へども、かひあるべきにあらねば、うち泣き給ひて、頭中如何にしてか徒らになり給ふまじきわざはすべからむ。」と、忍びて然るべきども宣ひて、大宮をのみ恨み聞え給ふ。宮はいといとほしと思す中にも、男君の御かなしきは勝れ給ふにやあらむ、かかる心のありけるも、美しう思さるゝに、情なくこよなき事のやうに思し宣へるを、などか然しもあるべき、もとよりいたう思ひつき給ふ事なくて、かくまで冊かむとも思したらざりしを、我が斯くもてなしそめたればこそ、春宮の御事をも思しかけたためれ、とりはずして唯人の宿世あらば、この君より外に優るべき人やは、容貌有様よりはじめて、等しき人あるべきかは、これよ及びなからむ際にもとこそ思へと、我が志のまさればにや、大臣をうらめしう思ひ聞え給ふ御心の中を、見せ奉りたらば、ましていかに恨み聞え給はむ。

かく騒がるらむとも知らで、冠者の君参り給へり。一夜も人目しけうて、思ふ事をもえ聞えずなりにしかば、常よりも哀れに覺え給ひければ、夕つ方おはしたるなるべし。宮、

○内の大臣 頭中將  
 ○ゆかしけなきこと 雲井鷹との戀。  
 ○ふと思ひよりぬ 夕霧が雲井鷹との事  
 ○たゞ氣がついた。  
 ○靜かなる所 學問所。  
 ○今よりだに 今からでもいから。  
 ○いとゞ文など 雲井鷹への。  
 ○物まゐりなど 大宮が夕霧に食事をすすめなど。  
 ○中障子 雲井鷹の部屋への隔ての。  
 ○女君も 雲井鷹も  
 ○雲井の鷹も 「霧深き雲井の鷹もわがこゝや晴れせず物の悲しがるらむ。」これを以て姫君の名とす

例はいひ知らずうち笑みて、待ち喜びきこえ給ふを、まめだちて物語など聞え給ふついでに、大宮「御事により、内の大臣の怨じて物し給ひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしけなきことをしも思ひそめ給ひて、人に物思はせ給ひつべきが心苦しきこと。かうも聞えじと思へど、さる心も知り給はでやと思へばなむ。」と聞え給へば、心にかゝれる事の筋なれば、ふと思ひよりぬ。面赤みて、夕霧「何事にか侍らむ。靜かなる所に籠り侍りにし後、ともかくも人にまじる折なければ、怨み給ふべきこと侍らじとなむ思ふ給ふる。」とて、いと恥かしと思へる氣色を、哀れに心ぐるしうて、大宮よし、今よりだに用意し給へ。」とばかりにて、他事に言ひなし給ひつ。いとゞ文なども通はむ事の難きなめりと思ふに、いと歎かし。物まゐりなどし給へど、更にまらで、寐ね給ひぬる様なれど、心もそらにて、人しづまる程に、中障子をひけど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つとさして、人の音もせず。いと心ほそく覺えて、障子によりかゝりて居給へるに、女君も目をさまして、風の音の竹に待ちとられて、うちそよめくに、鷹の鳴きわたる聲のほかに聞ゆるに、幼き心地にも、とかく思し亂るゝにや、雲井鷹「雲井の鷹もわがこゝや。」と、ひとりごち給ふけはひ、若うらうたけなり。いみじう心もとなければ、夕霧「これ開けさせ給へ。小侍従や

○聞き夕霧が。  
○御顔引き入れ 雲井鷹が顔を夜具の内

に。  
○御目覺めてや 大宮が。

○物はづかしうて 夕霧は。

○かの御方さま 雲井鷹の方。

○女はた 雲井鷹もまた。

○人やいかゞ 他人は何ぞ。

○打語らふ様 女房達が夕霧との間を。

○あはめ聞ゆれば 夕霧との事で雲井鷹を非難するので。

○通はし給はず 夕霧へ文も。

○今少し 雲井鷹より少し、雲井鷹十四歳、夕霧十二歳。

○参り給はず 宮に

さぶらふ。」と宣へど、音もせず。御乳母子なり。獨語を聞き給ひけるも恥かしうて、あいなく御顔引き入れ給へど、哀れは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母達など近く臥して、打身じろくも苦しければ、かたみに音もせず。

夕霧 さ夜中に友呼びわたるかりがねにうたて吹きそふ萩のうは風

身にもしみけるかなと思ひ續けて、宮の御前にかへりて歎きがちなるも、御目覺めてや聞かせ給ふらむとつゝ、ましく、みじろき臥したまへり。あいなく物はづかしうて、我が御方に疾く出でて、御文かき給へれど、小侍従にもえ逢ひたまはず、かの御方さまにもえ往かず、胸潰れて覺え給ふ。女はた、騒がれ給ひし事のみ恥かしうて、我が身や如何あらむ、人やいかゞ思はむとも深くおほし入れず。をかしうらうたけにて、打語らふ様などを、疎ましとも思ひ離れ給はざりけり。又かく騒がるべき事とも思さざりけるを、御後見どももいみじうあばめ聞ゆれば、え言も通はし給はず。大人びたる人や、さるべき隙をも造り出づらむ、をとこ君も、今少し物はかなき年の程にて、只いと口惜しうのみ思ふ。

大臣はそのまゝに参り給はず、宮をいとつらしと思ひ聞え給ふ。北の方には、斯かることなむと、氣色も見せ奉り給はず。たゞ大方いとむつかしき御氣色にて、頭中「中宮のよそ

○ある人々 弘徽殿の侍女達。

○まかでさせ 弘徽殿を内裏から。

○上は 帝は。

○つれづれに 弘徽殿にいふ。

○姫君わたして 雲井鷹を呼んで。

○さくじりおよすけ たる人 夕霧の事。

○けぢかきも 夕霧と親しくするもの。

○渡し聞え 雲井鷹を此方へ呼びよせる

○ひじり物せられし 葵の上の事。

○深くへたて 大宮を。

○内裏にさぶらふが 弘徽殿が。

○慰めよ 弘徽殿を

少 女

五二三

ほひ殊にて参りたまへるに、女御の世の中思ひしめりて物したまふを、心苦しう胸いたきに、まかでさせ奉りて、心安くうち休ませ奉らむ。さすがに上につと侍はせ給ひて、晝夜おはしますめれば、ある人々も心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに。」と宣ひて、俄にまかでさせ奉り給ふ。御暇も許されがたきを、打ちむづかり給ひて、上はしづゝに思召したるを、しひて御迎へし給ふ。頭中「つれづれに思されむを、姫君わたして、諸共にあそびなどし給へ。宮にあづけ奉りたる、後やすけれど、いとさくじりおよすけたる人立ちまじりて、自らけぢかきも、あいなき程になりければなむ。」と聞え給ひて、俄に渡し聞え給ふ。宮いとあへなしと思して、大宮ひとり物せられし女子なくなり給ひて後、いとさうざうしく心ほそかりしに、嬉しうこの君をえて、生ける限りのかしづきものと思ひて、且暮につけて、老のむづかしさも慰めむとこそ思ひつれ、思ひの外にへだてありて思しなすも、つらくなむ。」と聞え給へば、うち畏まりて、頭中「心に飽かず思う給へらるゝことは、然なむ思ひ給へらるゝとばかり聞えさせしになむ。深くへだて思う給うることはいかでか侍らむ。内裏にさぶらふが、世の中恨めしけにて、この頃まか出て侍るに、いと徒然に思ひて屈し侍れば、心苦しう見給ふるを、諸共にあそびわざをもして慰めよと思ひ給へてな

○はぐみ 雲井鷹を養育し。  
 ○幼き心ごも 夕霧や雲井鷹の心。  
 ○さもこそはあらめ 夕霧や雲井鷹は尤もでもある。  
 ○些かの隙 雲井鷹に逢ふべき。  
 ○心の鬼に 氣がこがめて。  
 ○左衛門督、權中納言、頭中將の異腹の兄弟。  
 ○故殿 故左大臣、大宮の夫。  
 ○その御子共 左衛門督や權中納言等の御子ごも。  
 ○この君に 夕霧に。  
 ○なすらひなく 夕霧を特に可愛く。  
 ○この姫君 雲井鷹。  
 ○御側さけす 大宮が側を離さないで。  
 ○殿は 頭中將。

む、あからさまに物し侍る。」とて、「はぐみ、人となさせ給へるを、疎かにはよも思ひ聞えさせじ。」と申し給へば、斯う思し立ちにたれば、とゞめきこえ給ふとも思しかへすべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しう思されて、大宮「人の心こそ憂きものにはあれ。とかく幼き心どもにも、我に隔てて疎ましかりけることよ。又、さもこそはあらめ、大臣の、物の心を深う知り給ひながら、我を怨じて、かく率て渡し給ふ事、かしこにて、これより後安きこともあらじ。」と、打泣きつ、宣ふ。

をりしも冠者の君参り給へり。もし些かの隙もやと、この頃は繁うほのめき給ふなりけり。内の大臣の御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、我が御方に入り居給へり。内の大殿の君達、左の少將、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆こゝには参りつどひたれど、御簾の内はゆるし給はず。左衛門督、權中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのまゝに、今も参り仕うまつり給ふ事懇なれば、その御子共もさまざま参り給へど、この君に似る勻ひなく見ゆ。大宮の御志も、なすらひなく思したるを、たゞこの姫君をぞ、氣近うらうたき物に思しかしづきて、御側さけす、うつくしきものに思したりつるを、かくて渡り給ひなむが、いとさうぐしき事を思す。殿は、「今の

○然てもやあらまし 雲井鷹を夕霧に嫁してもいい。  
 ○人の御程の 夕霧の有様が。  
 ○志の 夕霧が雲井鷹に對する。  
 ○殊更なる様に 改めて娶はず様で。  
 ○一所にては 夕霧と雲井鷹と。  
 ○おいらかに 穉やかに。  
 ○宮の御ふみにて 大宮が雲井鷹へ手紙で。  
 ○かたなり 未だ十分發育しないこと。  
 ○さうぐしきも 其方と別れてからは恥かしきこと。夕霧との關係。  
 ○をこ君 夕霧。  
 ○同じ君 同じ主人

ほどに内裏に参り侍りて、夕つ方迎ひに参り侍らむ。」とて出で給ひぬ。いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、然てもやあらましと思せど、猶いと心やましければ、人の御程の少しものくしくなりなむに、かたはならず見なして、そのほど志の深さ淺さのおもむきをも見定めて、ゆるすとも、殊更なる様にもてなしてこそあらめ、制し諫むとも、一所にては、幼き心のまゝに、見苦しうこそあらめ、宮もよもあながちに制し宣ふことあらじとおほせば、女御の御徒然にことづけて、此處にも彼處にもおいらかに言ひなして、渡し給ひけり。宮の御ふみにて、「大臣こそ恨みもし給はめ。君は、さりとて志のほど知り給ふらむ。渡りて見え給へ。」と聞え給へれば、いとをかしけに引繕ひて渡りたまへり。十四になむおはしける。かたなりに見えたまへど、いと兒めかしうしめやかに、美しきさまし給へり。大宮「側さけ奉らず、且暮のもてあそび物に思ひ聞えつるを、さうぐしきもあるべきかな。残りすくなき齡のほどにて、御有様を見はつまじきことと、命をこそ思ひつれ。今さらに見捨ててうつろひ給ふやいづちならむと思へば、いとこそあはれなれ。」とて泣き給ふ。姫君は恥かしきことを思せば、顔ももたけ給はで、たゞ泣きにのみ泣き給ふ。をとこ君の御乳母、宰相の君出で来て、宰相「同じ君とこそ頼み聞えさせつれ。口惜しく渡

○むつかしき事 面倒なこと。  
 ○物ゆなし 頭中將が夕霧を。  
 ○わが君や 夕霧が  
 ○なま心やまし 口惜しく思ふ。  
 ○よろしき時こそ 普通の時こそ。  
 ○人のまよひ ぐさくさにまぎれて。  
 ○戀しうおはせむこそ云々 貴女の戀しさは非常である。  
 ○少し隙ありぬべかりつる 今までの。  
 ○殿まかで 頭中將  
 ○そや それ(殿)ぞや。  
 ○いと怖ろしき 雲井鷹が。  
 ○さもさほれ ぐさくともなれ。  
 ○御乳母 雲井鷹の

らせ給ふこと。殿はことざまに思しなる事おはしますとも、さやうに思し靡かせ給ふな。」など、さやめき聞ゆれば、いよく恥かしとおほして、物も宣はず。大宮「いで、むつかしき事な聞えられそ。人の御宿世々々のいと定めがたく。」と宣ふ。宰相「いでや、物ゆなしと侮り聞えさせ給ふにはべるめりかし。さりとも、けにわが君や人に劣り聞えさせ給ふと、聞しめしあはせよ。」と、なま心やましきまゝに言ふ。冠者の君、物の後に入り居て見給ふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心ほそくて、涙おし拭ひつ、おはする氣色を、御乳母いと心苦しう見て、宮にとかく聞えたばかりて、夕間暮の人のまよひに、對面せさせ奉れり。互に物恥かしく胸つぶれて、物もいはで泣き給ふ。夕霧「大臣の御心のいとつらければ、さばれ思ひ止みなむと思へど、戀しうおはせむこそわりなかるべけれ。などで、少し隙ありぬべかりつる日頃、餘所に隔てつらむ。」と宣ふさまも、いと若うあはれけなれば、雲井「まろも然こそはあらめ。」と宣ふ。夕霧「戀しとはおほしなむや。」と宣へば、少しうなづき給ふさまも、をさなけなり。大殿油まると、殿まかで給ふけはひ、こちたく追ひの、しる御前の聲に、人々「そや。」など怖ぢさわけば、いと怖ろしと思してわな、き給ふ。男はさもさばれと、ひたぶるに許し聞え給はず。御乳母参りてもとめ奉る

○更にも聞えず 言ふまでもなく。  
 ○大納言殿 按察使大納言。  
 ○六位宿世よ 夕霧の五位にならぬ故。  
 ○くれなるの 五位の袍の色は紅だ。  
 ○あさみざり 六位の袍の色。  
 ○いひしをる 言ひくたす。  
 ○いろく 各種の色と色々々々かける。  
 ○渡りたまひぬ 雲井鷹が己が方へ。  
 ○御車三つばかりにて 雲井鷹を頭中將がつれて行くのだ。  
 ○参り給へ 夕霧に  
 ○うち腫れたるまみ 泣いたので腫れた眼つき。

に、氣色を見て、あな心づきなや、けに宮知らせ給はぬことにはあらざりけりと思ふに、いとつらく、乳母「いでや、憂かりける世かな。殿の思し宣ふ事は更にも聞えず。大納言殿にもいかに聞かせ給はむ。めでたくとも、物の初めの、六位宿世よ。」とつぶやくもほの間のゆ。たゞこの屏風のうしろに尋ねきて、歎くなりけり。をとこ君、我をば位なしとはしたなむるなりけりと思すに、世の中怨めしければ、哀れも少しさむる心地してめざまし夕霧「かれ聞き給へ。くれなるの涙にふかき袖の色をあさみどりとやいひしをるべきはづかし。」と宣へば、雲井「いろく」に身のうき程の知らる、はいかに染めける中の衣ぞと宣ひはてぬに、殿入り給へば、わりなくて渡りたまひぬ。男君は、立ちとまりたる心地も、いと人わろく胸塞がりて、我が御方に臥し給ひぬ。御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出で給ふけはひを聞くと、しづ心なければ、宮の御前より参り給へとあれど、寐たるやうにて動きもし給はず。涙のみとまらねば、歎きあかして、霜のいと白きに急ぎ出で給ふ。うち腫れたるまみも、人に見えむが恥かしきに、宮はた召しまつはすべかめれば、

少

女

- 急ぎ出で 夕霧が
- うたて うた。
- 明けぐれ 夜明け前の暗いとき。
- 大殿 源氏。
- 五節 五節の舞姫
- 何ばかりの御いそぎならぬぞ それ程の御用意でもないが
- 近う 五節の目が
- 東の院 花散里。
- 殿には 源氏には
- 中宮 秋好。
- 五節などまじりしが 藤壺の表のため
- 左衛門督 頭中將の兄弟。
- うへの五節 殿上人から出す舞姫。
- 皆まじめさせ 舞姫を宮中に。
- からいことに 惟光が迷惑に。
- 大納言の 人々が惟光に言ふ詞。

心やすき所にとて急ぎ出で給ふなりけり。道のほど、人やりならず、心ほそく思ひ續くるに、空の氣色もいたう曇りて、まだ暗かりけり。

夕霧 霜氷うたてむすべる明けぐれの空かきくらし降るなみだかな

大殿には今年五節奉りたまふ。何ばかりの御いそぎならねど、童への装束など、近うなりぬとて急ぎさせ給ふ。東の院には、参りの夜の人々の装束せさせ給ふ。殿には、大方のことども、中宮よりも、童下仕の料まで、えならず奉れ給へり。過ぎにし年五節などどまりしが、さうくしかりし積りも取り添へ、人の心地も、常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば、所々いどみて、いとみじくよろづを盡し給ふ聞えあり。按察の大納言、左衛門督、うへの五節には、良清、今は近江の守にて左中辨なるなむ奉りける。皆とどめさせたまひて宮づかへすべく、仰せ言ことなる年なれば、女をおのゝ奉り給ふ。殿の舞姫は、惟光の朝臣の、攝津守にて左京大夫かけたる女、容貌などいとをかしけなる聞えあるを召す。からいことに思ひたれど、人々「大納言の外腹の女を奉らるるに、朝臣のいつき女出したてたらむ、何の恥かあるべき。」とさいなめば、わびて、おなじくば宮づかへやがてせさすべく思ひおきてたり。舞ひ習はしなどは、里にていと善うしたてて、かし

- 御前に召して 帝が舞姫を。
- うちならし 下替古。
- 御前を渡らせて 源氏の。
- 大學の君 夕霧。
- 物など見入れられず 食物などみる氣もせず。
- 立ち出でて 夕霧が。
- 上の御方 紫の上
- 物近うも 夕霧を
- 我が御心ならひ 源氏と藤壺の事か
- 疎々し 紫の上は夕霧。
- やをら寄りて 夕霧が。
- なやまし休にて 惟光の女。
- かの人 雲井鷹。
- そびやか 脊高く

づきなど、したしう身に添ふべきはいみじう選り整へて、その日の夕つけて参らせたり。殿にも、御方々の童、下仕のすぐれたるをと、御覽じくらべ、えり出でらるゝこゝちどもは、程々につけて、いとおもだたしけなり。御前に召して御覽せむうちならしに、御前を渡らせてと定めたまふ。捨つべうもあらず、とりくくなる童への様體容貌を思し煩ひて、選「今一所の料を、これより奉らばや。」など笑ひ給ふ。たゞもてなし用意によりてぞ選びに入りける。

大學の君胸のみ塞がりて、物など見入れられず、屈しいたくて、書も讀まで眺め臥し給へるを、心もや慰むと、立ち出でて紛れ歩き給ふ。様容貌はめでたくをかしけにて、靜やかになまめい給へれば、若き女房などは、いとをかしと見奉る。上の御方には、御簾の前にだに物近うももてなし給はず、我が御心ならひ、如何に思すにありけむ、疎々しければ、御達なども氣どほきを、今日は物のまぎれに入り立ち給へるなめり。舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りて覗きたまへば、惱ましけにて添ひ臥したり。たゞかの人御程と見えて、今少しそびやかに、様體などのことさらび、をかしき所は優りてさへ見ゆ。暗ければこまやかに見えねど、程の



○豊岡姫 天照太神  
 ○宮人 天人、舞姫  
 をさして言ふ。  
 ○みづがきの 「少  
 女子が袖振る山のみ  
 づ垣の久しき世より  
 思ひ初めてき」  
 ○誰しも 惟光の娘  
 の心には。  
 ○立ち去り 夕霧は  
 其所を。  
 ○浅黄の 夕霧は六  
 位である事が。  
 ○直衣など 直衣に  
 て参内を許される。  
 ○きびはに 夕霧の  
 さま。  
 ○思したるさま 夕  
 霧をお愛しなる事  
 ○大殿の 惟光の娘  
 ○大納言殿の 按察  
 の娘。  
 ○こ、しう 巨々、  
 大やうなこと。

いとよく思ひ出でらる、様に、心移るとはなけれど、たゞにもあらで、衣の裾を引きならし給ふ。何心もなくあやしと思ふに、

「あめにます豊岡姫の宮人もわが志すしめを忘るな

みづがきの。」と宣ふぞ、うちつけなりける。若うをかしき聲なれど、誰ともえおもひなされず、なまむづかしきに、化粧じ添ふとて騒ぎつる後見ども、近うよりて、人騒がしうなれば、いと口惜しうて立ち去り給ひぬ。浅葱の心やましければ、内裏へ参ることもせず、物憂がり給ふを、五節にことづけて、直衣などさま變れる色ゆるされて参り給ふ。まびはに清らなるものから、まだきにおよすけて、ざれ歩き給ふ。帝よりはじめ奉りて、思したるさまなべてならず、世に珍らしき御おほえなり。

五節のまるる儀式は、いづれともなく、心々に二なくし給へるを、舞姫のかたち、大殿のとな大納言殿のとは勝れたりとめでの、しる。けにいとをかしかねれど、こ、しう美しけなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。物清けに今めきて、そのものとも見ゆまじう、したてたる様體などの、有り難うをかしかねるを、かう譽めらる、なめり。例の舞姫どもよりは、みな少しおとなびつ、けに心ことなる年なり。殿参りたまひて御覽す

るに、昔御目とまり給ひし少女の姿をおほしいづ。辰の日の暮つかたつかはす。御文のうち思ひやるべし。

源 をとめ子も神さびぬらし天津袖ふるき世の友よはひ經ぬれば

年月のつもりを數へて、うち思しける儘のあはれを、え忍び給はぬばかりの、をかしく思ゆるもはかなしや。

五節 かけていへば今日の事とぞ思ほゆる日陰の霜の袖にとけしも

青摺の紙よくとりあへて、まぎらはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうちませ亂れたるも、人のほどにつけてはをかすと御覽す。冠者の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひありき給へど、あたり近くだに寄せず、いとけ、しうもてなしたれば、物つ、ましかほどの心には、歎かしくして止みぬ。容貌はしもいと心につきて、つらき人のなぐさめにも、見るわざしてむやと思ふ。

やがて皆とゞめさせ給ひて、宮仕すべき御氣色ありけれど、この度はまかですせて、近江のは辛崎の祓、津のかみは難波といどみてまか出ぬ。大納言も殊更にまるらすべきよし奏せさせたまふ。左衛門督、その人ならぬを奉りて、咎めありけれど、それもとゞめさせ

○日陰の霜 舞姫はひかげのかげに  
 日陰 墨をかざす  
 ○青摺の紙 青地に  
 織で紋形をおいた紙  
 辰の日は無縫青摺唐  
 衣を著る。  
 ○をかしく 源氏が  
 五節の返事を。  
 ○人の目とまる 惟  
 光の娘に目がつく。  
 ○あたり近くだに  
 惟光の娘が夕霧を。  
 ○け、しう 我が身  
 をきつゆりも。  
 ○容貌はしも 惟光  
 の娘の。  
 ○つらき人 雲井腐  
 ○近江のは 良清の  
 娘。  
 ○津のかみは 惟光  
 の娘は。  
 ○その人ならぬを  
 奉るまじき人の娘を

- さもや 左様に。
- かの人は 夕霧は
- 聞き給ひて 惟光の娘の宮仕するを。
- 物ゆながらずは 人並であつたならば
- 思ふ心 惟光の娘に對して。
- うちそへて 雲井
- 厲の悲しみに添へて
- 兄の 惟光の娘の兄弟梅枝に兵衛尉とある人。
- 五節は 惟光の娘
- ましが お前が。
- 責めて賜へば 夕霧が文を。
- 年の程より 惟光の娘(五節)。
- 二人 兵衛尉と五節と。
- 見るほごに 夕霧の文を見て居る所に
- 父主 父の惟光。
- なぞの文 何の文

給ふ。津のかみは、「典侍あきたるに。」と申させたれば、さもや勞らまじと、大殿もおもひたるを、かの人は聞き給ひて、いと口惜しと思ふ。我が年の程位など、かく物けなからずば、乞ひ見てましものを、思ふ心ありとだに知られでやみなむ事と、わざとの事にはあらねど、うちそへて涙ぐまる、折々あり。兄の童殿上する、常にこの君に参り仕うまつるを、例よりもなつかしう語り給ひて、夕霧「五節はいつか内裏へは参る。」と問ひ給ふ。童「今年とこそは聞き侍れ。」と聞ゆ。夕霧「顔のいと美かりしかば、すゞろにこそ戀しけれ。ましが常に見るらむもうらやましきを、また見せてむや。」と宣へば、童「いかでか然は侍らむ。心に任せてもえ見侍らず、男兄弟とて近くもよせ侍らねば、ましていかでか君達には御覽せさせむ。」と聞ゆ。夕霧「さらば文をだに。」とて賜へり。さきくかやうの事は忘むものをと苦しけれど、責めて賜へばいとほしうもて往ぬ。年の程よりはざれてやありけむ、をかしと見けり。緑の薄様の、好ましきかさねなるに、手はまだいと若けれど、生ひさき見えていとをかしけに、

夕霧 日かけにもしるかりけめやをとめ子があまの羽袖にかけし心は  
二人見るほどに、父主ふと寄り來たり。怖ろしうあきれて、え引き隠さず。惟光「なぞの

- 殿の冠者の君 殿は源氏、冠者の君は夕霧。
- なごりなく 怒りの名残。
- 同じ年 夕霧と。
- 母君に 惟光の妻
- この君達 夕霧。
- 殿の御心おきて 源氏の心がけ。
- 御心とは 自分から。
- かの人は 夕霧。
- 文をだに 雲井厲へ。
- 立ちまさる方 惟光の娘。
- おはせし方 雲井厲の居た所。
- この西の對 花散里。
- 聞えあづけ 夕霧を。
- 容貌の 花散里の

文ぞ。」とて取るに、面赤みて居たり。惟「よからぬわさしけり。」と憎めば、兄逃けていくを呼びよせて、童「誰がぞ。」と問へば、童「殿の冠者の君の、しかく宣ひてたまへる。」といへば、なごりなくうち笑みて、童「いかに美しき君の御ざれ心なり。きんぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかめり。」など譽めて、母君にも見す。惟「この君達の、少し人数に思しぬべからましかば、おほぞうの宮仕よりは奉りてまし。殿の御心おきてを見るに、見そめ給ひてむ人を、御心とは忘れ給ふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし。」などいへど、皆急ぎ立ちにけり。

かの人は、文をだにえやり給はず、立ちまさる方の事し心にかゝりて、程ふるまゝに、わりなく戀しき面かけに、又あひ見でやと思ふより外のことなし。宮の御もとへも、あいなく心憂くて参り給はず。おはせし方、年頃馴れ遊びし所のみ、思ひ出でらるゝことまされば、里さへ憂く覺え給ひつゝ、また籠り居給へり。殿はこの西の對にぞ、聞えあづけ奉り給ひける。童「大宮の御世の残り少なけなるを、おはせすなりなむ後も、かく幼きほどより見ならはして、後見思せ。」と聞え給へば、唯宣ふまゝの御心にて、懐かしう哀れに思ひあつかひ奉り給ふ。ほのかになど見奉るにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、かか

- 向ひて見るかひなからむも 向ひあつて美しくない人も。
- かくて年經 源氏と花散里との中。
- 目馴れ給へる 夕霧は。
- もこより 花散里は。
- 宮はたゞ 夕霧の祖母大宮。
- この宮 夕霧。
- まじること無う 専心に。
- あまたくだり 衣服を幾重ねも。
- 見るも物憂く 夕霧が大宮からの衣服を。
- かのことを 雲井鷹の事。
- 口惜しききはの人 身分の卑しい人。

る人をも、人は思ひ捨てたまはざりけり、など、我が、あながちにつらき人の御容貌を、心にかけて戀しとおもふも味氣なしや、心ばへのかやうに柔和ならむ人をこそあひ思はめと思ひ、又、向ひて見るかひなからむいとほしけなり。かくて年經給ひにけれど、殿のさやうなる御容貌、御心と見給ひて、濱ゆふばかりの隔てさしかくしつゝ、何くれともてなし粉らはし給ふめるも、宜なりけりと、思ふ心のうちぞ恥かしかりける。大宮の容貌こにおはしませど、まだいと清らにおはし、こゝにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れ給へるを、もとより勝れざりける御容貌の、やゝさだ過ぎたる心地して、やせやせに御髪すくななるなどが、かく譏らはしきなりけり。

年の暮には、正月の御装束など、宮はたゞ、この宮一所の御ことを、まじること無う急ぎ給ふ。あまたくだりと清らにしたて給へるを、見るも物憂くのみ覺ゆれば、夕霧「朔日などには、必ずしも内裏へ参るまじう思ひ給ふるに、何にかく急がせ給ふらむ。」と聞え給へば、大宮などてか然もあらむ。老いくづほれたらむ人の様にも、宣ふかな。」と宣へば、夕霧「老いねどくづほれたる心地ぞするや。」と、ひとりごちて、うち涙ぐみて居給へり。かのことを思ふならむと、いと心苦しうて、宮もうち顰み給ひぬ。大宮男は、口惜しききは

- 六位なご 私の事を。
- 暫しの事 六位で居るのは。
- 故大臣 左大臣、葵の上の父、夕霧の祖父。
- 物隔てぬ親 源氏は實の親。
- けしう 事々しう。
- 御前近く 源氏の對の御方 花散里
- 親今一所 母葵の上のこと。
- 疎かに思ふ人 悔る人。
- 思ひ入れぬさま 氣にかけないで。
- 思ふにかなはぬ 夕霧の六位なる事。
- 内の大臣 頭中將
- 生ひさき遠き人 夕霧。

の人だに、心を高うこそつかふなれ。餘りしめやかに、斯くな物し給ひそ。何かかう眺めがちに思ひ入れ給ふべき。ゆゝしう。」と宣ふ。夕霧「何かは、六位など人の侮りはべるめれば、暫しの事とは思ふ給ふれど、内裏へまるるも物憂くてなむ。故大臣おはしまさしかば、戯れにても、人には侮られ侍らざらまし。物隔てぬ親におはすれど、いとけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたり、たやすくも参り馴れ侍らず。東の院にてのみなむ、御前近く侍る。對の御方こそ哀れに物し給へ。親今一所おはしまさしかば、何事を思ひ侍らまし。」とて、涙のおつるを粉らはし給へる氣色、いみじう哀れなるに、宮はいとほろ／＼と泣き給ひて、大宮母に後る、人は、程々につけて、さのみこそ哀れなれど、自ら宿世々々に、人と成りたちぬれば、疎かに思ふ人なきわざなるを、思ひ入れぬさまにてを物し給へ。故大臣の今しばしだに物し給へかし。限りなきかけには、同じ事と頼み聞ゆれど、思ふにかなはぬ事の多かるかな。内の大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、世の人もめでいふなれど、昔に變ることのみ増りゆくに、命長きも怨めしきに、生ひさき遠き人さへ、斯くいさゝかにても、世を思ひしめり給へれば、いとなむ萬恨めしき世なる。」とて、泣きおはします。

- 朔日に 一月一日
- 節會の日 七日の節會。
- いつかしき 殿しい。
- まだしき まだはやい。
- 故宮の 藤原。
- 院にも 朱雀院。
- 青色 麴座。
- 太政大臣 源氏。
- わざの文人 專門の詩人。
- 學生 大學生。
- 式部の司の試み 式部省の試験。
- 大殿の太郎君 夕霧。
- 臆だかき 臆病な
- つながぬ舟に 學生等一人づ、船に乗りて詩をつくるのた
- かう苦しき道 學問の道。

朔日にも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房の大臣と聞えける、古の例になすらへて、白馬ひき、節會の日は、内裏の儀式をうつして、昔の例よりも事そへて、いつかしき御有様なり。二月の二十日餘、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしきほどなれど、三月は故宮の御忌月なり。疾く開けたる櫻の色もいとおもしろければ、院にも御用意殊につくろひ磨かせ給ひ、行幸に仕うまつり給ふ上達部、親王たちよりはじめ、心づかひし給へり。人々皆青色に、櫻がさねを著給ふ。帝は赤色の御衣奉れり。召しありて太政大臣参り給ふ。同じ赤色を著給へれば、いよくひとつものと耀きて見えまがはせ給ふ。人々の御装束用意、常よりことなり。院もいと清らにねびまさらせ給ひて、御さま用意、なまめきたる方にす、ませ給へり。今日はわざとの文人も召さず、たゞその才かしこしと聞えたる學生十人を召す。式部の司の試みの題を擬へて、御題たまふ。大殿の太郎君の試み給ふべき故なめり。臆だかき者どもは、物もおほえず。つながぬ船に乗りて池にはなれ出でて、いと術なけなり。日やうくくんだりて、樂の船ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の山風の響、おもしろく吹き合はせたるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでも交らひ遊びぬべきものと、世の中恨めしう覺え給ひけり。「春鶯囀」舞ふ程に、昔の

花の宴の程思し出でて、院の帝、「又さばかりの事見てむや。」と宣はするにつけて、その世の事哀れに思しつゞけらる。舞ひはつるほどに、大臣、院の御土器参りたまふ。

院の上、  
鶯のさへづる春は昔にてむつれし花のかけぞかはれる

九重をかすみ隔つるすみかにも春とつけくる鶯の聲  
帥の宮ときこえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器まゐり給ふ。

いにしへを吹き傳へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ變らぬ  
あざやかに奏しなし給へる、用意ことにめでたし。取らせ給ひて、

うぐひすの昔を戀ひてさへづるは木傳ふ花の色やあせたる  
と宣はする御有様、こよなく故々しくおはします。これは御わたくし様に、うちくの事

なれば、數多にも流れずやなりにけむ。又書き落してけるにやあらむ。樂所遠くて覺束なければ、御前に御琴ども召す。兵部卿の宮琵琶、内の大臣和琴、箏の御琴院の御前に参りて、琴は例の太政大臣賜はり給ふ。さるいみじき上手の勝れたる御手づかひどもの、盡し給へる音は譬へむ方なし。唱歌の殿上人あまた侍ふ。「安名尊」あそびて、次に、「櫻人。」月

少女

- 帥の宮 發兵部卿
- 今の上 今上陛下
- あざやかに 御代を祝つてめでたく。
- 取らせ給ひて 帝が杯を兵部卿に。
- これは この御歌は。
- 唱歌の殿上人 歌をうたふ役をつとめる殿上人。
- 安名尊 催馬樂、「あな尊、今日の尊さやいにしへも斯くやありけむ、今日の尊さ。」
- 櫻人 催馬樂「櫻人、其の船ちよめ、鳥つ田を、十町つくれる、見て歸りこむや、そよや、明日歸りこむや、そよや。」

○大后の宮 弘徽殿  
 皇后、朱雀の御母。  
 ○渡らせ給ふ 冷泉  
 帝が大后の宮の方に  
 ○大臣も 源氏。  
 ○さだすぎ 大后の  
 年をさつた。  
 ○故宮を 源氏が藤  
 壺の事を。  
 ○昔の御世 桐壺帝  
 の御代。  
 ○さるべき御蔭 桐  
 壺帝、藤壺など。  
 ○またくも 重ね  
 て後に御訪ねしませ  
 う。  
 ○のぞやかならで  
 ゆつくりしなないで  
 ○尚侍の君 臘月夜  
 ○御たうはり 后の  
 御うけになるべき。  
 「たうはり」は「たま  
 はり」の轉。

臘にさし出でてをかしき程に、中島のわたりに、こゝかしこ篝火ども燈して、大御遊びは  
 歎みぬ。

夜更けぬれど、かかる序に、大后の宮おはします方を、よぎて訪らひ聞えさせたまはざ  
 らむも、情なければ、かへさに渡らせ給ふ。大臣も諸共にさぶらひ給ふ。后待ちよろこ  
 び給ひて、御對面あり。いといたうさだすぎ給ひにける御けはひにも、故宮を思ひ出で聞  
 え給ひて、かく長くおはします類もおはしけるものと、口惜しう思はず。大后「今はかく  
 古りぬる齡に、よろづのこと忘れはべりにけるを、いと辱く渡りおはしまいたるにな  
 む、更に昔の御世の事思う出でられ侍る。」と、うち泣き給ふ。冷泉「さるべき御蔭どもにお  
 くれ侍りて後、春のけぢめも思ふ給へわかれぬを、今日なむ慰め侍りぬる。またくも。」  
 と聞え給ふ。大臣もさるべきさまに聞えて、遷「殊更にさぶらひて。」など聞え給ふ。のどや  
 かならで歸らせ給ふひゞきにも、后は、なほ胸うち騒ぎて如何に思し出づらむ。世をたも  
 ち給ふべき御宿世は、けたれぬものにこそと、いにしへを悔いおほす。尚侍の君も、の  
 どやかに思し出づるに、哀れなる事多かり。今も然るべきをり、風の傳にもほのめき給ふ  
 こと絶えざるべし。后はおほやけに奏せさせ給ふ事ある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、

○取りかへさまはし  
 う 后の勢ひのあつ  
 た昔にかへしたいと  
 ○さがなさ ひが  
 たこと。  
 ○くらべ苦しう 御  
 相手になり難く。  
 ○かうぶりえて 五  
 位になつて。  
 ○かの人 雲井廂。  
 ○大臣の 頭中將。  
 ○同じくは 同じ造  
 るなら。  
 ○山里人 明石の上  
 ○中宮の 秋好の。  
 ○式部卿の宮 紫の  
 上の父。  
 ○對の上 紫の上。  
 ○大臣も 源氏も。  
 ○さやうの御いそぎ  
 式部卿五十の賀の  
 準備も。  
 ○年かへりては 源  
 氏三十五歳。

何くれのことに觸れつゝ、御心に叶はぬ時ぞ、命長くてかかる世の末を見ることと、取り  
 かへさまほしう、萬を思しむづかりける。老いもおはする儘に、さがなさも増りて、院  
 もくらべ苦しう堪へがたくぞ、思ひ聞え給ひける。

かくて大學の君、その日の文うつくしう作り給ひて、進士になり給ひぬ。年積れるかし  
 こき子どもを擇らせ給ひしかども、及第の人僅かに三人なむありける。秋の司召に、かう  
 ぶりえて、侍従に成り給ひぬ。かの人御こと、忘る、世なければ、大臣の切にまもり聞  
 え給ふもつらければ、わりなくてなども對面し給はず。御消息ばかり、然りぬべき便りに  
 聞え給ひて、互に心苦しき御中なり。

大殿、靜かなる御住居を、同じくは廣く見所ありて、こゝかしこにて覺束なき山里人な  
 どをも、集へ住ませむの御心にて、六條京極わたりに、中宮の古き宮のほとりを、四町を  
 占めて造らせ給ふ。式部卿の宮、明けむ年ぞ五十になり給ひけるを、御賀の事、對の上お  
 ほし設くるに、大臣もけに過し難き事どもなりと思して、さやうの御いそぎも、同じくは  
 珍らしからむ御家居にてと、いそがせ給ふ。年かへりては、ましてこの御いそぎの事御と  
 しみのこと、樂人舞人のさだめなどを、御心に入れて營み給ふ。經佛法事の日の裝束、

○上は 紫の上。  
 ○東の院 花散里。  
 ○御なからひ 紫の上花散里の。  
 ○世の中にはあまねき御心 世間には廣く惠みをほごす源氏の心。  
 ○このわたり 式部卿の宮に對して。  
 ○つらしみ 源氏が式部卿を。  
 ○取りわきたる 紫の上に對しては。  
 ○ひまかし 五十賀の支度で。  
 ○北の方 式部卿の妻、紫の上の繼母。  
 ○心ゆかず 不快に。  
 ○ものし 思々しく。  
 ○女御の 我が娘王女御の。  
 ○思ひしみ 思ひこみ。

祿どもなどをなむ、上は急がせ給ひける。東の院にも、分けてし給ふことどもあり。御なからひ、ましていとみやびかに聞えかはしてなむ過し給ひける。世の中響きゆする御いそぎなるを、式部卿の宮にも聞召して、年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情なく、事に觸れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、憂はしきことのみ多かるに、つらしと思ひ置き給ふことこそはありけめと、いとほしくも辛くもおほしけるを、かくあまたか、づらひ給へる人々多かる中に、取りわきたる御思ひ勝れて、世に心にくくめでたきことに、思ひかしづかれ給へる御宿世をぞ、我が御家までは勻ひこねど、面目におほすに、又かく此の世にあまるまで、ひまかしとなみ給ふは、覺えぬ齡の末の榮えにもあるべきかなと、よろこび給ふを、北の方は、心ゆかずものしとのみ思したり。女御の御まじらひの程などにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよく怨めしと思ひし給へるなるべし。

八月にぞ、六條の院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院の住み給ふ對の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせ給へり。もとありける池山をも、便なき所

○御方々 住む方々  
 ○南の東 巽、源氏の方即ち紫の上の住む所。紫の上春を好むが故に此所は春の草木を多く植ゑたのた。後紫の上を春の御前とも云ふ。  
 ○むらく 所々に  
 ○中宮の 秋好、秋が好きだから秋の景を主とす。  
 ○むとくに 全く形なしに。  
 ○北の東 花散里の住む方、後夏の御方といふ。  
 ○昔おほゆる 古今「五月待つ花橘の香をかほは昔の人の袖の香ぞする。」  
 ○西の町 明石の上の住所、冬の御方といふ。

なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、様々に、御方々の御願ひの心ばへを造らせ給へり。南の東は山高く、春の花の木、數を盡して植ゑ、池の様おもしろく勝れて、御前近き前栽に、五葉、紅梅、櫻、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をば、むらく仄かに交ぜたり。中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすまし、遣水の音優るべき岩をたて加へ、瀧おとして、秋の野を遙かに作りたる、その頃にあひて、盛りに咲き亂れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり。北の東は、涼しけなる泉ありて、夏のかげによれり。御前近き前栽、吳竹、下風涼しかるべく、木だかき森の様なる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花垣根ことさらにしわたして、昔おほゆる花橘、瞿麥、薔薇、木丹など様の、花のくさくさを植ゑて、春秋の木草、その中に打交ぜたり。東面は、分けて馬場の殿づくり、埒結ひて、五月の御遊所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて、むかひに御廢して、世になき上馬どもをと、のへ立てさせ給へり。西の町は、北面築きわきて、御藏町なり。隔ての垣にから竹うゑて松の木しゆく、雪を玩ばむ便りによせたり。冬の初め、朝霜むすぶべき菊の籬、われはがほなる柞原、をさく

- 彼岸 秋の彼岸。
- 一度に 皆一度に六條院に移轉し。
- おいらかに 釋やかに。
- その夜添ひて 紫の上と共に。
- この頃にあらねぞ 今は秋の彼岸であるから。
- 御車十五 紫の上移轉のさま。
- おごろくしう 仰山に。
- 今一方 花散里。
- 侍従の君 夕霧。
- そなたは 花散里の方は。
- こまけ こわけ。
- 中宮まで 六條院に移る。
- 宮の御前 秋好の此方に 秋好から紫の上の方に。

名も知らぬ深山木どもの、木深きなどをうつし植ゑたり。彼岸のころほひ渡り給ふ。一度にと定めさせ給ひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮は少し延べさせ給ふ。例のおいらかに氣色ばまぬ花散里ぞ、その夜添ひて移ろひ給ふ。春の御しつらひは、この頃にあらねどいと心殊なり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限りを擇らせ給へり。こちたき程にはあらず。世のそしりもやと省き給へれば、何事もおどろくしう厳しき事はなし。今一方の御氣色も、をさくおとし給はで、侍従の君添ひて、そなたはもてかしづき給へば、けに斯うもあるべき事なりけりと見えたり。女房の曹司町ども、宛々のこまけぞ、大方の事よりもめでたかりける。五六日過ぎて、中宮までさせ給ふ。この御儀式はた、さはいへどいと所せし。御幸ひの勝れ給へりけるをばさるものにて、御有様の心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれ給へる事勝れてなむおはしませける。この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、氣近くをかしき間にしなし給へり。九月になれば、紅葉むらく色づきて、宮の御前も言はずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、いろくの花紅葉をこきませて、此方に奉らせ給へり。大きやかなる童の、濃き柏、紫苑の織物かさ

- いたうなれて 著なれたのを著て。
- 渡りてまるる 秋好の使者の童が。
- 然る所に 使の童は。
- 若き人々 紫の上の方の侍女ども。
- こまかに見れば よく見るこ。
- えならぬつくりごさ 精巧な作り物。
- 言ひくたさむは 誇るのほ。
- 立田姫 秋の女神
- さししぞきて 退いて。
- 花の陰に 春の花の。
- 聞え通はし 紫の上と秋好等が。
- 大堰の御方 明石の上。
- 數ならぬ人 明石

ねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたうなれて、廊渡殿の反橋を渡りてまるる。うるはしき儀式なれど、童のをかしきをなむ、え思し捨てざりける。然る所に侍ひなれたれば、もてなし有様外には似ず、好ましうをかし。御消息には、秋好心から春まつ園はわがやどの紅葉を風の傳にだに見よ。若き人々、御使もてはやす様どもをかし。御かへりは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、紫風に散る紅葉はかろし春の色を岩ねの松にかけてこそ見ぬ。この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。斯くとりあへず思ひよりのたまへる、故々しさなどを、をかしく御覽す。御前なる人々もめであへり。大臣、源「この紅葉の御消息、いとねたけなめり。春の花盛りに、この御いらへは聞えたまへ。この頃紅葉を言ひくたさむは、立田姫の思はむこともあるを、さししぞきて、花の陰に立ち隠れてこそ、強きことは出で來め。」と聞え給ふも、いと若やかにつきせぬ御有様の、見所おほかるに、いと思ふやうなる御住居にて、聞え通はし給ふ。大堰の御方は、かう方々の御うつろひ定まりて、數ならぬ人は、いつとなく紛らはさむとおほして、神無月になむ

○劣らずして 紫の上や花散里に。

渡り給ひける。御しつらひ、ことの有様劣らずして渡し奉りたまふ。姫君の御爲をおほせば、大方の作法も、差別こよなからず、いと物々しくもてなさせ給へり。

○源氏三十四歳の九月から三十五歳の暮まで。

○あらし 夕顔が

○右近 夕顔の侍女

○ふる人の數に 故

參の女房並に。

○對の上 紫の方へ

○人々 侍女達。

○かいひそめ 物靜かな女。

○心のうち 右近の

○故君 夕顔。

○あぶさす 見棄て

ず世話をしてやる

○御殿うつり 六條

院へ女を集めた事。

○交らひ 夕顔も。

○若君 夕顔と頭中

將の間に生まれた姫

君。

○わが名漏らすな

古今一犬上のまこの

山なるいさや川いさ

と答へて我が名漏ら

すな。源が右近に夕

顔の侍女であつたま

云ふ事を人に知らせ

るなご。

○尋ねても 若君を

玉

髪

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れ給はず、心々なる人の有様どもを見給ひ重ぬるにつけても、あらしかばと、哀れに口惜しくのみおほし出づ。右近は何の人數ならねど、猶其のかたみと見給ひて、らうたきものに思したれば、ふる人の數に仕う奉り馴れたり。須磨の御うつろひの程に、對の上の御方に、皆人々聞えわたし給ひし程より、そなたに侍ふ。心よくかいひそめたるものに、女君も思したれど、心のうちには、故君ものし給はましかば、明石の御方許りの覺えには劣り給はざらまし。さしも深き御志なかりけるをだに、おとしあぶさす、取りした、め給ふ御心ながさなりければ、まいて、やんごとなき列にこそあらざらめ、この御殿うつりの數の中には交らひ給ひなましと思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。かの西の京にとまりし若君をだに、行方も知らず、ひとへに物を思ひつゝみ、又今更にかひなき事によりて、「わが名漏らすな。」と、口がため給ひしを、憚り聞えて、尋ねても音づれ聞えざりしほどに、その御乳母の夫、少貳になりて往きけれ



- 下り 筑紫へ。
- 若君 玉璽と呼ぶ
- 母君 夕顔の。
- 尋ね聞え 乳母が
- 遙かなる程に 遠い國へ。
- 父君 頭中將。
- 尋ね問ひ 頭中將が夕顔の行方を。
- 見なれ 玉璽が父君を見知らないのに
- 知りながら 頭中將が玉璽の所在を知った上は。
- 己がじ、家内の者と相談して。
- 漕ぎ出づる 舟に乗って筑紫へ出發する。
- 女ごも 少貳の。
- 心若う 乳母の心
- 斯かる道 此の美しい景色を夕顔に見せたい。

ば、下りにけり。

かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。母君の御行方を知らむと、萬の神佛に申して、晝夜泣き戀ひて、さるべき所々を尋ね聞えけれど、遂にえ聞き出でず。さらばいかゞはせむ、若君をだにこそは、御かたみに見奉らめ、怪しき身に添へたてまつりて、遙かなる程におはせむ事の悲しきことなどを、父君にほのめかさむと思ひけれど、さるべき便りもなきうちに、「母君のおはしけむ方も知らず。尋ね問ひ給はば、いかゞ聞えむ。まだよくも見なれ給はぬに、幼き人をとゞめたてまつり給はむも、後めたかるべし。知りながらはた率て下りねと、許し給ふべきにもあらず。」など、己がじ、語らひあはせて、いと美しう、たゞ今から氣高く清らなる御様を、殊なるしつらひなき船にのせて、漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむ覺えける。幼き心地に、母君を忘れず、折々に、玉璽の御許へ行くか。」と、問ひ給ふにつけて、涙絶ゆる時なく、女ごもも思ひこがる、を、船道ゆゑ、しとかつは諫めけり。おもしろき所々を見つ、心若うおはせしものを、斯かる道をも見せ奉るものもがな、おはせましかば、我等は下らざらまじと、京の方思ひやらるゝに、かへる波も羨ましく心ほそきに、船子どもの荒々しき聲にて、「うらがなくも遠く來にける

かな。」と、謠ふを聞くまゝに、二人さし向ひて泣きけり。

船人もたれを戀ふとか大島のうらがなしけに聲のきこゆる

來し方も行方も知らぬ沖に出でてあはれづくに君を戀ふらむ

ひなの別れに、おのがじ、心をやりていひける。金の御崎を過ぎて、「われは忘れず。」など、世ともの言ぐさになりて、彼處に到り著きては、まいて遙かなる程を思ひやりて、戀ひ泣きて、この君をかしづきものにて明し暮す。夢などに、いとたまさか見え給ふ時などもあり。同じさまなる女など、添ひ給うて見え給へば、なごり心地悪しく惱みなどしければ、なほ世になくなり給ひけるなめりと思ひなるも、いみじくのみなむ。

少貳任はてて上りなむとするに、遙けき程に、異なる勢ひなき人は、たゆたひつゝ、すがすがしくも出で立たぬ程に、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十歳ばかりにもなり給へるさまの、ゆゑ、しきまでをかしけなるを見奉りて、少貳我さへうち捨て奉りて、いかなるさまにはふれ給はむとすらむ。怪しき所におひ出で給ふも、辱く思ひ聞ゆれど、いつしかも京に率て奉りて、さるべき人々にも知らせ奉りて、御宿世に任せて見奉らむにも、都は廣き所なれば、いと心安かるべしと思ひ急ぎつるを、此處ながら命さへ堪へ

- 二人 乳母と娘と
- 大島の 浦と心裏に云ひかけた枕詞。
- ひなの別れ 田舎へ去り行く道すがら
- 心をやり 各心ゆくまで歌を讀んだ。
- われは忘れず 萬葉「千早振金の御崎を過ぐれども我は忘れずしがのすめ神。」夕顔の事を忘れない
- 世ともの 常々の。
- 彼處 筑紫へ。
- この君 玉璽。
- 見え 夕顔の姿が
- 同じさま 六條御息所等の生霊をさす
- なごり 惡夢にうなされた名残で。
- 世になく 夕顔が
- 異なる勢ひなき 大して財産もない。
- たゆたひ 費用のかゝるのを恐れて。
- 重き病 大貳が。
- はふれ 放浪する
- 怪しき所 片田舎
- 此處ながら 此の田舎で死ぬるのが残念。

○我が身の孝 自分の死後の法事は。  
 ○その人の御子 玉鬘は頭中將の娘は  
 ○館の人 家内の者  
 ○京の出立 乳母は上京の用意をするが  
 ○聞きついつ、玉鬘の事を聞き傳へて  
 ○消息がる 戀文をやりたがる者が。  
 ○誰もく 侍女達  
 ○容貌など 玉鬘は器量は相當によいが  
 ○我が世の 一生自分の傍に置く。  
 ○らうたしと 玉鬘の幼時には頭中將が可愛がつてゐたから  
 ○所につけたる 筑紫で縁附き嫁取つて

すなりぬる事。」と、後めたがる。男子三人あるに、少貳たゞこの姫君京に率て奉るべき事を思へ。我が身の孝をば、な思ひそ。」となむ言ひ置きける。その人の御子とは、館の人に知らせず、たゞ孫のかしづくべき故あるとぞ言ひなしかれば、人に見せず限りなくかきつき聞ゆる程に、俄に亡せぬれば、あはれに心細くて、たゞ京の出立をすれど、この少貳の中悪しかりける國の人多くなどして、とざまかうざまに懼ぢ憚りて、我にもあらで年を過すに、この君ねび整ひ給ふまゝに、母君よりも勝りて清らに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高く美しけなり。心ばせおほどかにあらまほしう物し給ふ。聞きついつ、好いたる田舎人ども、心かけ消息がるいと多かり。ゆゝしくめざましく覺ゆれば、誰もく聞き入れず。乳母「容貌などはさても在りぬべけれど、いみじかたはのあれば、人にも見せで尼になして、我が世の限りは持たらむ」と言ひ散らしたれば、「故少貳の孫は、かたはなむあなる、あたらしものを。」といふ。聞くもゆゝしく、乳母「いかさまにして、都に率て奉りて、父大臣に知らせ奉らむ。いとよなき程を、いとらうたしと思ひ聞え給へりしかば、さりととも疎かには思ひ捨て聞え給はじ。」など言ひ歎く。佛神に願を立ててなむ念じける。女どもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにけり。心のうちにこそ

○急ぎ 乳母は上京を急いでゐるが。  
 ○物おほし 玉鬘は物心つくにつれて。  
 ○年三 年に三度正五九月の長精進。  
 ○大夫の監 五位で六位相當の役なる太宰大監になつた者。  
 ○見隠して 片輪に氣付かぬ風をして世話をしよう。  
 ○この男子 大貳の息子達を。  
 ○思ふ様に 自分の望みを叶へてくれたなら萬事心を合はせて尻押をしてやらう  
 ○おもむき 二男三男の二人が同心した  
 ○似けなく つりあはぬ縁で玉鬘の爲にお氣の毒と思つたが  
 ○頼もしき人 大夫の監は。  
 ○よき人 貴族の胤

急ぎ思へど、京の事はいや遠ざかるやうに隔たりゆく。物おほし知るまゝに、世をいと憂きものにおほして、年三などし給ふ。二十ばかりになり給ふまゝに、生ひ整ほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、肥前の國とぞいひける。そのわたりにもいさゝか由ある人は、まづこの少貳の孫のありさまを聞きつたへて、なほ絶えず音づれ來るも、いといみじう耳かしがましきまでなむ。  
 大夫の監とて、肥後の國に族廣くて、彼處につけてはおほえあり、勢ひ厳しき兵ありけり。むくつけき心の中に、いさゝか好きたる心のまじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、監「いみじかたはありとも、我は見隠して持たらむ。」といと懇に言ひかゝるを、いとむくつけく思ひて、「いかで、かかる事を聞かで、尼になりなむとす。」と言はせたりければ、いよく危がりて、おしてこの國に越え來ぬ。この男子どもを呼びとりて語らふ事は、監「思ふ様になりなば、同じ心に勢ひをかはずべき事。」など語らふに、二人はおもむきにけり。二人しばしこそ似けなく哀れと思ひ聞えけれ、おのおの我が身のよるべと頼まむに、いと頼もしき人なり。これに悪しくせられては、この近き世界には廻らひなむや。よき人の御筋といふとも、親に數まへられ奉らず、世に知られ

○然るべき運命で  
 ○怒り 大夫の監が  
 ○中の兄 長男。  
 ○たいくしく 玉  
 鬘を監に取持つのは  
 甚だ失禮で勿體ない  
 ○母君 夕顔。  
 ○人なみ 玉鬘を。  
 ○さるもの あんな  
 男と縁組をなさるは  
 ○我は 大夫の監は  
 ○香に 紙に香を付  
 け。  
 ○たみ 詠りがある  
 ○自らも 手紙許り  
 でなく自身訪ねて來  
 る。  
 ○思ひなし 氣のせ  
 るか厭らしく。  
 ○色あひ 血色。  
 ○夜に 夜に紛れて  
 忍び來るのが當然。  
 ○様かへ 夕暮に來  
 るは變な事だ。  
 ○あやしかりけり  
 古今「何時までも戀  
 しからずはあらねど  
 も秋の夕はあやしかり  
 けり。」  
 ○心を破らじ 監の  
 機嫌を悪くすまいと  
 ○祖母 乳母。

では何のかひかはあらむ。この人のかく懇に思ひ聞え給へるこそ、今は御幸ひなれ。然るべきにてこそは、世界にもおはしましけめ。逃げ隠れ給ふとも、何のたけき事かはあらむ。負けじだましひに怒りなば、爲ぬ事どもも爲てむ。」といひ威せば、いとみじと聞きて、中の兄なる豊後介なむ、豊後「なほいとたいくしくあたらしき事なり。故少貳の宣ひし事もあり。とかく京に上げ奉りてむ。」といふ。女どもも泣き惑ひて、母君のかひなくてさすらひ給ひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみくくにて見奉らむとこそ思ふに、さるものの中に交り給ひなむことと、思ひ歎くをも知らず、我はいとおほえ高き身と思ひて、文など書きておこす。手などきたなけなう書きて、唐の色紙かうばしき香に入れしめつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとだみたりける。自らもこの家の次郎を語らひとりて、うちつれて來たり。年三十ばかりなる男の、丈高くものくしくふとりて、穢けなけれど、思ひなし疎ましく、荒らかなるふるまひ、見るもゆしくおほゆ。色あひ心地よけに、聲いたう枯れてさへづり居たり。懸想人は夜に隠れたるをこそ、よばひとはいひけれ、様かへたる春の夕暮なり。秋ならねども、「あやしかりけり。」と見ゆ。心を破らじとて、祖母殿出であふ。馬故少貳のいと情ひ、きらくしく物し給ひしを、いかでかあ

○いかうに 一向に  
 ひたすらに。  
 ○志を 思ひ立つて  
 今日懸々お訪ねした  
 ○筋ごに 貴い方  
 の御血筋。  
 ○某らが 私共が。  
 ○私の君 内々の主  
 ○おこしも 貴女が  
 不承知なのは私が他  
 に瀬山女を持つてゐ  
 る故。  
 ○如何は 私は決し  
 て不承知ではない。  
 ○宿世つたなき 運  
 悪く玉鬘には氣のひ  
 げる所がある。  
 ○いかでか 夫を持  
 つ事は出来ぬと。  
 ○某は 私が直して  
 上げませう。  
 ○その日 何日頃玉  
 鬘を引取らうといふ  
 ○季 三月は春の果  
 て田舎では嫁娶を  
 思ふたものであらう  
 ○下りて 歸り際に  
 ○君にもし 神かけ  
 て君の心には違はぬ

ひ語らひ申さむと思ひ給へしかども、さる志をも見せ聞えず侍りし程に、いと悲しくて隠れ給ひしを、そのかはりに、いかうに仕う奉るべくなむ。志をはけまして、今日は、いとひたぶるに、強ひてさぶらひつる。このおはしますらむ女君、筋ごに承れば、いとかたじけなし。たゞ某らが、私の君と思ひ申して、頂きになむ捧げ奉るべき。おとしも瀬々におはしけなることは、善からぬ女ども、あまた相知りて侍るを、聞召し疎むなり。さりとて、其奴ばらを、齊しなみにはし侍りなむや。我が君をば、後の位におとし奉らじものをや。」など、いとよけに言ひつゞく。乳母「如何は。斯く宣ふを、いと幸ひありと思ひ給ふるを、宿世つたなき人にや侍らむ、思ひ憚る事侍りて、いかでか人に御覽せられむと、人知れず歎き侍るめれば、心苦しう見給へ煩ひぬる。」といふ。馬更におほし憚りそ。天下に目つづれ、足をれ給へりとも、某は仕うまつり止めてむ。國のうちの神佛は、己になむ靡き給へる。」など誇り居たり。その日ばかりといふに、この月は季の果てなりなど、田舎びたることを言ひのがる。下りて行くきはに、歌よままほしかりければ、や、久しう思ひめぐらして、

「君にもし心たがはば松浦なるかみの神をかけて誓はむ」

○仕うまつりたり  
よく出来た。  
○我にも 乳母は心  
が取亂れて。

○年を経て 私の年  
來の希望が外れて監  
に玉鬘を取られたな  
ら神を恨めしく思ふ  
○ゆくりか 不意に  
○この人の 玉鬘の  
片輪故監に嫌はれる  
のをつらく思つて。  
○神かけて 神に祈  
る意味を言ひそこな  
ふ。

○堪へず 作られぬ  
○怖ろしく 乳母が  
○同じ心 自分が。  
○あたまれ 敬視せ  
られては。

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひ給ふる。」と、うち笑みたるも、世づかすうひくしや。我にもあらねば、返すべくも思はねど、女どもに詠ますれど、樂まろは、まして物も覺えず。」とて居たれば、いと久しきに思ひ煩ひて、うち思ひけるまゝに、

乳母  
年を経ていのる心のたがひなばかみの神をつらしとや見む

とわな、かし出でたるを、監待てや、こはいかに仰せらるゝ。」と、ゆくりかに寄り來たるけはひに、おびえて、おとゞ色もなくなりぬ。女たちは、さはいへど心強く笑ひて、樂この人の様ごとに物し給ふを、ひき違へ侍らば、つらく思はれむを、猶ほけくしき人の、神かけてきこえひがめ給ふなめりや。」と解き聞かす。監「おい、然りく。」とうなづきて、監をかしき御口つきかな。某ら田舎びたりといふ名こそ侍れ、口惜しき民には侍らず。都の人とても何ばかりかあらむ。皆知りて侍り。な思しあなづりそ。」とて、又詠まむと思へれども、堪へずやありけむ、往ぬめり。

次郎が語らひとられたるも、いと怖ろしく心憂くて、この豊後介をせむれば、豊後「いか

○思ひ構へ 一心に  
用意して上京する。  
○よるべ 夫。

○兵部 玉鬘の侍女  
○日取り 日を定め  
て玉鬘を迎へに來る  
○類廣く 子が多く  
○年経つる 住みな  
れた所だからと云つ  
ても別に離れ惜い事  
も。  
○渚 景色のよい所

○追ひ來なむ 監が  
○思ふ方の 順風。

くなむあるべき。なか／＼なる目をや見む。」と思ひ煩ひにたれど、姫君の人知れず思いたる様のいと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈み給へる、理と覺ゆれば、いみじき事を思ひ構へて出で立つ。妹たちも、年頃經ぬるよるべを捨てて、この御供に出で立つ。あてきといひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて夜逃げ出でて船に乗りける。大夫の監は、肥後に歸りいきて、四月の二十日の程に日取りて來むとする程に、かくて逃ぐるなりけり。姊おもとは、類廣くなりてえ出で立たず。互にわかれ惜しみて、あひ見むことのかたきを思ふに、年経つる故郷とて、殊に見捨てがたきこともなし。たゞ松浦の宮の前の渚と、かの姊おもとの別るゝをなむ、願みせられて、悲しかりける。

兵部  
浮島を漕ぎ離れても行く方やいづくともりと知らずもあるかな  
玉鬘  
行くさきも見えぬ波路に船出して風にまかする身こそ浮きたれ

いと跡はかなき心地して、うつぶし伏したまへり。かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出でつたへば、まけじ魂にて追ひ來なむと思ふに、心も惑ひて、早船といひて、様異になむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走りのほりぬ。ひゞきの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の船にやあらむ、ちひさき船の、飛ぶ様にて來る。」などいふ者あり。海

○ひたぶる 怖ろしい海賊ではなくて寧ろ監の追手か。  
 ○憂きことに 自分の胸騒ぎの音には響の瀬の潮鳴も及ばぬ  
 ○川尻 攝津淀川尻  
 ○唐泊 備前。  
 ○打捨て 妻子を。  
 ○我を悪しと 大夫の監が自分を憎んで残つてゐる自分の妻子を追ひ拂ふ。  
 ○顧みせで 後々の事も思はず一圖に。  
 ○心のごまり 氣が落ち著いて。  
 ○胡の地の 白氏文集撰戎人の詩「涼源郷井不<sub>レ</sub>得見、胡地妻兒<sub>レ</sub>盡棄捐。漢人胡國で妻子を儲け後漢土に引上<sub>レ</sub>ける時の詩  
 ○従ひ來つる人 夫かへる方。京都。  
 ○一所 玉璽。  
 ○思ひめぐらす 何の分別もつかぬ。  
 ○この人 玉璽。  
 ○入りぬ 京都へ。

賊のひたぶるならむよりも、かの怖ろしき人の追ひ來るにやと思ふに、せむ方なし。  
 玉璽 憂きことに胸のみ騒ぐひゞきにはひゞきの灘も名のみなりけり  
 川尻といふ所近づきぬといふにぞ、少し息出づる心地する。例の船子ども「唐泊より川尻おすほどは。」と、謠ふ聲の情なきもあはれに聞ゆ。豊後介、哀れに懐かしく謠ひすさびて、豊後「いとかなしき妻子も忘れぬ。」とて、思へばけにぞ皆打捨ててける、いかゞなりぬらむ、はかゞしき身のたすけと思ふ郎等どもは、皆率て來にけり。我を悪しと思ひて追ひまどはして、如何しなすらむと思ふに、心をさなくも顧みせで、出でにけるかなと、少し心のどまりてぞ、淺ましき事を思ひ續くるに、心弱く打泣かれぬ。「胡の地の妻兒をば空しくすてくつ。」と誦するを、兵部の君聞きて、けにあやしのわざや、年頃従ひ來つる人の心にも、俄にたがひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむと、様々思ひつゞけらる。かへる方とて、その所と行き著くべき故郷もなし、知れる人と言ひ寄るべきたのもしき人も覺えず、たゞ一所の御爲により、許多の年月住みなれつる世界を放れて、浮べる波風に漂ひて、思ひめぐらす方なし、この人をも、いかにしなし奉らむとするぞと、あきれて覺ゆれど、如何はせむとて、急ぎ入りぬ。

○その宿りを 玉璽の宿所をきめ置いて  
 ○都のうちと 九條は都の内でも場末で  
 ○市女 物賣女。  
 ○類に觸れて 縁を求めて。  
 ○母おとゞ 乳母。  
 ○この身は 私だけは大丈夫です。  
 ○人ひまりの 玉璽の爲に身を棄てるのは苦しくない。  
 ○若君 玉璽を監に縁付ける事は出來ぬ  
 ○八幡 男山八幡宮  
 ○五師 八幡宮付の五人の法師。  
 ○まうでさせ 玉璽を八幡へ參詣させる  
 ○長谷 長谷の觀音

九條に、昔知れりける人の残りたりけるを訪らひ出でて、その宿りをしめおきて、都のうちといへども、はかゞしき人の住みたるわたりにもあらず、怪しき市女商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつゝ、秋にもなり行くまゝに、來し方行くさき悲しきこと多かり。豊後介といふたのもし人も、たゞ水鳥の陸に惑へる心地して、徒然にあらはぬ有様のたづきなきを思ふに、歸らむにもはしたなく、心をさなく出で立ちにけるを思ふに、従ひ來たりし者共も、類に觸れて逃げ去り、本の國に歸り散りぬ。住みつくべき様もなきを、母おとゞ且暮歎きいとほしがれば、豊後「何か、この身はいとやすく侍り。人ひとりの御身にかへ奉りて、いづちもく罷り失せなむに咎あるまじ。我等いみじき勢ひになりても、若君をさるものの中にはふらかし奉りては、何心地かせまし。」と語り慰めて、豊後「神佛こそは、さるべき方にも導き奉り給はめ。近き程に、八幡の宮と申すは、彼處にても參り祈り申し給ひし、松浦箱崎同じ社なり。かの國を離れ給ふとて、多くの願立て申し給ひき。今都にかへりて、斯くなむ御驗を得てまかり上りたると、早く申し給へ。」とて、八幡にまうでさせ奉る。そのわたり知れる人にいひ尋ねて、五師とて、早く親の語らひし大徳の残れるを呼びとりて、まうでさせ奉る。豊後「打次ぎては、佛の御中には、長谷なむ、日

- 年經給ひ 玉鬘は年來観音を信じた故
- 徒歩より 信心の深い心を表はして
- 心地に 玉鬘の
- 我が親 夕顔
- おはすらむ所 ありの世へ
- ありけむさま 母の顔も覚えぬ故
- ごりかへし 今更の様に悲しく思ふ
- 巳の時 午前十時
- つくろひ 療治
- 介 豊後介
- ひすまし 廂の掃除を司る賤しい女
- おほみあかし 観音へ奉る燈明
- 家あるじ 宿の主
- 人やざし 他人を宿さうとしたのに

の本の中には、あらたなる験顯はし給ふと、唐土にだに聞えあなる。まして我が國のうち  
にこそ、遠き國のさかひとても、年經給ひつれば、若君をばまして惠み給ひてむ。」とて、  
出<sup>だ</sup>し奉る。殊更に徒歩<sup>ちほ</sup>よりと定めたり。ならばぬ心地に、いとわびしく苦しけれど、人の  
いふまゝに、物も覚えで歩み給ふ。いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ、我  
が親世<sup>おやよ</sup>になくなり給へりとも、我を哀れとおほさば、おはすらむ所にさそひ給へ、もし世  
におはせば、御顔<sup>おんかほ</sup>見せ給へと、佛を念じつ、ありけむさまをだに覚えねば、たゞ親おは  
せましかばとばかりの悲しさを、歎きわたり給へるに、斯くさしあたりて、身のわりなき  
まゝに、とりかへしいみじく覺えつ、辛うじて、椿市<sup>つばいり</sup>といふ所に、四日といふ巳の時ば  
かりに、生ける心地もせで往き著き給へり。

歩むともなく、とかくつくろひたれど、足のうら動かれずわびしければ、せむ方なくて  
休みたまふ。このたのもし人なる介、弓矢持たる人二人、さては下なる者、童<sup>わらわ</sup>など三四  
人、女ばらある限り三人、つほ装束して、ひすましめくもの、ふるき下種女<sup>ひさなふたり</sup>二人ばかりと  
ぞある。いとかすかに忍びたり。おほみあかしの事など、此處<sup>こゝ</sup>にてし加へなどする程に日  
暮れぬ。家あるじの法師、「人やどし奉らむとする所に、何人の物し給ふぞ。怪しき女ども

- 人々 他の客人が
- 宿さまほしく 此の後に来た客人を
- 人々 玉鬘一行の
- かたへは 一部の人は室の隅によつて客人を此の室に通す
- 軟障 幕の類
- この来る人 後に来た客人も身分の高い人ではないらしい
- さるは 此の後に来た客人は
- 右近 夕顔の侍女今は源に仕へて居る
- 例ならひ 徒歩は
- 参りもの 食物を
- 御前に 玉鬘に
- 御臺なご 御膳も調はずしてお氣の毒
- 我がなみの 自分より以上の貴人
- 思ひて 右近が
- ふさり 豊後介が
- 三條 侍女の名
- 故御方 故夕顔に

の、心に任せて。」とむづかるを、めざましく聞く程に、けに人々來ぬ。これも徒歩<sup>ちほ</sup>よりな  
めり。よろしき女二人、下人<sup>しもびと</sup>どもぞ、男女<sup>をとこをんな</sup>かず多かめる。馬四つ五つ牽<sup>ひ</sup>かせて、いみじ  
く忍びやつしたれど、清けなる男どももあり。法師は、せめて此處<sup>こゝ</sup>に宿さまほしくし  
て、頭搔<sup>かし</sup>きありく。いとほしけれど、又宿<sup>やど</sup>りかへむも様あしく、煩はしければ、人々は奥  
に入り、外<sup>ほか</sup>に隠<sup>かく</sup>しなどして、かたへは片つ方<sup>かた</sup>によりぬ。軟障<sup>せじやう</sup>などひき隔てておはします。  
この来る人も恥かしけもなし。いたうかいひそめて、互<sup>かたみ</sup>に心づかひしたり。さるは、かの  
夜と共に戀ひ泣く右近<sup>うこん</sup>なりけり。年月に添へて、はしたなき交<sup>まじ</sup>らひの、つきなくなり行く  
身を思ひ惱みて、この御寺<sup>みでら</sup>になむ度々<sup>たびくまう</sup>詣<sup>ま</sup>でける。例ならひにければ、かやすく構へたりけ  
れど、徒歩<sup>ちほ</sup>より歩み堪<sup>た</sup>へがたくて、寄り臥<sup>ふ</sup>したるに、この豊後介<sup>ぶごのすけ</sup>、鄰<sup>となり</sup>の軟障<sup>せじやう</sup>のもとに寄り  
來て、まるりものなるべし、折敷手<sup>せしき</sup>づから取りて、豊後<sup>ぶご</sup>「これは御前<sup>おんまへ</sup>に參らせ給へ。御臺<sup>おんたい</sup>な  
どうちあはで、いとかたはらいたしや。」といふを聞くに、我がなみの人にはあらじと思ひ  
て、物の間<sup>はざま</sup>より覗<sup>のぞ</sup>けば、此の男の顔見し心地す。誰とはえ覺えず。いと若かりしほどを見  
しに、ふとり黒みてやつれたれば、多くの年經<sup>ねい</sup>たる目には、ふとしも見わかぬなりけり。  
豊後<sup>ぶご</sup>「三條<sup>さんじょう</sup>こゝに召す。」と呼びよする女<sup>をんな</sup>を見れば、又見<sup>また</sup>し人<sup>ひと</sup>なり。故御方<sup>こおんかた</sup>に、下人<sup>しもびと</sup>なれど、

○この女に 三條に  
 ○兵藤太 豐後介の  
 もとの名。  
 ○中隔てなる 右近  
 玉鬘の間に居る。  
 ○覺えず 此處で人  
 に呼ばれるとは意外  
 ○掻練 網を落した  
 光澤のない著物。  
 ○我が歸も 自分が  
 年を取った事も。  
 ○さし覗け 私の顔  
 をよく御覽なさい。  
 ○上は 夕顔は。  
 ○若き者 三條の未  
 だ若い時分を。  
 ○おまは 乳母は  
 ○君の 夕顔の。  
 ○あへなくも 夕顔  
 のはかない死を思へ  
 は今更返らぬ事を言  
 つても仕方がないし  
 又口に出して言ふの  
 も思ふしいので右近  
 は三條に夕顔の事を  
 語らない。

久しく仕う奉りなれて、かの隠れ給へりし御住處まで在りしものなりけりと見なして、い  
 みじく夢のやうなり。主とおほしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくもかまへず。思ひ  
 わびて、この女に問はむ、兵藤太といひし人も、これにこそあらめ、姫君のおはするにや  
 と思ひ寄るに、いと心もとなくて、この中隔てなる三條をよばすれど、食物に心入れて、  
 とみにも來ぬ、いとにくしと覺ゆるもうちつけなりや。辛うじて來て、三條覺えずこそ侍  
 れ。筑紫の國に、二十年ばかり經にたる下種の身を、知らせ給ふべき京人よ。人たがひに  
 や侍らむ。」とて寄り來たり。田舎びたる掻練にきぬなど著て、いといたう太りにけり。我  
 が齡もいと覺えて恥かしけれど、右近「なほさし覗け。我をば見知りたりや。」とて、顔を  
 さし出でたり。この女手を打ちて、三條「吾が御許にこそおはしましたけれ。あな嬉しとも嬉  
 し。何處より参り給ひたるぞ。上はおはしますや。」と、いとどろ／＼しく泣く。若き者  
 にて見なれし世を思ひ出づるに、隔て來にける年月數へられて、いとあはれなり。右近「ま  
 づおとゞはおはすや。若君はいかゞなり給ひにし。あてきと聞えしは。」とて、君の御こと  
 は、はかなき世をおもふに、あへなくも言はむとて、かけむもゆ／＼しく言ひ出でず。  
 三條「皆おはします。姫君もおとなに成りておはします。まづおとゞにかくなむと聞えむ。」

○いとつらく 夕顔  
 を連れ出したのは右  
 近であるから乳母は  
 右近をつらく思ふ。  
 ○なごりなく こも  
 こく。  
 ○老人 乳母。  
 ○我が君 夕顔。

○うち捨て 夕顔の  
 棄てて行った玉鬘が  
 ○瞬き 生き延びた  
 ○そのをり 夕顔頓  
 死の際に。  
 ○御方は 夕顔は。  
 ○急ぎたち 玉鬘方  
 の人々が發足を急々  
 ○諸共にや 御一所  
 に参詣しませうと。  
 ○恥かしくはあらで  
 知合の仲であるか  
 ら。  
 ○うしろで 玉鬘の  
 後姿の。

とて入りぬ。皆驚きて、「夢の心地もするかな。いとつらくいはむ方なく思ひ聞ゆる人に、  
 對面しぬべき事よ。」とて、この隔てに寄り來たり。けどほく隔てつる屏風だつもの、なご  
 りなくおしあけて、まづ言ひやるべき方なく泣きかはす。老人は、たゞ「我が君はいかゞ  
 なり給ひにし。こゝらの年頃、夢にてもおはしますまむ所を見むと、大願を立つれど、遙か  
 なる世界にて、風の音にてもえ聞き傳へ奉らぬを、いみじく悲しと思ふに、老の身の残り  
 留まりたるもいと心憂けれど、うち捨て奉り給へる若君の、らうたく哀れにておはします  
 を、冥途のほだしにもて煩ひ聞えてなむ、瞬き侍る。」と言ひつゞくれば、昔そのをり、い  
 ふかひなかりしことよりも、答へむ方なく煩はしと思へども、右近「いでや聞えてもかひな  
 し。御方は早ううせ給ひにき。」と言ふまゝに、三人ながらむせかへり、いとむづかしく、  
 せきかねたり。

日暮れぬと急ぎたちて、燈明のことどもした、め出でて急がせば、なか／＼いと心あわ  
 たゞしく立ちわかる。「諸共にや。」と言へど、互に供の人のあやしと思ふべければ、この介  
 にも事の様だに言ひ知らせあへず、我も人もことに恥かしくはあらで、皆下り立ちぬ。右  
 近は、人知れず目とめて見るに、中に美しけなるうしろでの、いといたう褻れて、卯月

○すきかけ 單の著物故中の髪が著物を通して見える。  
 ○この君を 玉鬘は徒歩に慣れないので  
 ○行ふ 勳行をする  
 ○この御師 玉鬘の祈禱僧は。  
 ○深からぬは 未だ深い知合の仲でもないで端の方の部屋を玉鬘に當てる。  
 ○西の間に 右近の部屋から遠く離れた  
 ○此處 右近の部屋  
 ○男どもをば 玉鬘のお供はもこの部屋に残して置いて。  
 ○こなた 右近方に  
 ○大殿 源氏。  
 ○かすかなる道 供人も少ない道中でも人から侮りを受けぬ  
 ○生者 不心得な者  
 ○この人を 佛に祈る詞、玉鬘を。  
 ○幸ひ 玉鬘に。  
 ○大悲者に 觀音様に別の願はかけぬが

の單衣めくもの著こめ給へる髪のすきかけ、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見奉る。少し足なれたる人は、疾く御堂に著きにけり。この君をもて煩ひ聞えつ、初夜行ふ程にぞ上り給へる。いと騒がしく、人詣でこみての、しる。右近が局は、佛の右の方<sup>かた</sup>に近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、右近なほ此處におはしませ。」とたづねかはして言ひたれば、男どもをばとめて、介に斯うくといひ合はせて、こなたに移し奉る。右近かく怪しき身なれど、たゞ今の大殿になむ侍ひ侍れば、斯くかすかなる道にても、らうがはしき事は侍らじと頼み侍る。田舎びたる人<sup>ひと</sup>をば、かやうの所には、善からぬ生者<sup>なまもの</sup>どもの、侮らはしうするも辱きことなり。」とて、物語いとせまほしけれど、おどろくしき行ひのまぎれに、騒がしきに催されて、佛を拜み奉る。右近は心のうちに、右近「この人をいかで尋ね聞えむと申し渡りつるに、かつくかくて見奉れば、今は思ひのごと、大臣の君の、尋ね奉らむの御志深かめるを、知らせ奉りて、幸ひあらせ奉り給へ。」など申しけり。國々より、田舎人多く詣でたりけり。この國の守の北の方も詣でたりけり。嚴しく勢ひたるを羨みて、この三條がいふ様、「大悲者には、他事<sup>ことごと</sup>も申さじ。あが姫君、大貳の北の方ならずば、當國の受領の北の方になし奉らむ。三

○返り申し 御禮報じ。  
 ○中將殿は 玉鬘の文、頭中將は昔も威勢が盛んであつたが  
 ○御方しも 御子様方も甚だ貴く居られる中で玉鬘だけが。  
 ○あなま給へ お黙んなさい。  
 ○御館の上 奥様が  
 ○筑紫人 玉鬘。  
 ○御あかし文 願文  
 ○さやうの人は 僧侶は委細を承知して居るからいつもの通りに書く。  
 ○瑠璃君 玉鬘を假に名付けて言ふ。  
 ○おりぬ 右近の懇意な僧の所へ玉鬘を  
 ○高き 高貴な人ミ

條らも、随分に榮えて返り申しは仕うまつらむ。」と、額に手をあてて念じ入りて居り。右近、いとゆゝしくも言ふかなと聞きて、右近「いといたくこそ田舎びにけれな。中將殿は、昔の御覚えだに如何おはしましたし。まして今は天の下を御心にかけて給へる大臣にて、いかにばかりいつかしき御中に、御方しも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ。」といへば、三條「あなま、給へ。大臣たちも暫し待て。大貳の御館の上の、清水の御寺の觀世音寺に参り給ひしいきほひは、帝の御幸にやは劣れる。あなむくつけや。」とて、なほ更に手をひき放たず、拜み入りて居り。筑紫人は、三日籠らむと志し給へり。右近はさしも思はざりけれど、かかる序<sup>ついで</sup>にのどかに聞えむとて、籠るべきよし、大徳呼びていふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくたくしう辨へければ、常の事にて、右近例の藤原の瑠璃君といふが御爲に奉る。能く祈り申し給へ。その人この頃なむ見奉り出でたる。その願もはたし奉るべし。」といふを、聞くと哀れなり。法師、「いとかしこき事かな。たゆみなく祈り申し侍るしにこそ侍れ。」といふ。いと騒がしう一夜行ふなり。明けぬれば、知れる大徳の坊におりぬ。物語心やすくなるべし。姫君のいたく襄れ給へる、恥かしげに思したる様、いとめでたく見ゆ。右近覺えぬ高きまじらひをして、多く



○殿の上 紫の上。  
 ○姫君 明石姫君。  
 ○かしづき 源が明石姫君を寵愛する事。  
 ○劣り給ふ 玉鬘の器量は明石姫君に。  
 ○大臣の君 源氏。  
 ○御母后 藤原。  
 ○見奉り 私が此の方々を較べて見るに。  
 ○上 紫の上。

○我にならび 紫が自分の妻になつた事は不釣合な事。  
 ○命のぶる 美しき。  
 ○いづくか 玉鬘は。  
 ○いたゞきを 楞嚴經「世尊頂放三百寶無畏光明」  
 ○これを 玉鬘を。  
 ○あたらしく 口惜しく。

の人をなむ見あつむれど、殿の上の御容貌に、似る人はおはせじとなむ、年頃見奉るを、又おひ出で給ふ姫君の御さま、いと理にめでたくおはします。かしづき奉り給ふ様も、ならびなめるに、かうやつれ給へるさまの、劣り給ふまじく見え給へば、ありがたうなむ。大臣の君、父帝の御時より、そこらの女御后、それより下はのこりなく見奉り集め給へる御目にも、當帝、御母后ときこえしと、この姫君の御容貌とをなむ、よき人とはこれをいふにやあらむと覺ゆると聞え給ふ。見奉りならぶるに、かの後の宮をば知り聞えず、姫君は清らにおはしませど、まだ片なりにて、おひさきぞ推しはかられ給ふ。上の御容貌は、なほ誰かならび給はむとなむ見給ふ。殿も勝れたりと思しためるを、言に出でては、何かは數へのうちには聞え給はむ。我にならび給へるこそ、君はおほけなけれとなむ、戯れ聞え給ふ。見奉るに、命のぶる御有様どもを、またさる類おはしましなむやとなむ思ひ侍るを、いづくか劣り給はむ。物は限りあるものなれば、勝れ給へりとて、いたゞきを離れたる光やおはする。たゞこれを、勝れたりとは聞ゆべきなめりかし。」と、うち笑みて見奉れば、老人もうれしとおもふ。乳母「かかる御様を、ほとく怪しき所に沈め奉りぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家龜をも捨て、男女の頼むべき子どもにも引別れて

○父大臣 頭中將。  
 ○恥かしう 玉鬘は。  
 ○殿も 源氏も。  
 ○召し 私を。  
 ○如何に 玉鬘は。  
 ○聞き出で お前が何か聞き出したなら自分に知らして呉れ。  
 ○大臣の君 源氏。  
 ○ありし様 源と夕顔の關係を。  
 ○かの御代り 夕顔の代りに玉鬘の世話をする。  
 ○我が子を 世間には實子を探し出したと云つて自分の所に玉鬘を引き取らう。  
 ○心の 私が年若な間は。  
 ○尋ね 玉鬘の行方。  
 ○少貳 乳母の夫が。  
 ○まかり 御殿乞に。  
 ○参り集ふ 長谷寺に、此の僧坊は寺よりも高所にある。

む、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで來し。あが御許、はや宜きさまに導きこえ給へ。高き宮仕したまふ人は、おのづからゆき交りたるたよりものし給ふらむ。父大臣に聞召され、數まへられ給ふべきばかり、おほし構へよ。」といふ。恥かしうおほいて、後むき給へり。右近「いでや、身こそ數ならねど、殿も御前近く召しつかはせ給へば、物の折ごとに、如何にならせ給ひにけむと聞え出づるを、聞召し置きて、われいかで尋ね聞えむと思ふを、聞き出で奉りたらばとなむ、宣はする。」といへば、乳母「大臣の君は、めでたくおはしますとも、さるやんごとなき御妻どもおはしますなり。先づ實の親とおはする大臣にを知らせ奉り給へ。」などいふに、ありし様など語り出でて、右近「世に忘れ難く悲しき事になむ思して、かの御代りに見奉らむ、子も少なきがさうくしきに、我が子を尋ね出でたる人には知らせてと、そのかみより宣ふなり。心の幼かりける事は、萬に物つ、ましかりし程にて、え尋ねも聞えで過しし程に、少貳になり給へる由は、御名にて知りなき。まかり申しに、殿に参り給ひし日、ほの見奉りしかども、え聞えで止みにき。さりとも姫君をば、かのありし夕顔の五條にぞとめ奉り給へらむとぞ思ひし。あないみじや、田舎人にておはしまさましょ。」など、打語らひつ、日一日、昔物語念誦などしつ、参り集

○ふたもとの 古今  
 「初瀬川ふる川の邊  
 に二本ある杉年を経て  
 又もあひ見む二本  
 ある杉」此の初瀬に  
 参詣しなかつたら  
 玉鬘に逢ふ事は出来  
 なかつた事であらう  
 ○婿しき瀬 細流、  
 「祈りつゝ頼みぞ渡  
 る初瀬川婿しき瀬に  
 も流れあふや」と  
 ○初瀬川 昔の事は  
 知らぬが今日右近は  
 逢ふ事が出来て婿し  
 涙がこぼれる。  
 ○容貌は 玉鬘の。  
 ○こころ 無骨に  
 ○おこま 乳母の教  
 育の仕方を婿しく。  
 ○母君は 夕顔。  
 ○これは 玉鬘は。  
 ○筑紫を 筑紫青  
 は皆かく立派な人許  
 りか右近が奥床し  
 く思つて他の人を見  
 れば皆田舎者だから  
 ○哀れなる 玉鬘主  
 従の。  
 ○この人 右近の。  
 ○下草 玉鬘の様な  
 日陰者も。  
 ○おひ惑はし 玉鬘  
 の行方が知れなくな  
 つたら困る右近が

ふ人の有様ども見下さる、方なり。前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近、  
 「ふたもとの杉のたちどを尋ねずば布留川のべに君を見ましや  
 嬉しき瀬にも。」ときこゆ。

初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ

とうち泣きておはする様、いとめやすし。容貌はいとかくめでたく清けながら、田舎びこ  
 ちごちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし、いであはれ、いかで斯くおひ出で給  
 ひけむと、おとを嬉しく思ふ。母君は、たゞいと若やかにおほどかにて、やはくどぞ  
 たをやぎ給へりし、これは氣高く、もてなしなど恥かしげに、よしめき給へり。筑紫を心  
 にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるを、心得がたくなむ。暮るれば御堂に上りて、  
 又の日も行ひ暮し給ふ。秋風、谷より遙かに吹きのほりて、いと肌寒きに、物いと哀れな  
 る心どもには、よろづ思ひ續けられて、人並々ならむことも有りがたきことと思ひ沈みつ  
 るを、この人の物語の序に、父大臣の御有様、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆物め  
 かしなしたて給ふを聞けば、かかる下草頼もしくぞ思しなりぬる。出づとも、互にやど  
 るところも問ひかはして、もし又おひ惑はしたらむ時と、危く思ひけり。右近が家は、六

○敷ならで 賤しい  
 身分の者が。

○やもめ人の 右近  
 の様な獨身者も里で  
 はいつも違つて若  
 返つて面白い事もあ  
 ったであらう。  
 ○出踏 初瀬参詣。  
 ○上に 紫の上に。  
 ○とりわき 殊更に  
 源氏に申上ひた事を  
 ○聞き給ひ 紫の上  
 が。  
 ○御有様 源と紫の  
 ○この程に 暫く見  
 なかつた間に紫が美  
 しくなられたと。  
 ○かの人 玉鬘を。

條院近きわたりなりければ、程遠からで、言ひかはすもたづき出で來ぬる心地しけり。

右近は大殿にまゐりぬ。このことをかすめ聞ゆる序もやとて、急ぐなりけり。御門ひき  
 入る、より、けはひことに廣々として、まかで参る車多くまよふ。敷ならで立出づるも、  
 まばゆき心地する玉の臺なり。その夜は御前にも参らで、思ひ臥したり。又の日、よべ里  
 より参れる上臈若人どもの中に、取りわきて右近召し出づれば、おもだたく覺ゆ。大臣  
 も御覽じて、遷などか里居は久しくしつる。例ならず、やもめ人の、ひき違へ、こまがへ  
 る様もありかし、をかしき事などありつらむ。など、例のむづかしう、戲言など宣ふ。  
 右近「まかでて七日に過ぎ侍りぬれど、をかしき事は侍り難くなむ。山踏し侍りて、哀れな  
 る人をなむ見奉りつたりし。」遷「何人ぞ。」と問ひ給ふ。ふと聞え出でむも、まだ上に聞  
 かせ奉らで、とりわき申したらむを、後に聞き給ひては、隔て聞えけりと思さむなど、  
 思ひ亂れて、右近「今聞えさせ侍らむ。」とて、人々参れば聞えさしつ。大殿油など参りて、  
 うちとけ並びおはします御有様ども、いと見るかひ多かり。女君は、二十七八になり給ひ  
 ぬらむかし、盛りの清らにねびまさり給へり。少し程経て見奉るは、又この程にこそには  
 ひ加はり給ひにけれと見え給ふ。かの人をいとめでたく、劣らじと見奉りしかど、思ひな

○こよなき 紫の美しきは一層すぐれて  
 ○御脚まり 源の足をさすらせる爲に  
 ○むづかる 足をさする事を嫌がる。  
 ○誰かその 足をさするのは嫌でないが  
 ○上も云々 源と右近との仲がよすぎる  
 ○紫がやく事だらう  
 ○さるまじき 紫は嫉妬もしかねぬ心故  
 ○ふる人 右近の如き年寄までにさへ。  
 ○語らひて 僧侶とでも出来合つて。  
 ○年頃は 今までは  
 ○昔人も 昔仕へた人々も一部分は相變らず仕へてゐたから  
 ○心知り 事情を知らぬ紫には話すまい

しにや、猶こよなきに、幸ひのあるとなきとは、隔てあるべきわざかなと見合はせらる。大殿籠るとて、右近を御脚まりにめす。源「若き人は、苦しとてむづかるめり。なほ年經ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ。」と宣へば、人々忍びて笑ふ。女房「さりや、誰かその使ひならひ給はむをばむづからむ。うるさき戯言いひか、り給ふを、煩はしきに。」などいひあへり。源「上も年經ぬるどちうちとけ過ぎば、はたむづかり給はむとや。さるまじき心と見ねば、あやふし。」など、右近に語らひて笑ひ給ふ。いと愛敬つき、をかしきけさへ添ひ給へり。今は公に仕へ、いそがしき御有様にもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さる、まゝに、唯はかなき御戯言を宣ひ、をかしく人の心を見給ふ餘りに、かかるふる人をさへぞ戯れ給ふ。源「かの尋ね出でたりけむや、何様の人ぞ。たふとき修行者語らひて、率て來たるか。」と問ひ給へば、右近「あな見ぐるしや。はかなく消え給ひにし夕顔の、露の御ゆかりをなむ、見給へつけたりし。」と聞ゆ。源「けに哀れなりける事かな。年頃は何處にか。」と宣へば、ありのまゝには聞えにくくて、右近「怪しき山里になむ。昔人もかたへは變らで侍りければ、その世の物語し出で侍りて、堪へ難く思ひ給へりし。」など聞え居たり。源「よし、心知り給はぬ御あたりに。」と、隠し聞え給へば、上、紫「あなわづら

○誰ばかり 誰位の美しさか、紫とちちらが美しいか。  
 ○さまでは 紫にはさても及びません。  
 ○したり顔に そんな美しい子を持つた自分は自慢する事が出来る、玉鬘を源の實子の如くに云ひなす。  
 ○惑はし 玉鬘の行方の知れなかつた事  
 ○おほつかなき 玉鬘に對面しないのも  
 ○父大臣 頭中將。  
 ○數多 子供が多い  
 ○なか／＼ 却つて恥かしい目に逢ふだらう。  
 ○さう／＼し 子供が少なくて。  
 ○御心に 御心の儘  
 ○誰かは 源が言はなければ他には誰も告げ手はない。  
 ○いたづらに 夕顔が頓死した代りに。

はし。眠たきに、聞き入るべくもあらぬものを。」とて、御袖して 耳塞ぎ給ひつ。源「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや。」など宣へば、右近「必ずしもいかでか物し給はむと思ひ給へりしを、こよなうこそおひまさりて見え給ひしか。」と聞ゆれば、源「をかしの事や。誰ばかりとか覺ゆ。この君と。」と宣へば、右近「いかでかさまでは。」と聞ゆれば、源「したり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、後やすしかし。」と、親めきて宣ふ。かく聞きそめたまひて後は、召しはなちつ、源「さらばかの人、このわたりに渡い奉らむ。年頃ものついでごとに、口惜しう惑はしつる事を思ひ出づるに、いと嬉しく聞き出でながら、今までおほつかなきも、かひなき事になむ。父大臣には何か知られむ。いと數多もてさわがるめるが、數ならで、今はじめたち交りたらむが、なか／＼なる事こそあらめ。我は斯うさう／＼しきに、覺えぬ所より尋ね出したるとも言はむかし。すきものどもの心盡さするくさはひにて、いといたうもてなさむ。」など語らひ給へば、かつ／＼いと嬉しく思ひつ、右近「たゞ御心になむ。大臣に知らせ奉らむとも、誰かは傳へほのめかし給はむ。いたづらに過ぎ物し給ひしかはりに、ともかくもひき助けさせ給はむ事こそは。罪かろませ給はめ。」と聞ゆ。源「痛うもかこちなすかな。」とほ、笑みながら、涙ぐみたまへ

○哀れに 夕顔と自分との仲は。  
 ○かのをりの 夕顔程に愛する人はない  
 ○我が心長さ 自分がいつまでも棄てないといふ事を知る女達も。  
 ○さてもなし その様な遣子があるなら

○知らずとも 其方は私を知るまいが私には縁故のある人だから其方の世話をし上ける積りです。  
 ○自ら 右近自らの文を持って玉璽の所へ行き源の仰せを話して土産を差上ぐ  
 ○上 紫にも源が。

り。源「哀れにはかなかりける契りとなむ、年頃思ひわたる。かくて集へる方々の中に、かのをりの志ばかり思ひとゞむる人なかりしを、命長くて我が心長さを、見果つる類多かめる中に、いふかひなくて、右近ばかりをかたみに見るは、口惜しくなむ思ひ忘る、時なきに、さてもなし給はば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ。」とて、御消息奉り給ふ。かの未摘花のいふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人の有様、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしう思さるゝなりけり。ものまめやかに、あるべかしく書き給ひて、はしに、

源 かく聞ゆるを、

知らずとも尋ねてしらむしまえに生ふる三稜のすぢは絶えじを

となむありける。御文、自らまかでて、宣ふさまなどきこゆ。御装束、人々の料などさまざまあり。上にも語らひ聞え給へるなるべし、御匣殿などにも、まうけの物召し集めて、色あひしざまなど、殊なるをと擇らせ給へれば、田舎びたる目どもには、まして珍らしきまでなむ思ひける。正身は、たゞかごとばかりにても、實の親の御けはひならばこそ嬉しからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむとおもむけて、苦しけにおほしけれ

○あるべきさま 玉璽の取るべき方法を  
 ○人たち 源の所で人並になつたなら。  
 ○右近が 右近の様なつたらぬ者でも神佛の祈願が叶つて玉璽に會ふ事が出来た  
 ○平らかに 其の身が無事ならやがて實父にも逢ふ事が出来る。

○敷ならぬ 私は何の因縁でか様にさまよひ歩く事です。  
 ○手は 手跡は拙い  
 ○住み 玉璽を。  
 ○南の町 紫の方。  
 ○いたづら あいた  
 ○中宮の 秋好の方  
 ○さて侍ふ 侍女の方  
 ○丑寅 花散里の方  
 ○あひずみ 同居。

ど、あるべきさまを、右近聞え知らせ、人々も、「おのづから、さて人だち給ひなば、大臣の君も尋ね知り聞え給ひなむ。親子の御契りは、絶えて止まぬものなり。右近が、かすにも侍らず、いかでか御覽じつけられむと思ひ給へしに、佛神の御導き侍らざりけりや。まして誰もく、平らかにおはしまさば。」と、皆聞えなくさむ。まづ御返りをと、責めて書かせ奉る。いとこよなく田舎びたらむものをと、恥かしくおほいたり。唐の紙のいとかうばしき取り出でて、書かせ奉る。

玉璽 敷ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとゞめけむ

とのみ仄かなり。手ははかなだちてよろほはしけれど、あてはかにてくち惜しからねば、御心おちるにけり。

住み給ふべき御かた御覽するに、南の町にはいたづらなる對どもなどもなし。勢ひことに住みみち給へれば、顯證に人しゆくもあるべし。中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さて侍ふ人のつらにや聞きなさむと思して、少し埋れたれど、丑寅の町の西の對、文殿にてあるを、他方へ移してとおほす。あひずみも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむと、思しおきつ。上にも、今

○昔の夕顔の。  
 ○世にある人の夕顔位の女の話を歴々の人の事の様に懸々話し出す事はない。  
 ○かかる序に、か様な序に打明けるのが他の女よりもそなたを思つてゐる證據。  
 ○おほし、夕顔を。  
 ○思はぬ中、相愛の中になくては女は男に對して執念が深い。  
 ○さるまじき、浮氣心に關係した女も。  
 ○類なく、夕顔が。  
 ○北の町に、明石の上。  
 ○北の御殿を、紫は明石をけぶたく思ふ。  
 ○姫君、明石の姫君。  
 ○こころ、源が明石を愛せられるのも。  
 ○わたり、玉鬘が六條院へ引越すことも急に出来ぬ。

ぞかのありし昔の世の物語聞え出で給ひける。かく御心にこめ給ふことありけるを、うらみ聞え給ふ。遷りなりしや。世にある人の上とてや、問はずがたりは聞え出でむ。かかる序にへだてぬこそ、人にはことに思ひ聞ゆれ。」とて、いと哀れけにおほし出でたり。遷り人の上にてあまた見しに、いと思はぬ中も、女といふものの心ふかきをあまた見聞きしかば、更にすきくしき心はつかはじとなむ思ひしを、自らさるまじきをも數多見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、又類なくなむ思ひ出でらる。世にあらましかば、北の町にもものする人の列には、などか見ざらまし。人のありさまとりくになむありける。かどくしう、をかしき筋などは後れたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな。」など宣ふ。紫さりととも明石の竝には、たちならべ給はざらまし。」と宣ふ。なほ北の御殿をば、めざましと心おき給へり。姫君の、いとうつくしけにて、何心もなく聞き給ふが、らうたければ、又ことわりぞかしと思しかへさる。

かくいふは、九月の事なりけり。わたり給はむ事、すがくしくもいかでかはあらむ。よろしき童若人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人々も京よりちりほひ來たるなどを、便りにつけて呼び集めなどして侍はせしも、俄に惑ひ出で給ひし騒ぎに、皆おくら

○おくらかし、皆筑紫へ置いて來たから。  
 ○その人の、玉鬘の素性は知らせない。  
 ○大臣、源が花散里へ玉鬘の世話を頼む。  
 ○女になる、その子が娘盛りになるまで。  
 ○覚えぬ、意外な所から在所を聞き附けて。  
 ○移ろはし、引取る。  
 ○中將を、夕霧を其方に託したらよく世話をしてくれたが。  
 ○姫君の、明石姫一人で寂しい所だから。  
 ○御心も、其方も心がけがよいから安心して頼むのだ。  
 ○後見む人、私が世話をするのに適當な人も少なくて退屈。  
 ○古物扱ひ、昔に關係した女の世話をすることは面倒な事だ。  
 ○人の、御供の。

かしてければ、また人もなし。京は自ら廣き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつ、牽て來。その人の御子などとは知らせざりけり。右近が里の五條に、まづ忍びて渡し奉りて、人々擇りと、のへ、装束と、のへなどして、十月にぞ渡り給ふ。大臣、東の御方に聞えつけ奉り給ふ。遷り哀れと思ひし人の物うんじして、はかなき山里に隠れ居にけるを、幼き人のありしかば、年頃も人知れず尋ね侍りしかども、え聞き出でなむ、女になるまで過ぎにけるを、覚えぬかたよりなむ。聞きつけたる時にだにとて、移ろはしはべるなり。母もなくなりけり。中將を聞えつけたるに、悪しくやはある。同じごと後見給へ。山賤めきて生ひ出でたれば、鄙びたる事多からむ。さるべく事に觸れて教へ給へ。」と、いとこまやかに聞えたまふ。花散里けにかかる人のおはしけるを、知り聞えざりけるよ。姫君の一所ものし給ふがさうくしきに、善き事かな。」とおいらかに宣ふ。遷りの親なりし人は、心なむ、有りがたきまで善かりし。御心も後安く思ひ聞ゆれば。」など宣ふ。花散里つきくしく後見む人などもことに多からで、徒然に侍るを、嬉しがるべき事になむ。」と宣ふ。殿のうちの人は、御女とも知らで、何人を又尋ぬ出で給へるならむ。むづかしき古物扱ひかな。」と言ひけり。御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田

○大臣の君 源氏。  
 ○年頃の 年の行かない時分には。  
 ○心こまに 玉鬘と特別な関係のある人  
 ○火こそ 火が大變暗くて戀人が逢引してゐる所の様だ。  
 ○親 源自らを云ふ  
 ○容體 玉鬘の。  
 ○心にくし 玉鬘の顔を隠しすぎる。  
 ○おもなの人や 恥かしがりたね。  
 ○けにさ 如何にも夕顔の顔に似て居て眼のあたりが美しい  
 ○聞えられ 悲しみの餘りに物も云へぬ  
 ○親子の中の 親子が此の様に長らく會はなかつたためしは

○覺束なくは 何うして打解けないのか  
 ○足立たず 日本紀 竟寔歌「かぞいろはいかに哀れと思ふらむ三歳になりぬ足立たずして」三四歳で田舎へ下つて後は。  
 ○昔人 夕顔に似て  
 ○誰かは 自分以外に同情する者はない  
 ○渡り 源は歸つた  
 ○この籠の中 六條院の女達を見たがる  
 ○すきものども 漁色家が源の所へは眞面目腐つた顔で来るのも此の様な娘達が居ない故である。  
 ○もてなし 玉鬘を  
 ○うちあらぬ 眞面目で通す事の出来ぬ  
 ○さやうに 人の心を亂す様に。

舍びすしたたり。殿よりぞ、綾何くれと奉り給へる。

その夜やがて、大臣の君渡り給へり。昔光源氏などいふ名は、聞き渡り奉りしかど、年頃のうひ／＼しさに、さしも思ひ聞えざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびより、はつかに見奉る、いと怖ろしくさへぞ覺ゆるや。渡り給ふ方の戸を、右近かい放てば、源この戸口に入るべき人は、心ことにこそ。」とうち笑ひ給ひて、廂なる御座にいつい居給ひて、源火こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものところ聞け。さも思さぬか。」とて、几帳少し押し遣り給ふ。わりなく恥かしければ、そばみておはする容體など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、源今少し光見せむや。餘り心にくし。」と宣へば、右近挑けて少し寄す。源おもなの人や。」と少し笑ひ給ふ。けにと覺ゆる御まみの恥かしけさなり。いさ、かも他人と隔てあるさまにも宣ひなさず、いみじく親めきて、源年頃御行方も知らで、心にかけてぬひまなく歎き侍るを、かうて見奉るにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取添へ、忍び難きに、えなむ聞えられざりける。」とて、御目おしのごひ給ふ。まことに悲しうおほし出でらる。御年の程數へ給ひて、源親子の中の、かく年經たる類あらじものを、契りつらくもありけるかな。今は物うひ／＼しく、若び給ふ

べき御程にもあらじを、年頃の御物語なども聞えまほしきに、などか覺束なくは。」と恨み給ふに、聞えむ事もなく恥かしければ、玉鬘足立たず沈みそめ侍りにける後、何事もあるかなきかになむ。」と、ほのかに聞え給ふ聲ぞ、昔人にいとよく覺えて若びたりける。ほ、あみて、源沈み給へりけるを哀れとも、今はまた誰かは。」とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御答へとおほす。右近に、あるべき事宜はせて、渡り給ひぬ。

めやすくものし給ふを、嬉しくおほして、上にも語り聞え給ふ。源さる山陵の中に年經たれば、いかにいとほしけならむと侮りしを、かへりて心恥かしきまでなむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籠の中好ましくし給ふ心亂りにしがな。すきものどもの、いとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなき程なり。いたうもてなしてしがな。なほうちあらぬ人の氣色見集めむ。」と宣へば、源怪しの人の親や。まづ人の心はけまさむ事をおほすよ。けしからず。」と宣ふ。源まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし。」とて、笑ひ給ふに、面赤みておはする、いと若くをかしけなり。硯ひきよせ給ひて、手ならひに、

○戀ひ渡る 自分は  
今猶夕顔を戀しく思  
つてゐるが玉鬘は自  
分よりも實父にさぞ  
逢ひたい事だらう。  
○見給ふ 紫が思ふ  
○中將の君 夕顔。  
○こなたに 玉鬘の  
所に夕顔が。  
○かかる者 私の様  
な者でも兄弟と思つ  
て。  
○心知れる 事情を  
知つてゐる侍女達は  
○御住居 玉鬘の筑  
紫の住居。  
○御しつらひより  
六條院の様。  
○親兄弟と 玉鬘の  
親兄弟たる人々の。  
○三條 玉鬘を大貳  
の北の方に祈つた  
女。  
○おほぞう 專屬の  
係の者をおかね時は  
○こなた 玉鬘附の  
○なりぬ 家司に。

○御列に 玉鬘を重  
重しい人々と同等に  
○山賤の方に 衣裳  
等に就いては玉鬘を  
○かたぐに 他の  
女にも分けて遣つて  
○御匣殿に 後宮の  
裁縫係で仕立てた著  
物。  
○こなた 紫の方で  
○かかるすぢ 紫は  
染物等も上手で。  
○思ひ 源が感心す  
○打殿 光源を出す  
爲に布を打つ所。  
○此は彼れは 此は  
誰それへやるぞ。  
○つれなくて そし  
らぬ顔で實は著物の  
柄によつて他の女達  
の容貌を探らうもの  
○いづれを どの著  
物を誰に贈らうもの。  
○鏡にて 自分の推  
測を標準にする事は  
出来ぬ。

「戀ひ渡る身はそれながら玉鬘いかなるすぢを尋ね來つらむ

あはれ。」とやがてひとりごち給へば、けに深くおほしける人のなごりなめりと見給ふ。

中將の君にも、選かかる人を尋ね出でたるを、用意して睦びとぶらへ。」と宣ひければ、  
こなたにまうで給ひて、夕人数ならずとも、かかる者さぶらふと、まづ召し寄すべくなむ  
侍りける。御わたりのほどにも、参り仕う奉らざりける事。」と、いとまめしく聞え給  
へば、かたはらいたきまで、心知れる人は思ふ。心の限り盡したりし御住居なりしかど、  
あさましう田舎びたりしも、たとしへなくぞ思ひくらべらるゝや。御しつらひより初め、  
今めかしうけだかくて、親兄弟とむつび聞え給ふ御様かたちよりはじめ、目もあやに覺ゆ  
るに、今ぞ三條も、大貳をあなづらはしく思ひける。まして監がいきざしけはひ、思ひ出  
づるもゆゝしきこと限りなし。豊後介の心ばへを、ありがたきものに君も思ひ知り、右近  
も思ひ言ふ。おほぞうなるは事も怠りぬべしとて、こなたの家司ども定め、あるべき事ど  
もおきてさせ給ふ。豊後介もなりぬ。年頃田舎び沉みたりし心地、俄になごりなく、いか  
でか、假にても立ち出で見るべきよすがなく覺えし大殿の内を、朝夕の出で入りならし、  
人を従へ、事行ふ身となれるは、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、細

かにありがたうおはします事、いと辱し。

年の暮に御しつらひの事、人々の装束など、やんごとなき御列に思しおきてたり。かか  
りとも田舎びたることやと、山賤の方に侮り推し量り聞え給ひて、調じたるも、奉りたま  
ふついでに、織物どもの、我もくと、手を盡し織りつゝもてまるれる、細長、小袿の、  
いろく様々なるを御覽するに、選いと多かりけるものどもかな。かたぐに、羨みなく  
こそものすべかりけれ。」と、上に聞えたまへば、御匣殿に仕う奉れるも、こなたにせさせ  
給へるも、皆取う出させ給へり。かかるすぢはた、いとすぐれて、世になき色あひ匂ひを  
染めつけ給へば、ありがたしと思ひ聞え給ふ。此處彼處の打殿より、参らせたる打物ども  
御覽じくらべて、濃き赤きなど、さまざまを選らせ給ひつゝ、御衣櫃衣宮共に入れさせ給  
ひて、おとなびたる上臈共侍ひて、此れは彼れはと取り具しつゝ、入る。上も見給ひて、  
「いづれ劣り勝る差別も見えぬものどもなめるを、著たまはむ人の御容貌に、思ひよそへ  
つ、奉れ給へかし。著たるものの人の様に似ぬは、ひがくしくもありかし。」と宣へば、  
大臣うち笑ひて、選つれなくて、人の容貌おし量らむの御心なめりな。さていづれをとか  
思す。」と聞え給へば、紫「それも鏡にてはいかでか。」と、さすがに恥ぢらひておはす。紅梅

- この紫の。
- 姫君の 明石姫君
- 海賦 波に海藻や貝をあしらった模様
- 夏の御方 花散里
- 西の對 玉鬘。
- おほしあはす 玉鬘の容貌を推測する
- 唯ならず 紫の様子
- 容貌のよそへ 紫の様に著物の柄で容貌を判断するのは。
- そこひ 底によい所もある。
- 御料 源の著料。
- ゆるし色 薄紅。
- 同じ日 方々が同日に以上の著物を著る様に觸れをまはす
- 東の院 二條院。

のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今様色のいと勝れたるとは、この御料、櫻の細長に、艶やかなる搔練とり添へては、姫君の御料なり。淺縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、勻ひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の對に奉れ給ふを、上は見ぬやうにておほしあはす。内の大臣の、はなやかに、あな清けとは見えながら、なまめかしう見えたるかたのまじらぬに、似たるなめりと、けに推し量らるゝを、色には出し給はねど、殿見やり給へるに、唯ならず。運いでこの容貌のよそへは、人腹立ちぬべき事なり。よしとても物の色は限りあり、人の容貌は後れたるも又なほそこひあるものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を亂れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほゝゑまれ給ふ。梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小袿に、濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやりけだかきを、上は目ざましと見給ふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけ給ひて、御料にあるくちなしの御衣、ゆるし色なる添へ給ひて、同じ日著給ふべき御消息聞えめぐらし給ふ。けに似けついたらども見むの御心なりけり。

皆御返りどもたゞならず、御使の祿こゝろくゝなるに、末摘花東の院におはすれば、

- 麗はしく 末摘は物堅い人なので。
- うつほ 下著も重ねずに使へ遣る。
- 賜へるは 衣を頂いて却つて悲しい。
- きて見れば 源のお出でにならないのが恨めしいから此の衣を返してしまはう
- 奥より 昔風。
- かづけたるもの 末摘が使へ遣つた祿
- まかで 使が。
- おのゝ 待女達
- 恥かしき君 末摘
- から衣、袂ぬる、何れも古風な歌人の套語。
- ひさすぞ 末摘が歌の古格を遵守して
- まきこる離れぬ 人が會合しての席上で歌を詠む場合にはまきこるの二字をまきつてよみ込む。

今少しさしはなれ、艶なるべきを、麗はしくものし給ふ人にて、あるべき事はたがへ給はず、山吹の袿の、袖口いたくすゝけたるを、うつほにてうちかけ給へり。御文には、いと香ばしき陸奥紙の、少し年経厚きが、黄ばみたるに、

いでや、賜へるは、なかゝにこそ。

きて見ればうらみられけりから衣かへしやりてむ袖をぬらして

御手のすぢ、ことに奥よりにたり。いといたくほゝゑみ給ひて、頼にもうちおき給はねば、上、何事ならむと見おこせ給へり。御使にかづけたるものを、いとわびしくかたはらいたしとおほして、御氣色あしければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのゝはさゝめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたき所のつき給へるぞ、さかしらにもて煩ひぬべくおほす。運はづかしき君なり、古代の歌よみは、から衣袂ぬるゝかごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。更にひとすぢに纏はれて、今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ、ねたきことはあれ。人の中なる事を、をりふしおまへなどの、わざとある歌よみの中にては、まるとる離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしき挑みには、あだ人といふ五文字を、やすめどころにうちおきて、言の葉のつゝきたよりある心地すべかめり。」



○歌まくら 名所の歌を集めた本。  
 ○よみつきたる 讀み馴れた句調はなかなか變らぬ。  
 ○當陸の親王 末摘の父。  
 ○おこせ 末摘が。和歌の髓腦 歌作上の法則がうるさく書いてあつて禁制の條項が多かつた。  
 ○能く案内 斯様な法則に精しい末摘の作にしては此の様な歌を作するの當然な御君の明石姫君の手元にもあつたが、元は猶人 髓腦を見ぬ人は、髓腦を學ばうといふ。つぎなきからむも、念で知らないのも残る。  
 ○御返り事 末摘へ衣を返さうと云つて來たのに源が其れを押し留めた返事をやらぬのは悪い。  
 ○かへさむと 衣を裏返して著て寝るは思ふ人の夢を見るを云ふ。獨寝の寂しさを察し致します。

など笑ひ給ふ。源「よろづの草紙歌まくら、よく案内知り見つくして、そのうちの詞を取り出づるに、よみつきたるすぢこそ、つようは變らざるべけれ。常陸の親王の書き置き給へりける、紙屋紙の草紙をこそ、見よとておこせ給へりしか。和歌の髓腦いと所狭う、病去るべき所おほかりしかば、もとより後れたる方の、いとゞなかく動きすべくも見えざりしかば、むづかしくて返してき。能く案内知り給へる人の口つきにては、めなれてこそあれ。」とて、をかしく覺したる様ぞいとほしきや。上いとまめやかにて、業などて返し給ひけむ。書きとゞめて、姫君にも見せ奉り給ふべかりけるものを。こゝにも、物の中なりしも、蟲皆そこなひてければ、見ぬ人はた、心ことにこそはとほかりけれ。」と宣ふ。源「姫君の御學問に、いと用なからむ。すべて女は、たてて好めること設けてしみぬるは、さまざまからぬ事なり。何事も、いとつきなからむはくち惜しからむ。たゞ心の筋を、漂はしからずもて鎮めおきて、なだらかならむのみなむ、目安かるべかりける。」など宣ひて、御返り事はおほしもかけねば、業返しやりてむとあめるに、これより押し返し給はざらむは、ひがひがしからむ。」とそ、のかし聞え給ふ。情捨てぬ御心にて書き給ふ。いと心安けなり。かへさむといふにつけてもかたしきの夜の衣を思ひこそやれ

ことわりや。

とぞあめる。

初音

○源氏三十六歳の正月。  
 ○數ならぬ垣根つまらぬ屋敷の内。  
 ○玉を敷ける御前六條院。  
 ○まねびたてむも形容しようにも。  
 ○春のおまじ、紫の上の御殿。  
 ○姫君、紫の養女明石姫君。  
 ○少し大人びたる若い女を明石姫君の方に附けて紫には年長者許り留めて。  
 ○齒固め、元三の祝ひに鏡餅をたべる。  
 ○千年のかげに、河海、萬代を松にぞ君を祝ひつる千歳の陰に住まむと思へば。  
 「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は。」此の歌をよんで鏡餅に向ふといふ。  
 ○そほれ、戯れ。  
 ○大臣の君、源氏。  
 ○自らの、私の爲に

年立ちかへる朝の空の氣色、なごりなく曇らぬうら、かけさには、數ならぬ垣根の中だに、雪間の草若やかに色づきそめ、いつしかと氣色だつ霞に、木の芽もうちけぶり、自ら人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。ましていと玉を敷ける御前は、庭より初め見所おほく、みがき増し給へる、御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。春のおとぎの御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹きまがひて、生ける佛の御國とおほゆ。さすがに打解けて、やすらかに住みなし給へり。侍ふ人々も、若やかに勝れたるを、姫君の御方にと擇らせたまひて、少し大人びたるかぎり、なか／＼由々しく、装束有様よりはじめて、めやすくもてつけて、此處彼處に羣れ居つ、齒固めのいはひして、餅鏡をさへ取りよせて、千年のかげにしるき、年のうちの祝事どもして、そほれあへるに、大臣の君さし覗き給へれば、懐手ひきなほしつ、いとはしたなきわざかなと侘びあへり。源、いとした、かなる自らの祝事どもかな。皆おの／＼思ふ事の道々あらむかし。

○こまぶき、私が祝つてやらう。  
 ○鏡の影、君の御爲に祝ひの詞を申しました。  
 ○何ばかりの、何も望みはございませぬ  
 ○參座、源が女達の所に參賀に行く。  
 ○上には、紫には私が鏡餅を差上げる。  
 ○亂れたる事、戯談  
 ○影ぞならべる、源と紫の二人の影が。

○子の日、子の日には小松を引抜いて移植する風があつた。  
 ○おき所なく、面白くて仕様がなげ様に  
 ○北のおまじ、明石  
 ○し集め、菓子等を集めて入れた。

少し聞かせよや。我ことぶきせむ。」とうち笑ひ給へる御有様を、年のはじめの榮えに見奉る。われはと思ひあがれる中將の君ぞ、中將「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にも語らひ侍りつれ。私の祈りは、何ばかりの事をか。」など聞ゆ。朝のほどは人々参りこみて、物騒がしかりけるを、夕つ方、御かた／＼の參座し給はむとて、心ことに引きつくりひ、化粧じ給ふ御影こそ、けに見るかひあめれ。源「今朝この人々の戯れかはしつる、いと羨ましく見えつるを、上にはわれ見せ奉らむ。」とて、亂れたる事ども少しうちませつ、祝ひ聞えたまふ。

源 うす氷とけぬる池のかゞみには世にくもりなき影ぞならべる  
 けにめでたき御あはひどもなり。

紫 くもりなき池の鏡によるづ代をすむべき影ぞしるく見えける  
 何事につけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞えかはしたまふ。今日は子の日なりけり。けに千年の春をかけて祝はむに、理なる日なり。

姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北のおとぎより、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、檜破子な

○五葉の枝 鬘籠等を結びつけた作り物  
 ○年月を 姫君に會ひたいと願つてゐる私に聲だけでも聞かして下さい。  
 ○音せぬさとの 河海「今日にも初音きかせよ」音せぬさとはすむかひもなし。  
 ○言思みも 目出度い元日にも哀れを催して。  
 ○覺束なき 明石の上に姫を逢はせし。  
 ○鶯の 鶯は姫君の鬘籠の根は母君の鬘  
 ○夏の 花散里の方  
 ○時ならぬ 夏に春はふさはしくない故  
 ○近やかなる 源が花散の所に夜泊らぬ  
 ○さて 其の儘馳ぎも隠れもせずして。  
 ○縁は 前巻衣配りの時源が花散に與へた著物の色目。  
 ○やさしき方 髪が少なからず髪が隠す程でもないが、葡萄鬘して、かもじを入れて。

ど奉れ給へり。えならぬ五葉の枝に、うつれる鶯も、思ふ心あらむかし。  
 「<sup>明石</sup>年月をまつにひかれて經る人にけふうぐひすの初音聞かせよ  
 音せぬさとの。」と聞え給へるを、けにあはれと思し知る。言思みもえし給はぬ氣色なり。  
 「この御かへりは、自ら聞えたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし。」とて、御  
 硯取りまかなひ、書かせ奉らせ給ふ。いと美しけにて、且暮見奉る人だに、飽かず思ひ聞  
 ゆる御有様を、今まで覺束なき年月の隔たりけるも、罪えがましく心苦しとおほす。  
 姫君  
 ひきわかれ年は經れども鶯のすだちし松の根をわすれめや  
 幼き御心にまかせて、くだくしくぞあめる。

夏の御住居を見給へば、時ならぬけにや、いと靜かに見えて、わざと好ましきこともなく、あてやかに住みなし給へるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心のへだてもなく、哀れなる御なからひなり。今はあながちに近やかなる御有様にも、もてなし聞え給はざりけり。いと睦まじくあり難からむ妹夫の契りばかり、聞えかはしたまふ。御几帳隔てたれど、少し押し遣り給へば、またさておはす。標はけに勻ひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にはあらねど、葡萄鬘してぞ繕ひ給ふべき。我なら

○人の 花散里の。  
 ○西の對 玉鬘の方  
 ○あるべき限り 必要な道具は揃つてゐるが。  
 ○山吹 衣配りの時玉鬘へ贈つた著物。  
 ○さはらかに 髪が少ない貌、さほく。  
 ○斯くて 此の様に引取らなかつたら残念な事だつたぞ。  
 ○えしも 只で置く事は出来ぬ。  
 ○まほならず 本當の子の様になつかぬ  
 ○年頃に 引取つて僅かにしかならぬが永い間一所に居た様な。  
 ○つゝみなく 遠慮せず。  
 ○あなた 紫の方へ

ざらむ人は、見さめしぬべき御有様を、かくて見るこそ嬉しく本意あれ、心輕き人のつらにて、我に背きなましかばなど、御對面の折々には、まつ我が御心のながさをも、人の御心の重きをも、嬉しく、思ふやうなりと思しけり。細やかにふる年の御物語など、なつかしく聞え給ひて、西の對へ渡り給ふ。

まだいといたくも住み馴れ給はぬほどよりは、けはひをかしくしなして、をかしけなる童の姿なまめかしく、人かけあまたして、御しつらひあるべき限りなれども、細やかなる御調度は、いとしも整ひ給はぬを、さる方に物清けに住みなし給へり。正身も、あなをかしけと、ふと見えて、山吹にもてはやし給へる御容貌など、いと花やかに、こゝぞ疊れりと見ゆる所なく、隈なく勻ひきらしく、見まほしき様ぞし給へる。物思ひに沈み給へる程のしわざにや、髪の裾少しほそりて、さはらにかゝれるしも、いと物清けに、此處彼處いとげざやかなる様し給へるを、斯くて見ざらましかばと思ほすにつけては、えしも見過し給ふまじくや。かくいと隔てなく見奉り馴れ給へど、なほ思ふに、へだより多く怪しきが、現の心地もし給はねば、まほならずもてなし給へるもいとをかし。連年頃になりぬる心地して、見奉るも心安く、本意叶ひぬるを、つゝみなくもてなし給ひて、あなた

○初琴 明石姫君の様に琴の手ほどきを習つてゐる人もある  
 ○さもある 然るべき返事の仕方である  
 ○近き 明石の御殿に近い。  
 ○東京錦 白い唐錦を縁さしたる へりを取つた。  
 ○きん 琴か壁か。  
 ○侍従 薬物の名。  
 ○衣被香 香の名。  
 ○手習 書き散らした紙。  
 ○小松 姫君の返事  
 ○花のねぐらに 明石姫君が紫に養はれてゐる譬へ。  
 ○聲待ち 古歌未詳  
 ○咲ける岡邊に 萬葉「梅の花咲ける岡邊に家しあればさもしくもあらず鶯のこゑ。」

などにも渡り給へかし。いはけなき初琴ならふ人もあめるを、諸共に聞きならし給へ。後めたく、あはつけき心もたる人なき所なり。」と聞え給へば、玉簪「宣はむまゝにこそは。」と聞え給ふ。さもある事ぞかし。

暮方になる程に、明石の御方に渡り給ふ。近き渡殿の戸押しあくるより、御簾の中の追風、なまめかしく吹き勻はして、物より殊にけだかく思さる。正身は見えず。いづらと見まはし給ふに、硯のあたり賑ははしく、草紙ども取り散らしたるを取りつ、見給ふ。唐の東京錦のことくしき縁さしたる褥に、をかしかなるきんうちおき、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、ものことにしめたるに、衣被香の香のまがへる、いと艶なり。手習どもの亂れうち解けたるも、筋がはり、故ある書きざまなり。ことくしく草がちになどもされ書かず、めやすく書きすさびたり。小松の御返しを、めづらしと見けるまに、哀れなる故事ども書きまぜて、

明石 めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をとへる鶯

「聲待ち出でたる。」などもあり。「咲ける岡邊に家しあれば。」など、ひき返し慰めたる筋など書きまぜつ、あるを、取りて見給ひつ、ほゝゑみ給へる、恥かしけなり。筆さしぬらし

○ぬざり出で 明石  
 ○畏まりおきて 萬事上品であるが自分の態度は謙遜で。  
 ○白き 源の贈つた著物の色。  
 ○御座がれ 他の女達の氣をもませる事  
 ○南のおまじ 紫方  
 ○渡り 紫方へ歸る  
 ○かうしも そんなに早く歸らないでもよいに明石が思ふ  
 ○待ちこり 紫の。  
 ○なまけやけし 少し不愉快に。  
 ○驚かし 早く起して呉れない物だから  
 ○臨時客 攝政關白の家で正月二日から三日に行ふ新年宴會。  
 ○面がくし てれかくしをする。  
 ○なすらひ 源に似た立派な人は居ない  
 ○取り放ちて 源を除いて考へれば。

て書きすさみ給ふほどに、ぬざり出でて、流石に自らのもてなしは、畏まりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりはことなりとおほす。白きに、けざやかなる髪のかゝりの、少しさはらかなる程に薄らぎにけるも、いとまめかしさ添ひて、なつかしければ、新しき年の御騒がれもやと、つゝましけれど、此方にとまり給ひぬ。なほ覺えことなりかしと、かたぐ心おきて思す。南のおとゞには、ましてめざましがる人々あり。まだ曙の程に渡り給ひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、なごりもたゞならず哀れに思ふ。待ちとり給へるはた、なまけやけしとおほすべかめる心の中はかられ給ひて、怪しき轉寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしも驚かし給はで。」と、御氣色とり給ふもをかしう見ゆ。ことなる御答へもなければ、わづらはしくて、空寝をしつ、日高く大殿籠りおきたり。

今日は臨時客の事にまぎらはしてぞ、面がくし給ふ。上達部親王達など、例の残りすくなく参り給へり。御あそびありて、引出物祿などもなど、二なし。そこら集ひ給へるが、我も劣らじともてなし給へる中にも、少しなすらひなるだに見え給はぬものかな。取り放ちては、有職多く物し給ふ頃なれど、御前にてはけおされ給ふもわろしかし。何の數ならぬ